324
409

始

15.9.28

324-409

正信偈講義

大正
3. 9. 4
内交

正信念佛偈講義

輔教　斯波隨性

正信念佛偈

此の偈は宗祖大師「知恩報德」の爲の御製作にして載せて顯淨土眞實行文類の末尾にあり、云はく、(顯淨土眞實敎行證文類第二卷)

「誓願不可思議一實眞如海大無量壽經の宗致他力眞宗之正意也是以爲知恩報德披宗師釋言夫菩薩歸佛如孝子之歸父母忠臣之歸君后動靜非己出沒必由知恩報德理宜先啓又所願不輕若如來不加威神將何以達乞加神力所以仰告已爾者歸大聖眞言閱大祖解釋信知佛恩深遠作正信念佛偈曰」

題して正信念佛偈と云は「信心正因稱名報恩」の義を開顯す、正信と云は邪心に對す、佛の威力よく佛智と齊等なる信心を得せしむるが故に正信と云ふ之に反して自己の妄想憶斷によつて生ずるを邪信とす、念佛とは稱名なり「念」は意

の動作に就き「稱」は口の動作を示すと雖稱念と連繫するときは常に稱佛名の義なり例せば觀無量壽經中に「具足十念稱南無阿彌陀佛稱佛名故於念念中除八十億劫生死之罪」といふが如き是なり、偈とは印度にては(Gatha)の音にして支那の「偈陀」「伽陀」と云ふは此の音を寫せしなり、字句を齊一ならしむる印度の一の文學なり、佛の說法に於ても數々(Gatha)を用ひ玉ふ乃はち十二部說經中の一なり元來印度に於ては(Gatha)を讃美するの風あり彼の有名なる(Mahabharata)は十萬句を以て成る。

今偈は六十行百二十句の短偈なりと雖經典の宗致列祖の妙義攝盡せずといふ事なく緇素老少村童牧豎諷誦親膾識らざるの問に光明界裡に入る實に敬重すべき妙句なり、而して最初の二句は光明壽命の二德を提げて惣標し次に前段として四十二句は大無量壽經の宗致を述す偈前の文に「大無量壽經之宗致他力眞宗之正意也」といひ或は「歸大聖眞言」と言ふに該當し後段「印度西天之論家」より以下七十二句は(Nagaradjuna)龍樹、(Vasubandhu)天親、(印度)曇鸞、道綽、善導(支那)、源信、源空、(日本)三朝の七高祖と稱す)列祖の釋義を抄出し偈前に「閱大祖解釋」といふ是なり、末段「弘經大士宗師等」の四句は總結の文なり初發の二句と「歸命無量壽如來、南無不可思議光」と星應せば自信敎人信自利利他宗祖の深意、一偈の構成鑽仰するに愈高堅たり。

歸命無量壽如來　南無不可思議光

南無は梵音、歸命は其の漢譯、梵漢並べ擧て文章を成す、歸は歸順、命は命令、或は勅令なり、無量壽如來不可思議光佛に信順するの謂ひなり、偈前に於て「夫菩薩歸佛如孝子之歸父母忠臣之歸君后動靜非己出沒必由知恩報德理宜先啓又所願不輕若如來不加威神將何以達乞加神力所以仰告」と云へる婆藪槃頭の「世尊我一心」と仰告せるに範を取り自餘の章句悉く是れ經典の精華列祖の妙義、由起する處を知らしむ、又謂はく無量壽如來不可思議光佛は一佛の二號に非ずして無量壽(壽命無量之德)不可思議光(光明無量之德)如來と稱する一號なり、此の光壽二德を具備するの一佛號なり、此の二德の威力よく一

切衆生をして信順せしめ玉ふ正信は是なり、更に自信の發起する處に非ず、然らば命を待たずして歸あるに非ず、歸は命より生ず歸命せしむるの力用南無せしむるの造作は全く佛力に存す、故に此の二句最初に安して他力大法の淵源、炳として明らかに、眞宗の妙義其の流出する處を了らしむ、梵音に於て（Amitayusha）是れ无量壽の義、（Amitabha）是れ无量光の義なり。

光と壽何れかを異名とするに非す全く一佛號なり具さに謂はゞ、歸命無量壽不可思議光如來、或は、南無不可思議光無量壽佛、と稱すべきなり、句頌躰を爲して初句に漢音を冠し後句に梵音を擧て佛の字を省く、時間的に於て（無量壽）空間的に於て（無量光）横豎の二方面より其の鴻大の佛德を以て名號とせり、如來とは梵音（Tathagata）にして佛十號の一なり、眞如より來現するの義なり。

顯淨土眞實證文類に「彌陀如來從」如來生示現報應化種種身也」といへり、梵音常に（Tathagata-arhat-samyaksambuddha）如來、應、正偏智、と連繫して常に稱號せり、觀無量壽經には此の例あり「多陀阿迦度、阿羅訶、三耨三佛陀」と譯するも

一の是なり。

法藏菩薩因位時　在世自在王佛所

已下百十四句は大無量壽經及び相承七祖（上に擧ぐ）の論釋に據て他力眞宗の綱要を頌述す中に於て初めの四十二句は大無量壽經の意、（依經段と稱す）、次ぎの七十二句は相承の論釋に依る、（依釋段と稱す）、今は一偈の組織に就て其の大科を圖示せば左の如し。

歸命無量壽如來　南無不可思議光（二句）……惣標

法藏菩薩因位時止　重誓名聲聞十方（八句）……因德
普放無量無邊光止　必至滅度願成就（十句）……果德
如來所以興出世止　難中之難無過斯（二十四句）……釋迦述成
印度西天之論家止　明如來本誓應機（四句）……惣嘆七祖
釋迦如來楞伽山止　應報大悲弘誓恩（十二句）……龍樹
（十住毘婆娑論易行品）七祖聖教卷上

彌陀因果
依經

天親菩薩遠論説止入生死薗示應化（十二句）……天親
（無量壽經優婆提舍＝淨土論）七祖聖教卷上
本師曇鸞梁天子止諸有衆生皆普化（十二句）……曇鸞
（往生論註）七祖聖教卷上
道綽决聖道難證止至安養界證妙果（八句）……道綽
（安樂集）七祖聖教卷上
善導獨明佛正意止即證法性之常樂（八句）……善導
（觀經疏及往生禮讃、法事讃、觀念法門、般舟讃）七祖聖教卷中
源信廣開一代經止大悲無倦常照我（八句）……源信
（往生要集）七祖聖教卷下
本師源空明佛教止必以信心爲能入（八句）……源空
（選擇本願念佛集）七祖聖教卷下
弘經大士宗師等止唯可信斯高僧説（四句）……惣經

別頌七祖

依釋段

法藏菩薩因位時より以下八句大無量壽經上卷「爾時世自在王佛」より重誓偈までの經意を述べ卽ち因位の相を顯はし玉ふ、法藏菩薩とは阿彌陀如來の因位の名にして梵語に(Dharmakara)と云ふ平等覺經は法寶藏、如來會は法所、華嚴經は作法、智度論は法積、と譯せり、今は魏譯無量壽經の名に依れり、菩薩とは梵音に(Bodhisattva)と云ふ上法を諸佛に求め下衆生を化益し自利利他の行者を云ふ往生論註上に曰く

菩薩者若具存＝梵音＝應＝云＝菩提薩埵＝菩提者是佛道名薩埵或云＝衆生＝或云＝勇健＝求＝佛道＝衆生有＝勇猛健志＝故名＝菩提薩埵＝今但言＝菩薩＝譯者略耳

因位時とは正覺（妙覺とも稱し佛、如來を云ふ、佛は一切處に通達して明了ならずと云ふ事なく、所謂煩惱界に迷惑し、無明長夜の夢未だ醒めざるの衆生に對して覺と云ふ、善導の玄義分に云はく「自覺覺他覺行窮滿」）果滿に對せば修行中が因位時なれども今は初發心時を指す、經の「行作沙門號曰法藏」の文に當る、世自在王佛とは梵音には(Lokesvararaja)と云ひ師匠佛なり、此の佛の出世に

際し法藏菩薩國王たり、出家發心して沙門となり下に述ぶるが如き大願を發起し大行を修し遂に無量壽、無量光、卽ち(Amitayus)(Amitabha)となり玉ひしなり委くは經文にあり。

觀見諸佛淨土因　國土人天之善惡

大無量壽經に云はく

「世自在王佛卽爲廣說二百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之麤妙應其心願悉現與之時彼比丘聞佛所說嚴淨國土皆悉觀見」

觀見とは觀は目擊を意味し、見は心察を意味す、智眼を以て分明に視察するを謂ふ、經文には聞を云ふ今是れなきは略して攝するのみ、諸佛淨土因とは十方の諸佛各淨土を建立するの因行を謂ふ、亦た自から衆生往生の因行も觀見の理存す、國土人天之善惡とは國土は器、「器世間にして非情の方面)、人天は衆生(衆生世間にして有情を云ふ)、諸佛淨土の果相なり、有情豈たゞ人天のみならんや、聲聞、緣覺、菩薩、(是を三乘衆と稱し聖者と云ふ一分の開覺者にして凡夫に非ず)の存在せりと雖、今且らく卑近の相に寄せて人天を擧ぐるのみ、蓋し淨土門の法(釋尊一代の佛敎を判じて一を淨土門と云ふ淨土眞宗の三部妙典是なり、他を聖道門と云ふ自餘の諸經悉く之に入る、委くは下にあり)所對機類は智惠淺短、凡夫正爲にあるが故に、能く近く喩を取るを常格とせり、善惡とは經文によれば委く善惡麤妙といふべきなり、諸佛國土の因行、果相、觀見するの由は其の麤惡を去つて(選擇)善妙を取る(攝取)にあり、宗祖大師之を和述して云はく(淨土和讃)

南無不可思議光佛　饒王佛ノミモトニテ
十方淨土ノナカヨリゾ本願選擇攝取スル

爾るに往生論註には

「佛本所以起此莊嚴淸淨功德者見三界是虛僞相是輪轉相是無窮相如蚖蠖循環如蠶繭自縛哀哉衆生締此三界顚倒不淨欲置衆生於不虛僞處於不輪轉處於不無窮處得畢竟安樂大淸淨處是故起此淸淨莊嚴功德也」とあつて三界穢

土の相を見て（三界とは娑婆にして穢土なり淨土の淸淨に對して娑婆の不淨處を穢土といふ、欲界、色界、無色界、を三界といひ俱に煩惱に汚濁せらるゝの境界たり）大慈悲心を起し淸淨莊嚴の功德を成じ玉ふ。

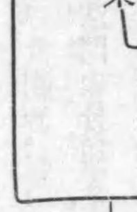
又選擇集には

「第一無三惡趣願者於所覩見之二百一十億中或有有三惡趣之國土或有無三惡趣之國土卽選捨其有三惡趣蠕惡國土選取其無三惡趣善妙國土故云選擇也」

是亦た次上論註の文と同意義なり、法藏の覩見汎く淨穢に通ずる事明らかなり、今ま經文及偈頌たゞ淨土のみを言ふもの蓋し菩薩の本意に就て其の選取の境を擧て選捨の穢土を省略せしもの、淨土建立を要とするが故なり。

建立無上殊勝願　超發希有大弘誓

大無量壽經の「超發無上殊勝之願」又た「發斯弘誓建此願巳」、及如來會（唐譯の大無量壽經）の「廣發如是大弘誓皆巳成就世間希有」の意を取りて法藏發願の相を明す、無上殊勝願と云ひ希有大弘誓と云ひ、法藏の發願の大深勝にして、衆生の善惡賢愚を問はず悉く他力（佛の威力を云ふ）を以て之を攝取し救濟せんとするの誓願なるが故なり、無上、殊勝、希有、と嘆語を重複して諸佛の本願に對比して其倫匹する處なきを知らしむ、大弘誓とは大は（Maha）にして漢譯、大、多勝、の三義あり、卽ち法藏の所誓、廣大にして（大）、利益無量なること（多）、殊勝の本願なるを（勝）、大弘誓と云ふ、大はたゞ其の一端を擧ぐ弘誓とは廣誓弘願にして、聖者（菩薩、緣覺、聲聞）、凡夫（天、人）を問はず、善惡賢愚を論ぜず、齊しく攝化するの誓願なるが故なり之を五乘齊入の法と稱す、（菩薩、緣覺、聲聞、天、人之を五乘と云ふ）、今ま便に乘して因に衆生を機類を分類し其の通語を圖示せば



（乘とは駕乘の義にして和訓すればのりものの義なり機類に應じて各其の法差別ある意義に於て乘の字を用ふ、世間一、二、三等、若くば上、中、下等の、船車あるが如し、大乘、小乘といふ法門の分類も亦た之に同じ）

建立、超發、の願は大無量壽經には「如我所願當具說之」と四十八願の誓願を出す中に就て別しては第十八の願を指す、下に於て辨ぜん、この願數に就て諸譯各不同なり。

一、無量壽經　四十八願
二、無量淸淨平等覺經　二十四願
三、大阿彌陀經　二十四願
四、無量壽如來會　四十八願
五、無量壽莊嚴經　三十六願
六、英譯極樂莊嚴經　四十六願

諸譯願數において多少相違ありと雖、具略の別にして大概之れ同じ、然れども魏譯と唐譯と願數等しく四十八にして少數の經と比較して完全なりと謂ふべし略說は具說に如かざるなり。

五　刼　思　惟　之　攝　受

大無量壽經に「具足五刼思惟攝取莊嚴佛國淸淨之行」との王ふはこの意なり。

五刼とは刼とは梵語(Kalpa)分別時節と翻譯す悠久なる時節の名稱なり。

安樂集上に智度論を引て云はく

第二明刼之大小者如智度論云刼有三種謂一小二中三大如方四十里城高下亦然滿中芥子有長壽諸天三年去一乃至芥子盡名一小刼或八十里城高下亦然滿中如前取盡名一中刼或百二十里城高下亦然芥子滿中取盡一同前說方名大刼或八十里石高下亦然有一長壽諸天三年以天衣一拂天衣重三銖爲拂不已此石乃盡名爲中刼其小石大類前中刼可知

思惟とは思慮にして无上希有の大願よく一朝一夕の思慮に非ず五刼經歷の功

なり、攝受とは語を唐譯如來會に取る、攝受、攝取、選擇、其の言異なりと雖、其意は一なり、之の語中間に介在して上下に兩屬し之を思惟し之を攝受すと讀むべき意なり。

重誓名聲聞十方

大無量壽經の重誓偈は言はく「我至成佛道、名聲超十方、究竟靡所聞、誓不成正覺」の意に依る、法藏發願の要を示し、上の因相を結成して下の果德を起すの要句たり、重聲とは上に四十八願を說き畢つて更に其の要を取つて三種の誓約を建て玉ふを云ふ、三種の誓約とは經に言はく

我建超世願　必至無上道　此願不滿足　誓不成正覺
我於無量劫　普爲大施主　普濟諸貧苦　誓不成正覺
我至成佛道　名聲超十方　究竟靡所聞　誓不成正覺

此の三誓の中今は第三の意に依つて句を成ずるは第一と第二は希望又は目的を申ぶ、第三は希望目的に契ふ手段と言ふべく乃ち聞其名號は眞宗の要關なればなり、宗祖大師は行卷の初めに第十七願を釋して（顯淨土眞實行文類二）、此の文を引用し玉ふ、大悲の攝化諸佛をして名號を咨嗟讃嘆せしめ衆生に聞かしむるを詮要とす、大悲攝化は十七願に於て顯はる、第十八願は攝化すべき物質を成就せるなり、此の一句は第十七願誓によつて作願し玉ふの宗祖の深意玩味すべきなり、名聲とは阿彌陀佛の他力を以て衆生を攝化し玉ふの意を表詮したる名號をいふ、名號卽ち彌陀の口業功德なるを以て名聲と云ふ。

往生論註下に曰く「衆生聞阿彌陀如來至德名號（是名）說法音聲（是聲）」此意なり、聞十方とは名號成就せりと雖も之を十方世界に流布せしめざる時は衆生其の利益を蒙むるに由なし故に十方の諸佛をして讃嘆流行せしむるにあり、第十七の誓願誠に由あるかな、聞かしめ玉ふ如來微妙聲、諸佛咨嗟十方に響流し衆生之を聞て信心歡喜す、衆生の聞信も、諸佛の咨嗟も、全く彌陀口業功德力な

り仍て今其本に歸して聞十方と云ふ。

普放無量無邊光　無碍無對光炎王
清淨歡喜智慧光　不斷難思無稱光
超日月光照塵刹　一切群生蒙光照

以上の六句は、阿彌陀佛の誓願成就して、正しく果上に在りて一切衆生を攝化したまふ相狀を明さるゝ一段なり、上に出されたる本願と重誓と、虛しからず成就して、既に十刧といへる悠久なる時間已前に、阿彌陀佛とならせたまひしなり、其の佛は現に西方に淨土を搆へ、光明と壽命と共に無量の德を具備して、阿彌陀佛と名のらせたまふなり。

大無量壽經に曰く。

阿難、佛に白さく、法藏菩薩已に成佛して滅度を取りたまふごや爲ん、未だ成佛したまはずごや爲ん、今現に在すごや爲ん、佛阿難に告げたまはく、法藏菩薩今已に成佛して、現に西方に在ます、此を去ること十萬億刹なり、其の佛の世界を名づけて安樂といふ、阿難又問ふ、其の佛成道已來幾くの時を經たりと爲ん、佛言く、成佛已來凡そ十刧を歷たり。

と、此の阿彌陀佛の覺体には无量の功德を備へたまふ、然れども光明と壽命とこの二德を擧げ以て一切の餘德を攝收したまふなり、仍て此の經に又此の佛の壽命无量なることを說て曰く。

佛阿難に語りたまはく、無量壽佛の壽命長久にして稱計すべからず、汝寧んぞ知らんや、假使ひ十方世界の無量の衆生皆人身を得て悉く聲聞緣覺を成就せしめ、都て共に集會し禪思一心に其の智力を竭し、百千萬刧に於て悉く共に推算して、其壽命長遠の數を計るとも、窮盡して其の限極を知ること能はず。

と、此の壽命無量の佛体より、放發したまふ所の光明の力用の威大なること亦量り知ること能はざる所なり、經に又曰く、

佛、阿難に告げたまはく、無量壽佛の威神光明は、最尊第一にして諸佛の光明の及ぶ能はざる所なり、(略中)是の故に無量壽佛を無量光佛、無邊光佛、無礙

光佛、無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號す。

と、光明の德を開いて十二種を擧げたまへり。

又阿彌陀經には阿彌陀佛の名義を說示したまふに、光壽無量を明し左の如く要約したまへり。

舍利弗、汝が意に於て云何、彼の佛を何が故ぞ、阿彌陀と號する、舍利弗、彼の佛の光明無量にして十方の國を照すに、障礙する所なし、是の故に號して阿彌陀とす、又舍利弗、彼の佛の壽命及び其の人民も無量無邊阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名く。

と、是れ光壽の無量なることは、諸佛にも通ずべき德なるに、持に阿彌陀佛の別德として之を擧げ、以て阿彌陀の名を得たまへる所以を說かれたり、是れ他なし、阿彌陀佛は自己の光壽無量と共に他の衆生をも其の德を一にせしめたまへるが故に、諸佛の自證の上にのみ光壽無量の德を備へたまふことは、大に超異せる所以あればなり、されば經には彼の佛の壽命及び其の人民も無量無邊阿僧祇劫と說かれたり、壽命既に然り光明亦然るべきことは自明の理といふべし。

此の如く光壽无量の德を備へて阿彌陀佛といふ名を成就したまへる佛陀は、他の衆生を救濟したまふに方りては、其の光明と名號とを以て十方の衆生を攝取し敎化したまふ、卽ち先づ光明を以て未信者を照育し、聞法の因緣を調熟せしめ、以て名號の他力救濟を知らしめ、既に名號を信ずる人となりなば、それと同時に其の人を攝め取りて捨てたまはざる、所謂攝取の光明を以て護念したまふなり、此の義を善導大師釋して云く、

然るに彌陀世尊、本深重の誓願を發して、光明と名號とを以て、十方を攝化したまふ、但信心をして求念せしむれば、上一形を盡し、下十聲一聲等に至るまで、佛願力を以て往生を得易し。

と、是を以て今の偈頌に光明と名號とを讃述し、次で信心を以て往生淨土の正因となすことを示さるゝなり。

今將に十二光の大意を解釋すべし。

一に無量光とは、阿彌陀佛の光明は、縱に時間的に之を云はゞ、過去現在未來に亘りて、限量なき長遠なる利益を施したまふをいふ。

二に無邊光とは、阿彌陀佛の光明は、横に空間的に之を云はゞ、東西南北四維上下の十方に遍滿して、更らに邊際なく緣として照したまはざることなきをいふ、是れ光明の廣大なる德を顯はしたまふなり。

三に無礙光とは、上の二光に顯はされたる三世に徹貫し十方に遍滿せる光明の本体より、放發したまふ所の力用を總稱する名にして、其光明の威神の力用不可思議にして、一切の障礙法に障へられたまはざるをいふ、卽ち其障りとは內障外障の二なり、內障とは貪欲、瞋恚、愚痴等の我等の心內に潛める煩惱にして、我等の轉迷開悟の障となるものをいふ、外障とは山河大地雲霧烟霞等をいふ、此等一切の內障外障に障へらるゝことなく無礙自在に照破したまふをいふ。

四に無對光とは、上の無礙光の總用に對して、以下廣く其の別德を明す中、先づ彌陀の光明に比對すべきもの他にあることなきを嘆ず、大經に「諸佛光明所不能及」とあるもの之れなり。然るに顯名鈔及び正信偈大意に「無對光佛といふは、ひかりとしてこれに相對すべきものなし、もろ〳〵の菩薩のをよぶところにあらざるがゆへなり」とありて、諸佛の光明の及ぶところにあらずといはれざりしは、高祖眞佛土卷に御引用の憬興師の釋に依られしものにして、諸佛所證平等是一といふ點よりいへば、佛々の光明は皆同等なるわけなるゆへに、菩薩の及ぶ所にあらずといはれしなり。されど彌陀は是れ十方諸佛の本師法王にして、諸佛はもと彌陀によりて成等正覺せられしものなるゆへに、菩薩の及ばざるところやがて諸佛の及ばざるところなり。されば憬興師の菩薩に付て比對せしは其因位につきしものにして、大經に諸佛光明所不能及と說かれしと其の意同じきなり。又對には敵對の義＝＝反對し妨害する義あり、今彌陀の光明には、之れに敵對し、之れを妨害し能ふものなきを以

て無對光と名づく、大經に「遇斯光者、三垢消滅」とあるもの此の義にして貪欲、瞋恚、愚痴(三垢)等の一切の煩惱惡業も、彌陀の光明に遇へば悉く皆消滅するなり。淨土和讃には此の光明を「清淨光明ならびなし(無對)、遇斯光のゆへなれば、一切の業繫ものぞこりぬ、畢竟依を歸命せよ」と讃じたまへり、業繫は衆生流轉の業因なり、卽ち此の光明は苦の因を斷破したまふなり。

五に光炎王とは又炎王光と云ふ、炎とは光明の熾盛なることを顯はし、王とは自在と最勝の二義を顯はす、大經に「猶如火王燒滅一切煩惱薪故」とあるもの之れなり。顯名鈔及び正信偈大意に此の意を敷演して「光明自在にして無上なるがゆへなり」と云ひ「火をもてたきゞをやくに、つくさずといふことなきがごとく、光明の智火をもて煩惱のたきゞをやくに、さらに滅せずといふことなし」と云へり。又大經に「若在三塗勤苦之處見此光明皆得休息無復苦惱壽終之後皆蒙解脫」とあるをば「三塗黑闇の衆生も、光照をかうふりて　解脫をうるは、このひかりの益なり」と釋せり。淨土和讃に「佛光照曜最弟一、光炎王佛となづけたり、三塗の黑闇ひらくなり、大應供を歸命せよ」と讃じたまへるもの、卽ち此の意にして、三塗は三惡道(地獄、餓鬼、畜生)なり、上の無對光の苦因を破すると相幷びて、此の炎王光は苦果を照破したまうことを嘆ずるなり。

六に清淨光とは、前の無對、炎王の二光を以て衆生流轉の因果を照破したまうに對し、以下は廣く衆生往生の因果を成滿せしめたまうことを明す中、此の清淨光と次の歡喜光及び智慧光の三は、佛の三光を以て衆生の三毒(貪欲、瞋恚、愚痴)を破し、以て往生の正因たる三信(至心、信樂、欲生)を成滿せしめたまうことを明す、淨土和讃に「無礙光佛のひかりには、清淨、歡喜、智慧光、その德不可思議にして、十方諸有を利益せり」と云ひ、次に之れを承けて「至心、信樂、欲生と、十方諸有をすゝめてぞ、不思議の誓願あらはして、眞實報土の因とする」と陳べたまへるもの、正しく此の意を顯はされたるなり。中に就て清淨光とは、如來の無貪の善根より放ちたまう光明にして、能

く衆生の貪欲を除き、如來清淨眞實の至心を回向したまふ、之れを淨土和讃には「道光明朗超絶せり、清淨光佛ときまうすなり、ひとたび光照かふるもの、業垢をのぞき解脫をう」と讃じたまへり。

七に歡喜光とは、如來の無瞋の善根より放ちたまう光明にして、能く衆生の瞋恚を破り、以て欲生の信心を起さしめたまふ、之れを淨土和讃には「慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ」と讃じたまへり。

八に智惠光とは、如來の無癡の善根より放ちたまふ光明にして、能く衆生の愚癡、卽ち佛智を疑惑する心を破りて、無疑の信樂を起さしめたまふ。之れを淨土和讃には「無明の闇を破するゆへ、智慧光佛となづけたり、一切諸佛三乘衆、ともに嘆譽したまへり」と讃ぜらる。明信佛智の信心に對し、疑惑佛智を「無明の闇」と名づく、此の闇、智慧光の爲に照破せられぬれば、其の時無疑の信樂に安住するなり。

九に不斷光とは、顯名鈔及び正信偈大意に「一切のときに、ときとしてたらさずといふことなし、三世常恒にして照益をなすがゆへなり」と釋せられたり。之れ前の三光を以て發起せしめたまひたる三信を、常恒不斷に相續せしめたまふ光明にして、淨土和讃には之れを「光明てらしてたへざれば、不斷光佛となづけたり、聞光力のゆへなれば、心不斷にて往生す」と讃じたまへり。卽ち前の三光を以て初起の三信を成就し、此の不斷光を以て後續の信心を成就す、共に衆生往生の因を成滿したまふ光明なり。

十に難思光とは、心を以てはかるべからざるを言ひ、次の無稱光とは、語を以てはかるべからざるを言ふ。顯名鈔及び正信偈大意に曰く「こゝろをもてはかるべからざれば難思光佛といひ、ことばをもてとくべからざれば無稱光佛と號す。無量壽如來會には、難思光佛をば不可思議光となづけ、無稱光佛をば不可稱量光といへり」と。而して此の二光は、前の四光を以て衆生往生の因を成就するに對し、衆生往生の果を成滿せしむ。中に就て此の難思光は往生を

得しむる光明なり、淨土和讃に「佛光測量なきゆへに、難思光佛となづけたり、諸佛は往生歎じつゝ、彌陀の功德を稱せしむ」とあるもの是れなり。

十一に無稱光とは、名義前に陳ぶるが如し、難思光を以て往生を得しめ、此の無稱光を以て成佛せしむ、淨土和讃に曰く「神光の離相をとかざれば、無稱光佛となづけたり、因光成佛のひかりをば、諸佛の嘆ずるところなり」と。もとより往生卽成佛なれども、今光明の別德を讃嘆する爲に、しばらく二つに分ちたるなり。

十二に超日月光とは、上來の十一光直ちに如來の光明に就て其の別德を嘆ずるに對し、しばらく世間の日月に比較して、其の德の超勝せることを明す、故に第十二次にありと雖、實は前の十一光一一みな超日月光なり。顯名鈔及び正信偈大意に曰く「日月はたゞ四天下をてらして、かみ上天にをよばず、しも地獄にいたらず。佛光はあまねく八方上下をてらして障礙するところなし、かるがゆへに、日月にこへたり」と、超日月の相以て知るべし。但し如來の光明の不可思議なることは、日月の光りを以て比較とすべきに非れども、世間衆生の知れる光りの中にては、日月最も勝れたり、故にしばらく彼れに比較して其の超勝の德を知らしむるなり。

以上十二光は、如來に十二種の光明ありといふに非ず、しばらく十二名を以て光明の體相德用を稱讃したるなり。顯名鈔に曰く「この十二光佛は、一一の德につきてその名をあげたり、別體なるにはあらず」と。其の數大經諸譯によりて不同あり、平等覺經（漢譯）は九光、大阿彌陀經（吳譯）は十光、無量壽經（魏譯＝正依）は十二光、如來會（唐譯）は十五光、莊嚴經（宋譯）は十三光、梵本は十九光なり、今十二光に就て、其の別德を表示すれば左の如し。

- 直讃
  - 光體
    - 竪常
      - 無量光
    - 横遍
      - 無邊光
  - 光用
    - 總用
      - 無礙光
      - 無對光
      - 炎王光
    - 「破德
      - 破因
        - 業因
        - 破果
          - 苦果

- 別德
  - 滿德
    - 滿果
      - 成佛
        - 無稱光
      - 往生
        - 難思光
    - 滿因
      - 後續
        - 不斷光
      - 初起
        - 智惠光
        - 歡喜光
        - 清淨光
- 比較
  - 超日月光

照塵刹とは上の普放の句に應ず、刹とは刹土なり、世界若しくは國土といふに同じ。塵とは塵數の略、無數無量を意味す、卽ち如來の放ちたまふ光明は、十方塵數の如き無數無量の世界を照して到らぬところなきが故に、普放といひ照塵刹といふなり。

一切群生蒙光照とは、群生とは有情又は衆生と云ふに同じ、國土無量なることを顯はして塵刹といひしが故に、其の中の有情も亦無數なることを示して群生といひしなり。

本願名號正定業　至心信樂願爲因

此の二句は茲に在りて、上に向ひ下に對して義を顯はすの文にして、上に向ふ時は光明(上に十二光を喫す)と名號と信心との三の因緣を明したまふの文となるなり、此の時は禮讃四左に以二光明名號一攝二化十方一、但使二信心求念一、とのたまへる文意にして光明、名號、信心といふ次第になるなり、之を行卷三十八丁には光明の緣を母に喩へ、名號の因を父に喩へ、信心の內因を業識に喩へられたり、斯く報土に往生して證果を開く身を、父母の因緣により業識と相待て、生ずる所の子と喻へられたり、此の狀態を圖解すれば左の如し

譬喩

- 子
- 業識
  - 內因
- 母
  - 外緣
- 父
  - 內因
  - 外緣

合法

- 子
- 業識
  - 信心
  - 內因
- 母
  - 光明(外緣)
- 父
  - 名號(內因)
  - 攝取不捨
  - 外緣

報土眞身

今の偈文が初句は名號、次句は信心を明さるゝ故に、上の光明を示されたる句に向ふ時は、光明の縁、名號の因、信心の内因との三の因縁を明さるゝことなるなり。

若し又下に對する時は、下には滅度の證果を出されたるが故に、それに對すれば此の所には、眞實の行(名號の)こと眞實の信こを明され、下に眞實の證を明されしことゝなるなり。

此の如く此の二句は、上に向へば光明名號信心の三因縁を明し、下に對すれば行信證の三法を示さるゝことゝなり、中間に在りて前後に照應する頗る巧妙の句なり、最も仰ぐべし、蓋し此の二句は今偈一部の肝要、淨土眞宗の骨目なり、左れば繁を厭はず眞宗法義の大要を辯じ、以て今の句意を解し易からしめんと欲するなり。

抑も眞宗の法門は悉く阿彌陀如來の願心より起りしものなり、彌陀と諸佛と異なる所以は、其の本願の相違せるが故なり、阿彌陀佛には他力本願のありて一切衆生に自力を要せしめずして救濟し給ふ、是れ諸佛の企及し得られざる別異の存する所なり、而して其願に四十八あり、中に就て宗祖大師は特に五願を摘出し、以て眞實となし、眞宗法門の大要之によりて組織せられたることを示されたり、其五願とは、

第十二に光明無量の願、自ら光明無量の佛とならんこなり、
第十三に壽命無量の願、自ら壽命無量の佛こならんこなり、
第十七に諸佛稱名の願、諸佛をして我が名を稱揚せしめんこなり、
第十八に至心信樂の願、諸佛稱揚の名を聞て信する者を往生せしめんこなり

第十一に必至滅度の願、往生せは卽ち成佛(度滅)せしめんこなり

之を要するに光壽の二無量は、佛の正覺の果體を誓はれしものにして、其の中に於ても、壽命は体にして光明は其の用なり、此の二は且らく体用の別ありこ雖も、共に衆生を攝取し化益したまふの大本なり、其の攝化の相狀をいはゞ、

佛の正覺たる光壽二無量の德をは、一句の南無阿彌陀佛に攝めて、此の名號を十方諸佛に咨嗟讃嘆せしめて、以て十方衆生に施し、之を聞信せしめんとなり是れ第十七願にして、此願を亦往相廻向の願とも名けられたり、而して其の名號を聞きて信心歡喜の身とならしめ、以て往生の因を滿足せしめんとの誓あるもの、是れ第十八願の意なり、更に此の信心の益として、現生に在りては正定聚の位に住せしめ、當來に必ず滅度に至らしめんと誓ひたまひしもの、是れ第十一願の意なり、之を圖示すること左の如し

- 眞實五願
  - 第十二願　用（所發の光用）
  - 第十三願　体（能發の壽体）
  - 第十七願　名號廻施（所聞の名號）
  - 第十八願　信心正因（能聞の信心）
  - 第十一願　現當兩益
- 攝化の根本
- 因
- 果
- 攝化の相狀

以上の法義を會得せし上にて、今の二句を解せんには、上に向ひ下に對する文意、自ら釋然たるものあらん。

先づ初めに本願名號正定業の一句を釋せは、是はこれ第十七願の意を顯はされたるなり、本願とは阿彌陀佛の本と菩薩たりし時の誓願をいふ、名號とは六字の名號、南無阿彌陀佛をいふ、第十七願に左の如く誓ひたまへり、

設我得レ佛、十方世界、無量諸佛、不三悉咨嗟稱二我名一者、不レ取二正覺一

と、此の願の意は、設ひ我れ佛を得たらんに、十方世界の無量諸佛をして、悉く我が名を咨嗟し稱讃せしめんとなり、而して其咨嗟し稱讃せしめたまふ所以は、十方衆生をして名號を聞信せしめんがためなり、是に於てか此の願の成就の文に、左の如くのたまへり

十方恒沙諸佛如來、皆共讃二嘆無量壽佛、威神功德不可思議一

と、三世十方の諸の如來、其の出世の本懷として、何れも皆彌陀の名號を讃嘆し給ふは、實に此の第十七願の誓あるがためなり。

正定業とは、二義を以て解すへし、一に正選定の業と解すへし、此の意は阿彌陀如來の昔法藏比丘たりし時、衆生濟度のために、此の名號を選び取りたまひ、以て衆生往生の因法を確定したまふをいふ、又一には正決定の業を解すへし、此の意は名號一法を以て、衆生往生の因法を全成したまふ、衆生之れを聞信せざるは已む、能く此の名號を聞信すれば、必ず淨土に往生すべし、此の意を正信偈大意に釋して云く、

十方ノ諸佛ニ、ワカ名ヲホメラレント、誓ヒマシ〳〵テ、ステニソノ願成就シタマヘルスカタハ、卽チイマノ本願ノ名號ノ躰ナリ、コレ卽チワレラカ往生ヲトクヘキ行躰ナリトシルヘシ、と。

業とは、造作又は業因の義なり、卽ち佛は本と衆生に代りて、諸善萬行を造作して、之を名號中に攝めて以て衆生に施與したまふなり、衆生之を領受して以て往生を決定するなり、故に名號は衆生往生の因となるべき德用あるが故に、業因の義を談すへきなり。

之を要するに、第十七願に於て諸佛をして、我が名を咨嗟せしめんと誓ひたまへる名號は、是れ正しく十方の衆生を濟度せしめんがために選定したまひしものにして、此の名號こそ、諸の善法を攝し、諸の德本を具したまふ、萬行圓備の嘉號にして、衆生のための往生の因となるべき法なりと示さるゝなり、是を以て、衆生此の名號を領受せし處に往生の正因は決定するなり、此の意は卽ち、次の句にのたまふ所なり。

次に至心信樂願爲因の句を解すべし、是れ第十八願の意を頌述したまふものなり、其の願文を示さば左の如し、

設我得レ佛、十方衆生、至心信樂欲レ生二我國一、乃至十念、若不レ生者、不レ取二正覺一

此の文の意は、設ひ我れ佛を得たらんに、十方の衆生、我が名を聞きて信心を發し、往生安堵の思に住して、我が名を稱せんものあらんに、此の者若し我が國に往生せずば、正覺を取らずとなり、今の一句は此の願文に基きてのたま

ふものなれば、一應此の願意を心得るの必要あり。

抑も此の願は阿彌陀如來の四十八願中、最も至要の本願にして、衆生往生の因を誓ひたまへるなり、十方衆生とは、男女貴賤、智愚賢鈍を簡ばす、一切平等に救濟したまふの意を顯はす、至心信樂欲生我國とは、之を本願三心の文と稱して、正しく衆生往生の正因なり、至心とは眞實心を云ふ、凡夫虚僞の情想を捨てゝ、佛の眞實心に一致するをいふ、其の相狀は信樂是れなり、信樂とは信知愛樂と熟字して、曇の名號正定業の道理を聞きて、一點の疑心なく、佛の慈悲を好もしく思ふ心をいふ、欲生我國とは、佛願の故に我國とのたまへども、衆至が之を信受せる場合に於ては、彼國に生れんと欲するなり、即ち淨土に往生せしむるとの佛勅なるが故に之に對し淨土に向つて生れんと欲する心あるなり、之を要するに、無疑の信相は中間の信樂の文字能く之を顯はし、其の信樂の体眞實なることを示して至心とのたまふなり、而して其の信樂に義として欲生の心あるが故に、惣して至心信樂欲生とのたまふなり、然れば則ち三心とはいへども、佛勅に歸依し歸順する所の一信心に外ならざるなり、是を三心卽一の信と云ふなり、今至心信樂願とのたまひしは、七言の句を整へんがために、欲生の字を略したまふなり、又開合自在なる旨を示したふの意あるへし、乃至十念とは十遍の稱名をいふ、乃至の字を冠せるは、稱名の徧數に限りあるにあらず、唯た一個の滿數を擧けて、十念とのたまふものにして、其實信後相續の報謝の稱名にして、長壽を保つ人にありては、念々相續して佛恩を感謝すべし、若し夫れ不幸短命にして、佛勅を聞き終りて死する人に於ては、更に其の稱名の有無にかゝはらざる意を顯すなり、若不生者不取正覺とは、是れ誓約の語なり。

以上本願の文意を略辯し終れり、今此の句中に、至心信樂願爲因とのたまふは、信する一念に、正しく往生の因種滿足して缺ぐることなきことを示したまふなり、此の信心は第十八願力に由て、往生淨土の因種となるが故に「願爲レ因」とのたまふなり、銘文五十九に云く

至心信樂願爲因トイフハ、彌陀如來回向ノ眞實信心ヲ、阿耨菩提ノ因トスヘシトナリ

と、又大經讃に云く、

至心信樂欲生ト、　十方諸有ヲスヽメテソ、
不思議ノ誓願アラハシテ、　眞實報土ノ因トスル、

と、是の如き宗祖大師の他所の文と對照し、以て今の偈意を伺ふべきなり。

成等覺證大涅槃　必至滅度願成就

此の二句は、衆生の證果を頌述したまふなり、中に於て初句は正しく衆生の得益を明し、後句は佛の願力を示されたり。

成等覺とは、護信者の現在の利益にして、證大涅槃は其の當來の利益なり、如來會の十一願文に曰く、

若我成レ佛國中有情、若不下決定成二等正覺一證中大涅槃上者不レ取二菩提一

と、此の文に依りて、今の句を造りたまふなり、等覺とは具さには等正覺にして、佛の正覺に等似せる位をいふ、卽ち佛より僅かに一等降れる彌勒菩薩と同位なり、聖道門の上に於て、因果を合せ論じて五十二段の楷級あり、卽ち十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺をいふ、等覺は實に究竟の妙覺位に隣接せる位にして、妙覺を十五夜の滿月とせば、等覺は恰も十四日の月の如き位なり、大涅槃とは聲聞、緣覺の二乘の如き小涅槃にあらず、無上の佛果なるが故に大涅槃とのたまふなり、涅槃とは梵語なり、之を譯して滅度といふ、滅度とは迷の原因たる煩惱を滅亡し、迷の結果たる生死流轉の苦海を度脫するの意なり、此の涅槃に大小二種あり、今は卽ち佛果をいふ、故に大涅槃とのたまふなり、然り而して等覺を成ずることは、信同時に得る所の現在の利益なり、次に大涅槃を證することは、往生後に得る所の當來の利益なり。

必至滅度願成就とは、是れ信心の利益として、現當の利益を被ることは、全く第十一願力に由ることを明さるゝなり、願文に曰く、

設我得レ佛國中人天不下住二定聚一必至滅度上者不レ取二正覺一

と、此の願文を前に出せる、如來會の願文と對照するに、涅槃と滅度とは梵漢の相違なれば意は一なり、然るに定聚と等覺とは、文義に就ては且らく異なれども、体は則ち一なり、何となれば定聚とは正く往生の決定せる聚類といふ義にして佛因圓滿の者をいふなり、等覺も同じく往生決定の者に名くる益名にして、一生にして佛處を補ふべき、等覺の彌勒大士の如く、我等念佛の行者も此の一生の穢身盡き次第、往生卽成佛すべきが故に、此の益名を用ゆるなり。

又願文には國中の人天とあれば、定聚と滅度共に往生後の利益を示さるゝが如く見ゆれども、意は然らず、彼の國に往生する者は、今世に在りて定聚の位に住し、往生後必ず滅度に至るといふ文意なりと見るべきなり、是れ決して無理ならず、獲信の一念に當來の果已に決定す、是れ卽ち正定聚なる時は、現益なること明なり、又佛因既に此の土に於て圓滿し了る時は、當來の果は將に滅度なりといふべきなり。

是を以て宗祖大師は、第十一願を以て必至滅度の願とし、住定聚の文ありと雖も是れ此の願の主とする所にはあらず、唯是れ滅度を談ぜんが爲に其の前位を擧げたまひしものと知るべし、されば聞名不退の現益を誓はれし文は、第三十四五の兩願及び第四十七願等に在りて分明なり。

上來述ぶる所之を要するに、信心を獲得しぬれば、往生成佛の因種圓滿して大涅槃と僅かに一生を隔るのみたる、等覺とも正定聚とも云はるゝ身となり、彼の淨土に往生しぬれば、直ちに佛果を證せしめたまふことは、皆これ第十一の必至滅度の願力に由つてなりと示さるゝなり、

和讃に云く

眞實信心ウルヒトハ、　スナハチ定聚ノカスニイル、
不退ノクラヰニイリヌレハ、　カナラス滅度ニイタラシム。」

又云く

五十六億七千萬、　彌勒菩薩ハトシチヘシ、
マコトノ信心ウルヒトハ、　コノタヒサトリヲヒラクヘシ。」

念佛往生ノ願ニヨリ、　等正覺ニイタルヒト、
スナハチ彌勒ニオナシクテ、　大般涅槃チサトルヘシ。」
眞實信心ウルユヘニ、　スナハチ定聚ニイリヌレハ、
補處ノ彌勒ニオナシクテ、　無上覺チサトルナリ。」

如來所以興出世　唯說彌陀本願海

上來彌陀因果の相を述べて招喚の意を示されたり、巳下二十四句は釋尊が彌陀の法門を承けて、衆生を導き給ふ發遣の意を明し給ふなり、中に於て此の二句は、先づ釋尊の此の世に出で給ひし本懷を標示し給へるなり。

如來とは釋迦牟尼如來を指すなり。興出世とは釋尊の今を去ること、大凡二千五百年の昔に、印度の迦毘羅伐窣堵城に生れられ、出家苦行の後ち正覺成就なされて、五十年間御說法あらせられたることを云ふ。彌陀本願海とは彌陀の本願は智愚利鈍を簡ばず、廣く一切の衆生を救濟し給ふ、甚深不可思議の法門なるが故に、海の深くして且つ廣きに喩へて本願海と宣ふなり。大無量壽經序分に曰く

如來以二無盡大悲一矜二哀三界一所二以出興於世一光二闡道教一欲下拯二群萌一惠以二眞實之利一上

と、是れを高祖は、一念多念證文二十に

コノ文ノコヽロハ、如來トマウスハ、諸佛チマウスナリ、所以ハ、ユヘトイフ、コトハナリ、興出於世トイフハ、佛ノヨニイテタマフト、マウスナリ、欲ハ、オホシメスト、マウスナリ、拯ハ、スクフトイフ、群萌ハ、ヨロツノ衆生トイフ、惠ハ、メクムトマフス、眞實之利ト、マウスハ、彌陀ノ誓願チマウスナリ、シカレハ、諸佛ノヨニイテタマフユヘハ、彌陀ノ願力チトキテ、ヨロツノ衆生チ、メクミスクハント、オホシメスチ、本懷トセント、シタマフカユヘニ、眞實之利トハマウスナリ。

と釋し給へり。乃ち經文の道教とは、聖道自力の敎法をいふ、經末に

當來之世、經道滅盡

と宣ふもの是なり。眞實之利とは彌陀の法門を指す、經末に

佛語ニ彌勒一、其有レ得レ聞ニ彼佛名號一、歎喜踊躍、乃至一念、當レ知此人、爲レ得ニ大利一等

と宣ふ文と呼應して、其意を知るべきなり、是れ明かに釋尊五十年の說教は、八萬四千と其數甚だ多しと雖、自身出世の本意とし給ふこころは、道教を光闡するに非ずして、一切苦惱の衆生を救濟する道は、たゞ唯有一乘法たる彌陀の本願眞實之利の外なきことを顯し、是れ實に我が本懷なる旨を示し給へる明文にして、此の經出世本懷たること佛の金口に出て顯然たり。

蓋し如來の世に興出し給へる本意は、偏に衆生をして迷を轉じて悟を開かしむるにあり、此の故に苟くも衆生を轉迷開悟せしむれば、何れの法門も其衆生のためには出世本懷と謂ふべし、法華其他の諸經に於て往々出世本懷を說き給へる文あるは、思ふに此の所以なり、されど諸經の說は、上根上智の者に取りては、其益ありとするも、下根無智の凡夫にありては、短綆深泉を汲まんとするの類に等し、然るに「諸佛ノ大悲ハ苦者ニ於テス、心偏ニ常沒ノ衆生ヲ愍念ス」とあるが如く、如來の大悲は偏に愚鈍下劣の衆生に於て最も切なり、されば善惡智愚を簡ばず攝取し給ひ、殊に極惡最下の凡夫のために起し給へる、彌陀如來他力易行の一法を除きて、此の諸佛の大慈悲心を滿足せしむるものあることなかるべし、誠に三世諸佛の出世の本意は、唯彌陀の本願他力易行の法門を說き給ふにあり、故に高祖は「如來トマウスハ、諸佛ヲマウスナリ」と釋し給ひ、淨土文類聚鈔十七には

三世諸如來、出世正本意、唯說ニ阿彌陀不可思議願一、

と歎じ給へり、これは是れ釋尊將に大經を說き給はんとして、五德の相（住奇特法、住佛所住、住導師行、住最勝道、行如來德）を現じ給ふや、阿難は釋尊に向つて、「去來現佛、佛々相念、得レ無ニ今佛念諸ニ佛一耶」と問ひ奉へり、卽ち此の未だ曾て覩ざりし瑞相を現じ給へるは、正に過去未來現在の諸佛の共に相念じ給ふところを、今世尊も亦念じ給ふには非らずやと、尋ね奉りしなり、是

に於て世尊は、此の阿難の快問に對して、先づ如來出世の本意は、群萌に眞實の利を惠むにあるを告げ、而して廣く彌陀の法門を說き給ひ、經末に至りて「如來所レ應レ作者、皆已作レ之」と結び給へり、卽ち諸の如來の出世して作すべき義務は、我皆作し已り本懷茲に滿足せる旨を述べ給ひて、之を補處の彌勒に付屬し給ひしなり、これを以て窺ふに、佛々出世の本懷、彌陀の本願海を說くにあること、佛說金口炳として日月よりも明かなり、夫れ仰がざるべけんや。

五濁惡時群生海　應信如來如實言

此二句は上の出世本懷の文を承けて、一切衆生に彌陀の本願を信受すべきことを勸め給ふなり。

五濁とは阿彌陀經に其名出でたり、文は曰く、

釋迦牟尼佛、能爲二甚難希有之事一、能於二娑婆國土五濁惡世、劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁中一、得二阿耨多羅三藐三菩提一、爲二諸衆生一、說二是一切世間難信之法一

と、今略釋せば、一に劫濁とは災難荐りに至るをいひ、二に見濁とは邪見の熾盛なるをいひ、三に煩惱濁とは貪瞋の競ひ起りて利慾相爭ふをいひ、四に衆生濁とは衆生の十惡彌盛なるをいひ、五に命濁とは前の見煩惱の二濁に由りて多く殺害を行ふが故に、其斷命の苦因によりて、壽命の短縮なるを云ふ。斯の如き五種の汚濁ある時卽ち惡時なり。群生海とは衆生海といふに同じ、禮讃に「煩惱深クシテ底ナク、生死ノ海ハ邊ナシ」とのたまふ如く、五濁惡時の吾人凡夫は、煩惱の苦因愈々深くして、生死の苦果絕ゆることなき、無有出離之緣の衆生なるが故に、海に喩へて群生海とのたまふなり。

應信如來實言とは、唐譯如來會の「應レ信二我敎如實言一」の文によりて句を作りたまふ、正依の大無量壽經には

是故我法、如レ是作、如レ是說、如レ是敎、應二當信順如法修行一

とのたまふ、卽ち釋尊の此の大無量壽經を說き給ふや、全く本佛彌陀の三昧に入り、五德の相を現じて、說き給ひしものなるが故に、其五德瑞現を指して、

如是作といふ、而して廣く彌陀如來の本願の生起せる所以より、發願修行及び正に正覺成就して、衆生を攝化したまふ有樣を、說きたまへるを如是說といふ、後ち廣く釋尊自身に、此の彌陀の本願を、說き敎へたまへるを如是敎と云ふ、序分義二右に如是を釋して「如來所說言無二錯謬一故名二如是一」とのたまへり、之を要するに釋尊の彌陀法門を說き給ふや、佛語金口更に一點の錯誤なきを以て、「如是」と云ひ、或は「如實ノ言」と云ふなり。

既に前に述べたるが如く、如來出世の正本意は唯彌陀の本願海を說くに在り、然れば吾人凡愚は唯々悲願の眞利を顯し凡夫卽生を示したまへる、此の釋迦如來如實の金言を深く信受奉行すべしと、懇ろに勸めたまふもの此二句の意なり、これを銘文には「五濁惡時群生海應信如來如實言トイフハ、ヨロツノ衆生、如來ノ、コノミコトヲ、フカク信受スヘシト也ナリ」と釋し給ひ、又大經讃の終に宣く、「聖道權假ノ方便ニ、衆生ヒサシクトゞマリテ、諸有ニ流轉ノ身トソナル、悲願ノ一乘歸命セヨ」と、勸歸の切なる思ふべきなり。

能發一念喜愛心　不斷煩惱得涅槃

上に釋尊出世の本懷を顯して、五濁の群生は應に阿彌陀如來の、他力本願を信ずべきを勸められたり、以下は其敎を信じたるものは、種々の大益を蒙ることを明さるゝなり、其中今の二句は證大涅槃の益、卽ち煩惱具足の吾人が一念の信心により、未來に大涅槃の佛果を、證得することを示し給ふなり。

初め能發等の一句は、唐譯如來會の成就文「能發二一念淨信一歡喜愛樂」とある文と、流通文「能生二一念喜愛之心一」とある兩文によりて、造語し給へり。能發とは愚禿鈔下二十右に『能ハ不堪ニ對ス』とあり、乃ち宿善純熟して、疑心頓に破れて、信心自ら生ずるものにして、毫も吾人凡夫の造作を加ふべきものにあらず、全く他力に由りて起るものなれば能發といふ、信卷序に云く、

夫レ以レハ、信樂ヲ獲得スルコトハ、如來選擇ノ願心ヨリ發起シ、眞心ヲ開闡スルコトハ、大聖矜哀ノ善巧ヨリ顯彰ス。

と、又願々鈔下二十に云く、

至心信樂ノオモヒ、イマノトキノ、造悪不善ノ、凡機トシテ、サラニコレアルヘカラス、シカルニ、タマ〳〵欲往生ノ、深信發得スルハ、シカシナカラ、法藏因中ノ强願ト、正覺ノ、彌陀ノ智力ト、内熏密益スルニヨリテ、一念歸命ノ、往益ヲ成ス、シカレハ、至心信樂トイフハ、凡夫自力ノ、心ニアラス、シカシナカラ、佛心ナリ

と、吾人の能く信心を發起するは、能く發起せしめたまふ、如來如威力に由るが故なり、他力回向の意、深く味ふべし。

一念とは一箇の心念といふ謂なり、高祖に二樣の解釋あり、一は時刻の一念にして、卽ち如來の本願を信ずる歸命の一念に、佛智の不思議として、妄業を滅し往生の眞因茲に萌すことは、到底凡夫の測知する能はざる極促の時間なるをいふ、『一念トハ信樂開發ノ時尅ノ極促ヲ顯ス』信卷末二丁右と宣ふもの是なり、二は信相の一念にして、卽ち疑心自力の二念なきをいふ、『一念トハ信心二心ナキカ故ニ一念ト曰フ、是ヲ一心ト名ク、一心ハ則チ報土ノ眞因ナリ』信卷末三丁右と宣ふもの是なり、斯く二樣の解釋ありと雖、唯是れ信ずる時間の側よりいふと、その信じぶりより談ずるとの異にして、其体一の信心の外なきなり、又一聲の稱名を一念といふことあれども、今は信の一念にして、就中時刻の一念を主とし、信相の一念をも兼ぬるものと知るべし。

喜愛心とは、自身往生の大事を佛願に託し、疑心全く晴れて、佛心の慈悲廣大なるを、歡喜愛樂する大安堵の思ひをいふ、例へば栴檀には靈香あるが如く、他力の信心は、單に江東火ありと信じたる如きにはあらず、佛勅に對して疑心全く晴れたる當体に、必ず喜愛好樂の妙味あるべきなり、故に本願には、往生の正因を誓ひたまひて、信樂とのたまひ、信の字に樂の一字を加へたまひ、釋尊は信心歡喜と說きたまふもの、是れがためなり、されば喜愛心とは、全く信心の別名なりと知るべし、故に正信偈大意には「能發一念喜愛心トイフハ一念歡喜ノ信ノコトナリ」と釋したまへり。

不斷煩惱得涅槃とは正しく益を擧ぐ、此は論註下右八「不レ斷二煩惱一得二涅槃分一」

の文によりたまふ、煩惱とは愚癡を根本として、吾人の心身を惱亂せしむる精神作用を總稱す、不斷とは、たとひ信心を獲得すと雖、此世にある間は、我が機の上にありて、常に貪瞋の煩惱競ひ起りて、絶ゆることなきをいふ、得涅槃とは、機の方は煩惱不斷なりと雖、既に一念發起の當体に、信心の德として、三世の業障一時に、消滅したまふが故に、淨土に往生するや、直に其法德現れて、大涅槃の證果を得るをいふ、故に銘文には。

不斷煩惱得涅槃トイフハ、煩惱具足セルワレラ、無上大涅槃ニ、イタルナリト、シルヘシ

と釋したまへり、然るに正信偈大意に此の一句を解して云く。

不斷煩惱得涅槃トイフハ、願力ノ不思議ナルカユヘニ、身ニハ煩惱ヲ斷セサレトモ佛ノカタヨリハツ井ニ涅槃ニイタルヘキ分ニサタマルモノナリ、と、是れ信一念の時、未來必ず涅槃に至るべき身分となるの意にして、現生に於ける益としたまふものなり、現益なりと雖、涅槃の證果を此土に於て得ると

いふにはあらず、「得ベキ分」に定るものにして、現生に正定聚不退の位を得るといふに同じ、涅樂は彼土入聖の淨土門にありては、淨土の益なること、言を待たざれども、未來此の大益の蒙るは、既に信一念の時に、得べき分に定まるものなることを、且らく分の字を加へて、釋したまへるものなり。（されど論註の文（益と同じからず、論註の「分」は生死の分を離れて、涅樂の分を得ると云ふ意にして、得涅樂と意同じくして未來の益なればなり、）

以上二句の意を約言すれば、衆生佛願を聞きて、疑心全く晴れたるの信、纔に一念なりとは雖、此の一念の信は、卽ち是れ佛智の印現にして、功德滿足するが故に、吾人の機の方にありては、豪も煩惱を斷ずるの勞を執らざれども、佛力自然に斷盡して、淨土に生ずるや、速に大涅樂の妙果を証得するとなり。一念の信これ佛力の能く發起する所、不斷煩惱の言また佛力に由るの意顯然、信も他力、證また他力、高祖嘆して「若ハ因若ハ果、一事トシテ阿彌陀如來ノ淸淨願心ノ廻向成就シ給フ所ニ非ザルコト有ルコト無シ」（證卷）と宣へり、今の句僅に二句十四字なりと雖、意旨甚だ深し、徒らに讀過して可ならんや。

凡聖逆謗齊廻入　如衆水入海一味

この二句は、第二に上下無差の益、卽ち凡夫も聖人も善人も惡人も、齊しく彌陀の本願海に歸入すれば、同一に彌陀の大悲に融化せられて、一味平等の信心を得て、更に差別なきを示したまふなり。

凡聖逆謗とは、凡は凡夫にして生死に流轉せる凡庸の劣夫をいふ、人天の二乘是なり、聖は聖人にして正智を有するものをいふ、聲聞緣覺菩薩の三乘これなり、逆とは五逆にして、父を殺し、母を殺し、羅漢を殺し、佛身を損傷し、僧の和合を破する五罪をいひ、謗とは謗法にして佛法を誹謗し之を信ぜざるをいふ、この逆謗の二は凡夫中の最も惡機を擧げたるなり。齊とは凡聖善惡機の差別を論ぜざるをいひ。廻入とは廻心歸入にして、自力の心を翻して佛願に歸入するをいふ。玄義分廿丁左「五乘齊入」の文、及び法事讃上右七「謗法闡提廻心皆往」の文は、蓋し初句の語の所依なるべし。

如衆水入海一味とは、萬川の水、清濁淨穢の差別ありと雖、洋々たる大海に入れば、皆同一鹹味となるが如しとなり、論註上右淨土の性功德を釋して「海性一味、衆流入者、必爲二一味一」等とあり、今はこの海一味の喩を以て、本願の對手は、凡聖逆謗と其機類に區別ありと雖、齊しく佛願に歸命すれば、同一に一味の信心を得て更に差別なきことを顯し給ふなり、銘文に釋して云く、

凡聖逆謗齊廻入トイフハ、小聖凡夫、五逆謗法、無戒闡提、ミナ廻心シテ、眞實信心海ニ、歸入シヌレバ、衆水海ニイリテ、ヒトツアチハヒト、ナルカコトシトナリ、コレヲ如衆水入海一味トイフナリ、

思ふに佛智不思議の誓願は、唯佛々のみの知ろしめす所にして、未だ佛果に至らざるものは、如何なるものと雖、測る所にあらず、されば補處の彌勒すら彌陀本願の前に立ちては、吾人凡夫と更に其徑庭あるを見ず、宣べなる哉釋尊は彌勒に對して、汝は五惡趣に流轉せる衆生と同じく、曠劫已來生死絶ゆることなし、然るに今無量壽佛の法を聞くを得たり、必ず疑惑し過ちて、邊地化土に往生すること勿れと敎誨したまふや、彌勒菩薩は、謹んで敎を奉じて、更に

疑惑を雜へざるべきを誓ひたまへり、卽ち大經下卷に云く、

汝及十方諸天人民一切四衆、永刼已來展轉五道に、憂苦勤苦不レ可二具言一、乃至今世生死不レ絶、與レ佛相値聽二受教法一、又復得レ聞二無量壽佛一、……彌勤白レ佛言、受二佛重誨一、專精修學如レ教奉行、不二敢有レ疑。

知るべし、願力成就の報土に至らんとするものは、自力は更に其用をなさず、凡も聖も齊しく廻心歸入して、俱に眞實の佛心を全領し、佛陁の大悲に融化せらるべきなり、既に他力廻向の信心なれば、之を獲るものゝ如何に拘らず、平等一味にして、毫も差別なきこと、論を待たざるべし、和讃に云く。

彌陀ノ智願ノ廣海ニ、　凡夫善惡ノ心水モ、
歸入シヌレハスナハチニ、　大悲心トソ轉スナル。

斯の如く信心の因既に同一なり、証果豈に平等ならざるを得んや、是を以て六要鈔二末二十六丁に「凡聖等者是顯下善惡諸機雖レ殊齊乘二佛願一同生二報土一無二其差別一」と釋し給へり、因果通じて一味平等、之を一乘平等の利益といふ。

攝取心常照護

已下六句は第三に心光常護の益を明す、中に於てこの一句は、正しく利益を明し、次の五句は、難を擧げ喩を以て顯し給ふなり。

此の句の所依は、觀念法門十三丁左の、

身相等光一一徧照二十方世界一、但有下專二念阿彌陀佛一衆生上、彼佛心光常照二是人一攝護不レ捨

の文にして、是れ觀經の「一一光明徧照二十方世界一、念佛衆生攝取不レ捨」の經文を釋したまへるものなり。

攝取とは具に攝取不捨といふ、心光とは觀經に「佛心者大慈悲是、以二無緣慈一攝二諸衆生一」とありて、卽ち攝取不捨の大慈悲心より、放ち給ふ光明をいふ、凡そ光明に、色光と心光との二ありて、八萬四千の相好より發ちたまふ、佛身の光明を色光或は身光といひ、佛心より放ちたまふを心光といふ、然れども、佛の方にありては、本來二種の光明あるにあらずして、色心不二の光明なり、然

るに光明を蒙る衆生に於て、若し能く佛心に契ふものは、色心二光共に蒙ることを得て、差別なけれども、若し佛心に契はざるものは、色光を蒙るのみにして、更に佛心の光明に浴するを得ず、是れ二種の區別を生ずる所以なり、喩へば、太陽には元來二の照し方なけれども、明者は太陽の光と熱とを蒙りて、盲者は唯熱を受くるのみなるが如し。是を以て今攝取の心光といへるは、佛唯心に契ひたるもの、卽ち佛心全領の信心の行者のみの、蒙る所の勝益なるを知るべし、觀念法門に、身相等の光明(色光)は信者未信者を問はず、徧く十方世界を照し給へども、佛心の光は唯念佛の行者のみを照護すとのたまふは、蓋しこれがためなり。

常照護とは、攝取不捨の佛心を全領したるものは、それより以後は、如何なるものにも、其の信心は障礙せらるゝといふことなく、心光は常住不斷に照し護りたまふとなり、一念多念證文十一に云く

攝護不捨トマウスハ、攝ハオサメトルトイフ、護ハトコロヲヘタテス、トキヲワカス、ヒトヲキラハス、信心アル人ヲハ、ヒマナク、マモリタマフトナリ、マモルトイフハ、異學異見ノトモカラニ、ヤフラレス、別解別行ノモノニ、サヘラレス、天魔破旬ニオカサレス、惡鬼惡神ナヤマスコトナシトナリ、不捨トイフハ、信心ノヒトヲ、智惠光佛ノ、御コヽロニ、オサメマモリテ、心光ノウチニ、トキトシテ、ステタマハスト、シラシメント、マウス御ノリナリ。

已能雖破無明闇　貪愛瞋憎之雲霧
常覆眞實信心天　譬如日光覆雲霧

雲霧之下明無闇

上に心光常護を明すと雖、信心の行者常に煩惱起りて、光照を蒙らざるものと、其相違あるを見ず、何ぞ光照不斷なるを知るや、此疑問に答ふるもの、卽ち此五句なり

已とは信の一念を指す、能とは光明の力能く衆生の無明闇を破するをいふ、

無明闇とは、大經に佛智を疑惑するものは、智惠あることなく、大利を失ふといひ、佛智を明信する人は、智惠明達にして、大利を得ると爲すとあれば、佛智に對して明了ならざる心、卽ち不了佛智の疑惑を指して無明といひ、佛智を疑ひて、往生一定の思なき疑心を、闇に喩へて無明闇といふなり。要するに、此一句は上の攝取心光の句を承けて、既に信一念の當体に攝取の心光によりて能く行者の疑惑を破したりと雖、といふ意なり。

貪愛とは貪吝愛欲にして、吾人は順境にある時此の煩惱を起す、瞋憎とは瞋恚憎惡にして、逆境に向つて起す妄念なり、この貪瞋の煩惱を雲霧に喩へて、貪愛瞋憎之雲霧といふ。銘文に云く「貪愛ノクモ、瞋恚ノキリ、ツネニ信心ノ天ヲオホヘルナリ」と。

常覆とは信心を獲しより一生涯、貪瞋の煩惱常住不斷に、信心を覆蔽するをいふ、上の不斷煩惱と意同じ。眞實信心天とは、眞實は佛心を指す、他力の信心は佛回向のものにして、衆生の妄心を以て建立する所の、虛僞の信心にあらざる故に眞實の信心といふなり、この眞實信心は明信佛智の信なるを以て、其明了なる所をとりて、夜闇晴れたる天に喩へて信心天といふなり。

譬如等の二句は、正しく信心相續の義を明し、光照不斷の意を示したまふなり、日光とは攝取の心光を喩へ、雲霧之下とは下界を指す、明無闇とは、日光雲霧に覆はれて見る能はざれども、下界は明にして闇なく、黑白分明に辨するを得るをいひ、たとひ貪瞋の煩惱起ると雖、一たび疑心の闇晴れて、信心を獲たるものは、往生一定の思ひ明了に相續するを喩ふるなり。

以上の意を概括すれば、日光東に出で天已に曉となれば、雲霧頻りに起るとも、夜闇已に晴れたるが故に、雲霧の下明了に森羅萬象を辨別するを得る如く佛の心光已に能く、疑惑無明の夜闇を照破して、信心の曉天となりぬれば、貪瞋の煩惱胸中に湧出して、信心を隱蔽すと雖、信心は常に貪瞋煩惱の心中に不斷相續して、往生の一事に向つては、毫も疑惑不定の念起ることなし、是れ卽ち未だ佛智を領せずして、夜闇に迷へる疑惑未信の行者と、大に逕庭ある所な

りとなり。銘文に云く。

日月ノ、クモキリニ、オホハルレトモ、ヤミハレテ、クモキリノシタ、アカキカコトク、貪愛瞋憎ノ、クモキリニ、信心ハ、オホハルレトモ、往生ニ、サハリ、アルヘカラストナリ。

斯の如く、往生一定の心の、明了に相續するは、攝取の心光、たとひ見奉る能はざるにもせよ、常に照護したまふを以てなり、是を心光常護の益といふ。

獲信見敬大慶喜　卽横超截五惡趣

此二句は、第四に横超五趣の益、卽ち一たび信心を獲れば、速かに五惡趣を超截するを得ることを明すなり。

此句は大經下卷「聞レ法能不レ忘、見敬得二大慶一」の文と、「必得二超絶去、往二生安樂國一、横截二五惡趣一、惡趣自然閉」の文によりて造語したまふ。

獲信とは、信心を獲得すといふことなり、見敬とは、見は心見にして、彌陀佛の能く衆生を攝取したまふといふことを、心眼を以て明かに見屆くること、敬は恭敬にして、信心の相續する有樣なり、大慶喜とは、生死の迷を離れ涅槃の悟に至ること決定するを以て、歡喜慶悅尋常ならざるをいひ、上の喜愛心と同じ、要するに見敬も大慶喜も、信心の義意相狀に外ならざれば、この一句は獲信の二字につゞまりて、信心を獲得すればの意なりと知るべし。

卽横超截五惡趣とは、卽は「トリモナオサズ」と訓じ、ときをへず日をもへだてざる意にして、獲信の同時にといふことなり。横とは煩惱を斷じて佛果を開くべき、次第楷梯を守らず、他力を以て斷惑証理するをいふ、銘文に釋して「横ハ如來ノ願力、他力ヲマウスナリ」とのたまへり。超とは超越の義にして銘文に「超ハ生死ノ大海ヲ、ヤスクコエテ、無上涅槃ノ、ミヤコニイルナリ」と釋したまへり。截とは斷截にして、銘文に「截トイフハ、キルトイフ、五惡趣ノ、キツナヲ、ヨコサマニ、キルナリ」とのたまへり。五惡趣とは、地獄、餓鬼、畜生、人間、天上にして、此の五は皆惡業によりて、趣く所なれば、惡趣といふなり。

之を要するに、往相の信心を獲得したるものは、未來惡趣に趣くことなく、必ず無上涅槃に至るべき、正定不退の身となるなり。信卷末五右に

往相ノ一心ヲ發起スルガ故ニ、生トシテ受クベキ生ナク、趣トシテ更ニ到ルベキ趣ナシ。已ニ六趣四生、因亡シ果滅ス、故ニ卽チ頓ニ三有ノ生死ヲ斷絶ス（和譯）

とのたまふもの、今と其意全く同じきなり。

一切善惡凡夫人　聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者　是人名分陀利華

此の四句は、第五に敎主歎譽の益、卽ち信心の行者は、敎主釋迦牟尼世尊のために歎譽らるゝことを述ぶるなり。

最初二句の語の所依は、玄義分三左

一切善惡凡夫得レ生者、莫レ不下皆乘二阿彌陀佛大願業力一爲中增上緣上也

にして、初句は上の五濁惡時群生海に應じ、後句は應信如來如實言に應す。

一切善惡凡夫人とは、善人惡人皆盡して餘すなきをいふ、上に凡聖といひ、今凡夫のみを出すは、彌陀は凡夫を正客としたまふ故なり。

聞信如來弘誓願とは、本願成就文の「聞二其名號一信心歡喜」の意なり、聞と信其体別あるにあらず、聞卽信にして、若し信にあらざる聞なれば實の聞にあらず、又聞にあらざれば如實の信にあらず、証文に「聞其名號トイフハ、本願ノ名號ヲキクト、ノタマヘルナリ、キクトイフハ、本願ヲキキ、テ、ウタカフコ、ロナキヲ、聞トイフナリ、マタキクトイフハ、信心ヲアラハス、御ノリナリ」とのたまふもの此の意なり、如來とは阿彌陀如來をいふ。弘誓願とは廣弘誓願、彌陀の本願は一切群生を洩さず助けたまふ御願なるをいふ。

佛言とは大聖釋尊の大御言なるを示す、廣大勝解者とは如來會の、

善男子善女人於二彼法中一廣大勝解者、當三能聽聞獲二大慶喜一、

の文によりたまふ、卽ち名號は廣大殊勝の法にして、此の法を實の如く領解すれば、其領解亦隨つて廣大殊勝なり、故に信心の行者を讃嘆して釋尊は廣大勝

解者とのたまふなり。分陀利華とは觀經に、

若念佛者、當レ知此人、是人中分陀利華

と說きたまへり、分陀利華Pundarikaは梵音、翻じて白蓮華といふ、此の花淨潔無染にして、他に比すべきものなしといふ、故に如來を亦分陀利華の如しと喩へたまふ經說あり、今分陀利華を以て、念佛行者を歎譽したまふは、念佛の行者は如來に等しと嘆じたまふことなり、末燈鈔十三に云く、「華嚴經ニ言、信心歡喜者、與諸如來等トイフハ、信心ヨロコフヒトハ、モロ〳〵ノ如來ト、ヒトシトイフナリ」等と。

之を要するに、彌陀の本願を信ずるものは、釋尊之を讃じて、廣大勝解者と宣ひ、又是人を分陀利華を歎じ給ふとなり、大經に「則我善親友」と宣ふも、亦是れ敎主の嘉譽にして、和讃には之を述べて左の如くのたまへるなり。

他力ノ信心ウルヒトヲ、ウヤマヒオホキニヨロコヘバ、
スナハチワガ親友ソト、敎主世尊ハホメタマフ。

彌陀佛本願念佛　邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難　難中之難無過斯

上釋尊指勸の意を述ぶるに、先づ出世本懷を明して、一切衆生皆彌陀佛の本願を信すべきことを示し、次で廣く信受の利益を擧げたまへり、今此の四句は終に本願を信受し難き者を示して、斯の如きものは、速に廻心懺悔して、本願海に歸入すべしと、勸誡したまふの一段なり。

此の四句は大經下卷東方偈の「憍慢弊懈怠、難ニ以信ニ此法ニ」の文と、如來會の「懈怠邪見下劣人、不レ信ニ如來正法ニ」の文、及ひ大經流通分の「若聞ニ斯經ニ、信樂受持、難中之難、無レ過ニ斯難ニ」の三文を以て、句を造りたまふ。

邪見とは、自已の妄情分別の見解に執じて、佛願にたよらざるものをいふ、憍慢とは、我見を募り、自力を恃みて、如來の眞說を、輕蔑するものをいふ、斯の如き邪見憍慢の衆生を指して、卽ち惡衆生といふなり、信樂とは「疑蓋雜アルコトナシ、故ニ信樂ト名ク」(信卷本二十丁)と釋したまへば、彌陀佛本願念

佛の法を、信じて疑はざるをいふ、受持とは憶持不忘の義にして、信心の相續して絶へざるをいふ。

甚以難とは、邪見憍慢のものは、彌陀佛の本願を信ずること、甚だ以て難しとなり、難中之難無過斯とは、如來の興世に値ふこと、諸佛の經道を聞くこと、菩薩の勝法を聞くこと、及び善知識に逢ふて法を聞き修行する等、總て難なりと雖、彌陀の本願を信ずることは、難中の難にして、此の難に過ぐるものなしとなり、元より彌陀の法門は、信じ易く行じ易き法なれども、其易行易信なるは、其法常規を逸して、殊勝不可思議なるによりてなり、斯かる絶對の法門は若し宿善淺薄のものにありては、實に信ずること難きを以て、法の高妙なるをあらはして、釋尊は大經には難中之難と說き、阿彌陀經には難信之法と說き給ひしなり。今は之を憍慢弊解怠の文と合して、勸誡の意に轉用したまふなり、卽ち彌陀の本願は、尋常人と雖尙且つ信じ難し、況や邪見憍慢の惡衆生に於てをや、宣しく速に廻心懺悔して、此法を信ずべしと勸め給ふなり。

印度西天之論家　中夏日域之高僧
顯大聖興世正意　明如來本誓應機

上來は依經段といひ、大無量壽經によりて、釋迦彌陀二尊の敎旨を述べたまひしもの、以下は則ち其二尊の敎法を相承したまひし、三國相傳の七高僧の論釋によりて、其弘傳の敎義を頌述したまふ、是を依釋段と稱す、其中今の四句は、先づ七祖の勳功を嘆じたまへるものにして、從つて高祖の三國に涉りて七祖を選定し、淨土眞宗相承の祖師となしたまひし深意を窺ふことを得る一段なれば、依釋段の總論とも稱すべき章句なり。

初二句は三國の七祖を列す、印度西天の論家とは龍樹天親の二菩薩を指す、西天とは五印度(東西南北中)中の西天にあらず、龍樹は南印度の人、天親は北印度の師なればなり、故に印度卽西天にして、印度は支那日本なりいはゞ西方にあるを以て、印度をまた西天といふなり、龍樹菩薩は十住毘婆娑論を造り、天親菩薩は淨土論を著し、各々眞宗を弘宣し給へり故に論家といふ、中夏日域の高僧と

は、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の五師を指す、中夏とは支那の異稱、中は四方の夷國に對し、夏は大の義にて歎美の稱、卽ち文化の盛んなる中國といふ謂にして、彼の國人自ら稱する國名なり、又中華ともいふ、曇鸞道綽善導の三師は實に支那の高僧なり、日域とは我朝の異名、日出づる國といふ意なり、源信源空の二師は是れ我邦の高僧なり、高僧とは高は高貴の義にして、德高く尊敬するに堪ゆるをいふ、僧とは梵音具さに僧伽Saṁghaといひ、翻じて衆といふ、和合團結の義にして、釋尊を中心として團結したる教會を指す名なり、然るに支那日本にては、僧伽の團結そのものを指さずして、其中の出家行者特に男子の出家したる比丘を、たとひ一人にても僧と呼ぶに至れり、今高僧とは曇鸞大師以下の五師を指すなり。

後の二句は正しく七祖の功勳を嘆ず、大聖とは釋尊を指し、興世の正意とは釋尊この世に興出したまひし正しき本意、卽ち上に述べし出世の本懷をいふ、如來とは阿彌陀如來なり、本誓とは根本の誓願、卽ち四十八願なり應機とは機

緣に相應するの謂なり、機とは法華玄義第六卷に三義を以て釋せり、今之に準じて解せば、一に機は是れ微の義にして、微々として將に動かんとするに名く、卽ち吾人宿善純熟して將に法を聞くに堪ゆるに至れるを機といふなり、二に機は是れ關の義にして救濟せらるゝ者能く救濟者に關係し得るの意なり、三に機は是れ宜の義にして佛何等かの救濟の手段を施し得る便宜あるものゝ意なり、之を要するに佛の敎化を稟くるに堪へ、且つ佛と關係し得るものとして、吾人の佛法に入れるもの、若くは當さに入るべきものを總稱して機といふなり、卽ち機とは法に對する語にして、苟も法に救濟さるゝもの皆之を機と名くるなり、今彌陀如來の他力救濟の本願は、和讃に正像末の三時には彌陀本願ひろまれり、像季末法のこの世には諸菩龍宮にいりたまふとある如く、三時に於て更に變易あることなく、善惡一切の機を救濟したまふ萬機普益の法にして、殊に他の救ひ能はざるものを能く救ひたまふところの劣機相應の敎法なるを指して應機といふなり。

顯といひ明といふは列祖傳持の功を嘆ず、諸祖の弘傳したまふ所、之を釋尊に望むれば大聖興世の正意を顯はせるもの、之を彌陀に望むれば卽ち如來本誓機に應ずることを明せるものなり、然るに釋尊の正意としたまふところのもの他なし彌陀の本誓のみ、彌陀の本誓の故に釋尊乃ち正意となしたまふ、故に二尊に分つといへども、列祖の顯明したまふところ唯是れ一事、謂く四十八誓願中往生極樂の眞意、唯第十八願なるのみ、されば下別嘆の中、龍樹章には憶念彌陀佛本願といひ、天親章には光闡橫超大誓願といひ、曇鸞章には報土因果顯誓願といひ、道綽章には一生造惡値弘誓といひ、善導章には開入本願大智海といひ、源空章には選擇本願弘惡世とのたまふ、皆是れ第十八願を顯明したまへることを嘆じ給ふものなり、唯眞信章の中本願の言なしと雖、極重惡人唯稱佛の句自ら第十八願の深旨なり、抑も二尊の本意は大經にありて灼然然るに情執の昧ますところ多々、是を以て祖々各々時機を鑑み、其說明の方面を異にして、夫々發揮の法門あり、下も各章に示したまへる釋義是なり、然れども皆俱に釋尊出世の本懷たる彌陀の本願を顯明したまへること脈絡一貫毫も異動あるを見ず、以下列祖の釋義を頌嘆したまふの初にありて今此の四句ある所以なり、又高僧和讃の最後に、

五濁惡世ノ衆生ノ　選擇本願信スレハ
不可稱不可說不可思議ノ　功德ハ行者ノ身ニミテリ

の一首を安じたまへり、此の和讃は大經彌勒付屬の經文によりて、諸祖轍を同くし、彌勒に代りて濁世の衆生のために第十八選擇本願を弘通して、釋尊付屬の佛意を果したまふことを讃じたまへるなり、蓋し淨土の法門より修したまひしもの三國に涉りて何ぞ七師に局らんや、然りといへども彌陀本願の眞髓を得、橫超他力の敎旨を赤裸々に說破して、釋尊出世の本懷を明白に相傳し、以て此法能く濁惡の劣機に相應することを顯明して毫も遺憾なからしめたまひしもの七祖を外にして之を求むる能はざるなり、三國の七師、取て以て今宗直承の祖師と定めたまふ所以實に茲に在り、寔に法孤運せず之を弘むるは人に由る、列

祖傳持の功夫れ大なるかな。

釋迦如來楞伽山　爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世　悉能摧破有無見
宣說大乘無上法　證歡喜地生安樂

以下は別して七祖の釋義を頌述ず、其中初め十二句は第一龍樹章にして、中に於て今の三行六句は懸かなる後世のことを記したまへる佛の懸記、卽ち豫言の文を引きて、龍樹大士の德化を示したまふなり。

釋迦如來とは豫言者を標す、釋迦具さに釋迦牟尼Sākgamuniといふ、釋迦を能仁と翻じ牟尼を寂默と譯す、慈悲智慧圓滿なるを顯はせる名なり、楞伽山とは豫言の處を擧ぐ、釋尊南海の濱にある楞伽Rankā山に於て、大慧菩薩以下の大衆の爲めに楞伽經を說き給ひ、此の時龍樹菩薩弘敎の德化を懸記したまへり、故に爲衆告命等といふ、魏譯の楞伽經第九卷に云く、

我乘の內證智は妄覺は境界に非らず、如來滅世の後誰か持して我爲に說く、如來滅度の後ち未來當に人あるべし、大慧汝諦かに聽け人あり我法を持す、南大國中(竺南大)に於て大德の比丘あり、龍樹菩薩と名く能く有無の見を破し、人の爲めに我法大乘無上の法を說き、歡喜地を證得して安樂國に往生せん。

と、今南天竺以下ば正しく此の豫言の文意を頌したまふなり、南天竺とは菩薩出生の地なり、印度を五分し各々其方位に從つて東西南北中の名あり、印度の南部之を南印度又は南天竺といふなり、龍樹とは梵音伽阿周那Nāgārjunaといひ、龍樹又は龍猛を翻ず、大士とは自利利他の大菩提心を有するものをいひ、菩薩といふと其意同じ、出於世とは大士出世の年時異說ありと雖、大凡佛滅後七百年西紀二世紀前後なるべし、有無の見とは大士出世當時に於ける外道及び小乘等の誤謬の見解をいふ、卽ち因果の理を無視し若くは邪曲なる因果を信ずる外道の邪見、或は一切諸法は實有なりと信じ若くは空無なりと信ずる小乘の謬見、或は大乘中に於ても若は空に偏し若は有に偏する等の種々の偏見を總じて有無の邪見といふ、大士之等の有無の見を推破して中道の妙理を說きたまへる

こと智度其他の論に明かなり、斯く諸の邪執を遺すことなく力めて之を破斥したまひしが故に悉能摧破といふ。

大乘無上法とは、大乘の言は小乘に對す、乘は運度又は運載の義なり（卽チ車舟等ヲ指ス和訓セバノリモノニシタ）佛の說きたまひし敎法は能く流轉の衆生を載せて、解脫の彼岸に運ぶものなれば、佛の法門之を乘といふ、其乘卽ち敎法に就いて、阿羅漢果卽ち自身のみ三界の苦を離脫して自ら之に甘んずる自利の聖果を成ぜしむる敎と、菩提涅槃の佛果卽ち自の聖果を衆生濟度に用ひ、衆生濟度を以て自の聖果する自覺他覺行窮滿の二利の聖果を成ぜしむる法とあり、前者を小乘といふ後者を大乘といふ、而して小乘は其敎證未が究竟にあらず、故に小乘の有上法に對して、大乘は至極究竟にして更に勝るゝものなきを以て大乘を無上法といふなり。

然るに大乘法中に於て、難行あり易行あり、自力あり他力あり、諸佛法あり彌陀法あり、而して釋尊の我乘とのたまひ、龍祖の以て宣說したまふところの大乘無上法とは、是れ實に彌陀易行他力の法門にてあるなり、何を以て之をいふ、楞伽經の文に順じて窺はんか、懸記の前の文に『十方諸刹土の衆生菩薩中の、あらゆる法、報佛、化身及び變化、皆無量壽の極樂界中より出づ』（唐譯）とあり、然らば則ち釋尊亦是れ極樂世界より出でたまひしものなり、阿彌陀佛の極樂界中より出現したまひし釋尊の我乘とのたまへる、豈に彌陀法にあらずして何ぞや、又懸記の文には『人の爲めに我法太乘無上法を說き、歡喜地を證得して安樂國に往生せん』とあり、安樂國とは大無量壽經によるに是れ阿彌陀佛の淨土なり、龍樹大士旣に安樂國に往生す、宣說したまふの法豈に彌陀易行の本願にあらずして何ぞや、之を要するに大乘無上法とは是れ一念大利無上功德の彌陀念佛の法にして、難行道の如きは易の易たる所以る顯す爲めに難の難たるを示したまふものにして、猶これ有上法中に攝せらるべきなり、高祖の『信に知りぬ大利無上とは一乘眞實の利益なり、小利有上とは則ち是れ八萬四千の假門なり』行卷このたまひ、又『唯阿彌陀如來の選擇本願を除きて已外の大小權實

顯密の諸教皆是れ難行道聖道門なり』（曇鸞鈔上）このたまふもの卽ち此意なり、是れ以て龍樹菩薩は佛の懸記に應じて、十住毘婆娑論に於ては難易二道の鴻判をなしたまひ、十二禮には特に阿彌陀佛の功德を讃嘆したまひ、其他盛に往生淨土の法門を宣說したまひしなり、和讃に云く、

本師龍樹菩薩ハ　智度十住毘婆娑等
ツクリテオホク西ルホメス、メテ念佛セシメタリ

歡喜地とは、菩薩の修行階位に五十二段（十信、十住、十行、十回向、十地、等覺ある中の第四十一位、卽ち十地の初地をいふ、此の位に至るや始めて諸佛の大法を證見して、心に歡喜を生ずるが故に歡喜地と名くるなり、龍樹菩薩とは則ち此の位を證得し而も自力難行を捨てゝ他力易行の法に歸して安樂淨土に往生したまへり、故に生安樂といふ。

讃阿彌陀偈十六丁左に云く、

本師龍樹摩訶薩　形ヲ像始ニ誕シ顯綱ヲ理ス
邪扇ヲ關閉シテ正轍ヲ開ク　是レ閻浮提ノ一切ノ眼ナリ
尊語ヲ伏承シテ歡喜地ニシテ　阿彌陀ニ歸シテ安樂ニ生ス

又高僧和讃にのたまはく、

南天竺ニ比丘アラン　龍樹菩薩トナツクヘシ
有無ノ邪見ヲ破スヘシト　世尊ハカヲテトキタマフ」
本師龍樹菩薩ハ　大乘無上ノ法ヲトキ
歡喜地ヲ證シテソ　ヒトヘニ念佛スゝメケル」

と、之等の文今の句と其の意同じ、斯の如く龍樹大士は世尊の懸記に應じて出世したまひしものなり、されば其の宣說したまふ教法應に佛說金口のそれの如く奉戴すべきなり。

顯示難行陸路苦　信樂易行水道樂

以下六句は龍樹大士の釋義の綱要を述ず、其中今の二句は難易二道の判釋を示す、正信偈大意に、

カノ龍樹ノ、十住毘婆娑論ニ、念佛ヲホメタマフニ、二種ノ道ヲタテタマフ、一ニハ難行道、二ニハ易行道ナリ、ソノ難行道ノ修シカタキヲタトフニル、陸路ノミチヲ、アユムカコトシトイヘリ、易行道ノ修シヤスキコトヲタトフルニ、ミチノ上ヲ、フネニノリテ、ユクカコトシトイヘリ、

と釋したまへり、されは此の二句は菩薩の十住毘婆娑論によりて顯したまふなり、論の第五易行品に云く、

佛法ニ無量ノ門アリ、世間ノ道ニ難アリ易アリ、陸路ノ歩行ハ卽チ苦ク、水道ノ乘船ハ卽チ樂シキガ如シ、菩薩ノ道モ亦是ノ如シ、或ハ勤行精進ノモノアリ、或ハ信方便ノ易行ヲ以テ、疾ク阿惟越致地ニ至ルモノアリ、

先づ難行道とは易行品右に『諸の難行を行じ、久ふして乃ち得べし、或は聲聞辟支佛地（緣覺）に墮す』とあるものゝ如き是なり、之を諸久墮の三難と稱す、諸とは修すべき行の數多なるものをいひ、久とは修行成就して佛果に至るには三大阿僧祇といふ永き〳〵時間を要するをいひ、墮とは其心甚だ堅固にあらざれば、中途にして惡魔のために障碍せらるゝ所となり、二利成就するを得ず或は二乘地聲聞緣覺に墮して佛果に達する能はざるに至るをいひ、論註上右には更に五難を擧げて難なる所以を示したまへり、之を要するに儉難なる陸路は之を歩行するに苦難なる如く、諸善万行を修して佛果に至らんとする法は其行甚だ儉難にして之を修する亦苦難なり、是をこれ難行道といふなり。

次に易行道とは念佛の一行を以て佛果に至るの法にして前の三難及び五難に反して知るべし、之を要するに平易なる水道を船に乘じて行くは極めて安易なるが如く、念佛の一行を以て佛果を開くことを得る法は其行頗る平易にして之を行ずる亦安易なり、是を卽ち易行道と名くるなり。

然るに易行品に明したまへる易行法は、唯彌陀法のみにあらず廣く諸佛に通じて之を示したまへり、蓋し同じく易行法といふに、眞なるあり假なるあり、其の眞なるものとは彌陀佛の選擇本願願力攝取の法門にして、十方世界に於て更に倫匹なく、釋尊の以て出世の本懷となし、諸佛の以て證誠したまふ所もの

の是なり、其の假なるものとは諸善万行を修すべき難行道に堪ゆる能はざる衆生を誘引する一箇の方便法にして、尚ほ万行中の隨一に位する念佛の法なり、卽ち万行中より稱名の一行を取りて、佛名を稱念する力を以て佛果を得せしめんといふ自力念佛の法門なり、而して佛果を得せしめんといふも直に成佛せしめんといふにはあらずして、万行に堪へざる怠隋のものを誘引して、彼等に堪へ得る念佛の一行を授け、以て佛緣を結ばしめんとする一箇の方便法なる耳、彌陀法は然らず、既に往生正覺不二を誓ひたまへる本願の存するあり、而して又其念佛は稱名の功を募る自力念佛にあらずして、往生の正因は佛智を領する信一念に滿足し、信後の稱名は聲々更に其功を認めず、全く佛力を讃仰する他力の念佛なり、されば諸佛念佛の如きは一往六度の難行に對すれば易行なりと雖、彌陀念佛に比すれば尚是れ難行中に攝せらるべきものにして、易行中の眞易行は唯彌陀の法門なるのみ、然るに易行品に於て諸佛法をも明したまへるは難行道に偃促せるものを誘引して眞易行に入らしむる法便の施設なるのみ、是を以て天親菩薩は諸佛を捨てゝ一心に盡十方無导光如來に歸命したまひ、曇鸞大師は『易行道とは謂く但だ信佛の因緣を以て淨土に生れんと願するれば、佛の願力に乘じて便ち彼の淸淨土に往生を得しむ、佛力住持して卽ち大乘正定聚に入る』と易行道を以て彌陀法に局りたまふ之がためなり。

然り而して難易を判したまふは、其の意人をして難を去りて易に就かしむるに在り、故に難行には顯示とのたまひ、易行には信樂とのたまひ、以て龍祖の本意を知らしめたまふ、顯示とは顯露曉示、信樂とは信受愛樂、この顯示と信樂とは對句をなして龍祖の功勳をあらはすの語なり、卽ち難行道の苦しきことを曉し示し、これに對して易行の水道は寔に心易く樂々淨土に往生し得る法なれば信受愛樂せよと敎へたまへる是れ龍樹菩薩の本意なればなり、故に高僧和讃に云く、

龍樹大士世ニイテ　難行易行ノミチヲシヘ
流轉輪廻ノワレラヲハ　弘誓ノフネニノセタマフ

抑も十住毘婆娑論十七卷は華嚴經の十地品を釋したまへるものなり、然るに此の中に於て彌陀易行を明したまふもの、進んでは彌陀法を宣揚するの當を得ざるが如く、退いては所釋の華嚴經に違するが如しと雖、難行を具說する中にありて易行を示したまふは尙ほ是れ敵中に入りて敵首を斬るが如く、難行を癈し易行を立つる難易癈立の妙手段なりと云ふべし、又華嚴經は所々に阿彌陀佛のことを說けるあり、且つ最後の入法界品には普賢菩薩は善財童子に法界に入るの因として十大願を授け此願正に彌陀佛の淨土に往生して滿足すべきを說けり、龍樹菩薩は能く此の經の密意を探り、釋尊の本意を傳へ難易の妙判を下したまひしなり、根本法輪たる華嚴經一たび癈せらるゝや技末法輪たる一代の諸敎自ら癈せられて、大聖興世の正意たる誓願一佛乘茲に顯揚せられたるものといふべきなり。

此の難易に二道の鴻判一たび龍祖によりて創唱せられてより、鸞大師は自力他力を以て之を精取し、綽和尙ほ亦承襲して聖道淨土の妙判をなしたまへり、今家癈立の宗義二道の洪判に基かざるなし、二道創判の功千百昭々寔に偉なりと謂つべきなり。

憶念彌陀佛本願　自然卽時入必定
唯能常稱如來號　應報大悲弘誓恩

上の二句に於て難易二道の大判を擧げて、難行道は陸路の步行、易行道は水道の乘船、故に難を捨てゝ易を信ずべきを示したまへり、然るに前述の如く易行品中には諸佛彌陀等に通じて易行法を說きたまへるを以て、今論主の本意を顯して彌陀易行を明したまひ、是れ偏に易行の至極たることを示したまふもの卽ち此の二行四句の意なり。

今の四句前半は信心正因、後半は稱名報恩、此の信因稱報は弘願一乘の法本にして高祖の力めて釋顯し、中祖の殊に之を詳明したまふところ、實に是れ千古不刊の定律他力眞宗の極致たり、若し此の定敎に違背せんが是れ他流にして高祖門下の徒にあらず、深く意を留むべきなり。易行品九右に云く、

阿彌陀佛本願如「是　若人念」我稱」名自歸
卽入二必定一得二阿耨多羅三藐三菩提一、是故常應二憶念一

是れ卽ち大經所說の第十八願を祖述せるものにして、若人は十方衆生、念我は三信、稱名は乃至十念、卽入必定等は若不生者不取正覺亦これ成就文の卽得往生住不退轉に當れるなり、他力易行の骨髓唯此の一文に在り。

憶念とは憶持して忘れざるをいふ、唯信文意に云く、

憶念トイフハ、信心マコトナル人ハ、本願チツ子ニ、オモヒイツルコヽロノ、タエスツ子ナルナリ、

と、又御文に云く、

如來チタノムコヽロノ子テモサメテモ憶念ノ心ツ子ニシテ云々、

と、之等の解釋によれば、憶念とは願力を信ずる心の後々相續するに名くるなり、然るに今の憶念とは衆生が初めて阿彌陀佛の本願他力に歸依せる一念の信心をいへるなり、何を以て最初の信念を述ぶる所に後々相續の憶念の語を用ひられしやといふに、抑他力眞實の信心は金剛不壞の信なるが故に、最初の信心一貫して後々までも相續し、往生は一定御助けは治定なりと思ふ信念は命終の時までも絶へざるなり、是れ他力眞實の信心なる所以にして、若し自力搆成の信なれば若存若亡にして決して相續せざるなり、然れば則ち相續の有無により て信心の眞僞は知らるゝなり、是を以て元來の文字は最初の信念が後々まで憶持して忘れられざる憶念の悟なれども、其の相續信念たる憶念の語を以て却て最初の信念の語に用ひて、此の一念の信心に後々まで相續すべき眞實の信なることを顯はさんが爲に、特に憶念彌陀佛本願とのたまひしなり、

信卷末左に願成就の一念を轉釋して相續心に至り、次に

憶念ハ卽チ是レ眞實ノ一心ナリ

とのたまへるは此の意なり、されば初の一句は餘佛を信なるにあらず、阿彌陀の本願他力攝取の法門を明信したる信の一念にこいふ意なり。

自然卽時入必定とは、上の句は信を明せるを以て此句は其の益を示す、卽ち

憶念の密益を擧げて、信心正因の義を顯すなり、自然の詞の願力の妙用を顯し卽時入必定の益は毫も衆生の造作を待たざるを示す、末燈鈔十四に云く、

自然トイフハ、自ハチノツカラトイフ、行者ノハカラヒニアラズ、然トイフハ、シカラシムトイフコトバナリ、シカラシムルトイフハ、行者ノハカラヒニアラズ、如來ノチカヒニテアルガユヘニ法爾トイフ、

と、又最要鈔には自然といふは如來の本願力をもて往生を治定せらるゝこゝろなりと釋したまへり、然るに易行品の文には自然の言なし、今七字一句を成せんため此の二字を加へたまふ、論文にては必の字に自然の義を含めるなり、故に銘文には『必ハカナラストイフ、カナラストイフハ自然トイフコトロナリ』とのたまへり。卽時とは易行品九に云く、

人能念是佛、無量力功德、卽時入必定是故我常念

と、人能念の念は念我の念と同じくして、本願を憶念する信心を指す、卽ち乃至十念の稱名を待たず、發信の時と入必定の時と其時更に異なるなきを卽時といふなり、行卷廿五に云く、

卽ノ言ハ願力ヲ聞クニ由リテ報土ノ眞因決定スル時尅ノ極促ヲ光闡セル也

と、又六要鈔二末十四に云く、

卽ノ言ハ頓ノ義、命後ヲ待タス潛カニ信心開發ノ時分ニ正定聚ニ入ルコトヲ顯ス、

入必定とは入は契入、必定は亦正定といひ亦不退といひ或は不退轉といふ、論文に阿惟越致地といふは是なり、阿惟越致（又は阿鞞跋致 Avaivarlya ニシテ退轉セサルノ數ナリ）は梵音なり、必ず淨土に往生して佛果を證するに定り更に退轉するなき位をいふなり。

唯能常稱等の二句は稱名報恩を示す、唯とは簡持の義、餘行を簡んで彌陀佛の名號のみを稱するをいふ、能とは不堪に對す、若し信後の所作布施なりといはゞ貧者には不堪なり、讀誦なりといはゞ一文不知の者の堪ゆる所にあらず、然るに如實の稱名は遍數の多少を問はず、行住坐臥を論ぜざれば一切の機に堪

能なるし故に能といふ、常とは後々相續するに名く、稱如來號とは稱とは一多証文に云く、

稱ハ御名ヲトナフルナリ、マタ稱ハハ　リトイフコヽロナリ、

と、卽ち稱は口に如來の名號を唱ふるをいふ、又稱は銓にして權衡に名づく、乃ち權衡の物の輕重に契當する如く、稱名は能く名號の義に相應するを示して稱といふなり、されば名號全領の行者の唱ふる信後流出の如實稱名にあらざれば稱如來名とは云はざるなり、如來號とは阿彌陀如來の名號南無阿彌陀佛にして餘佛の名號にあらざるなり、

報とは報謝、大悲弘誓とは第十八願を指す、恩とは恩德なり、唯阿彌陀佛の第十八願力能く衆生を攝して必定に入り無上覺を得せしめたまふが故に應さに此の廣大なる慈恩を謝すべしとなり、和讃に

弘誓ノチカラヲカフラスハ　イツレノトキニカ娑婆ヲイテン
佛恩フカタオモヒツヽ、　ツネニ彌陀ヲ念スベシ、

このたまへる今とその意同じ、思ふに行者如實の稱名は「舞ふ人のすぐるゝわざにことたへて、ほむる言葉に名をぞ呼びけり」の俗歌の如く、上に向つては佛德を讃嘆する義を成じ、第十七願諸佛讃嘆の稱名に同ず、銘文に云く、

南無阿彌陀佛トトナフルハ、ホメタテマツルコトハニナルナリ

と、又下に向つては衆生化益の妙用を存す、和讃に云く、

佛慧功德ヲホメシメテ　十方ノ有緣ニキカシメン
信心スデニエンヒトハ　ツネニ佛恩報ズベシ、
無慚無愧ノコノ身ニテ　マコトノコヽロハナケレドモ
彌陀回向ノ御名ナレバ　功德ハ十方ニミチタマフ、

上佛德を讃し、下衆生を化す、これ報恩を成ずる所以なり、稱名既に報恩ならば、正因唯信なること明かなり、また唯信正因ならば、稱名は報恩にあらずして何ぞや、夫れ信因稱報は、今家の常敎にして、佛祖的傳の印璽たり、されば此の文初祖にありて、義下の六祖に貫くものと知るべきなり。

天親菩薩造論說　歸命無礙光如來

以下十二句は第二天親章にして、菩薩の淨土論によりて其の釋義を頌嘆したまふ、その中今この二句は、菩薩論を造り以て自ら阿彌陀佛に歸命したまひしことを述べたまふなり。

天親とは梵名婆藪槃豆Vasubandhuといひ、舊には之を天親と翻じ、新には世親と譯せり、菩薩は佛滅九百年頃、北天竺健陀羅Gandhāra國の首府富婁沙Purusa城の婆羅門の學者憍尸迦Pausikaの第二子として生る、兄弟三人あり、兄を阿僧佉Asanga(無着)といひ、弟を佛陀僧訶Buddhasimha(獅子覺)といふ、俱に博學聰明にして、道行並に高し、無着は夙に彌勒菩薩の教示を受けて大乘を信じたりしも、世親は初め小乘を信奉し、大乘非佛說の意見を懷けり、然るに後ち兄の教誨によりて、翻然大乘の深理なるを悟り、過去誹謗の罪を謝せんために、奮然これが弘通に務めたまへり、故に菩薩の著書大小乘に涉りて頗る多く、古來千部の論師と稱す(然るに現存するものは三十餘部に過ぎず)、而して晩年に至りては、佛意に透徹し、淨土三經の奧旨を該攝し、彌陀本願の眞實功德を讃嘆し、以て自行化他の鴻業を遂げたまへり、無量壽經優婆提舍願生偈(梵名阿彌陀度斯修多羅優婆提舍Amitayuhsutropadesa)といひ、往生論或は淨土論を通稱するものこれなり)は實にその本意を遺憾なく披瀝したまひし菩薩畢生の名著たり、今造論說といふは他の論をいふにあらず、この淨土論を製作したまひしを指すなり。

歸命無礙光如來とは、論主の自歸を嘆したまふものにして、淨土論の劈頭に於て、論主その自督の安心を述べて云く、

世尊我一心　歸命盡十方　無礙光如來　願生安樂國

歸命とは高祖銘文七十に「歸命トマウスハ如來ノ勅命ニシタカヒタテマツルナリ」と釋したまふ、卽ち本願招喚の勅命に歸順する信順無疑の相、これを歸命といふなり。

無礙光如來とは歸命せらるゝところの佛体を擧ぐ、具さには盡十方無礙光如

來といふべし、偈句窄きが故に盡十方の言を略したまふ、銘文八行に云く

盡十方トイフハ、盡ハツクストイフ、コトゴ〳〵クトイフ、十方世界ヲ、ツクシテ、コトゴ〳〵ク、ミチタマヘルナリ、無导トイフハ、サハルコトナシトナリ、衆生ノ煩惱惡業ニサヘラレサルナリ、光如來トマウスハ阿彌陀佛ナリ、コノ如來ハ、スナハチ、不可思議光佛トマウス、コノ如來ハ、智惠ノ相ナリ、十方微塵刹土ニ、ミチタマヘリト、シルヘシトナリ、

と、また唯信文意五十に云く、

無明ノヤミヲハラヒ惡業ニサヘラレス、コノユエニ無导光トマウスナリ、

と、されば無导光如來とは、衆生の惡業煩惱に礙へられたまはざる、無礙自在の力用を具へたまふ如來といふ謂にして、これ若不生者の誓願に答へたまふ本願成就の佛体なり、阿彌陀經には其の名義を說きたまひて「彼の佛の光明無量にして十方の國を照すに障碍する所なし、是の故に號して阿彌陀と爲す」といひ、觀經には亦別致を顯して「一一の光明遍く十方世界の念佛の衆生を照して攝取して捨てたまはず」このたまふもの卽ちこれなり、衆生一心歸命の安心を獲得するは、これこの無碍の光用に由る、無导光の名はこの本佛の德相を顯して遺憾なき嘉號といふべきなり、末燈鈔四十一に云く、

阿彌陀佛ノ、御カタチヲ、シラセタマハネハ、ソノ御カタチヲ、タシカニ〳〵、シラセマイラセントテ、世親菩薩、御チカラヲ、ツクシテアラハシタマヘルナリ、

と論主の力を佛德を顯すに盡したまひ、高祖の論主の功を嘆じたまふ、寔に由ありと謂つべきなり。

依修多羅顯眞實

以下三句は論主宣布の功を嘆ず、就中この一句は、三部の妙典によりて、眞實功德を顯彰したまひしを頌す、淨土論一に云く、

我依修多羅　眞實功德相

と、高祖銘文三十八に釋して云く、

依ハ、ヨルトイフ、修多羅ニヨルトナリ、修多羅ハ天竺ノコトハ、佛ノ經典ヲマウスナリ、佛教ニ、大乘アリ、マタ小乘アリ、ミナ修多羅トマウスイマ修多羅トマウスハ、大乘ナリ、小乘ニアラス、イマノ三部ノ經典ハ、大乘修多羅ナリ、コノ三部大乘ニヨルトナリ。

修多羅Sutra茲に翻じて契經といひ、佛の眞說を集錄せるものをいふ、往生論註上左に云く、

釋迦牟尼佛、在二王舍城及舍衛國一、於二大衆之中一、說二無量壽佛莊嚴功德一、

と、王舍城Rajagrhaは大經及び觀經を說きたまひしところ、舍衛(室羅筏悉底srāvasti=拘薩羅Kosala國の都城)の祇園精舍(梵語ヂエータバナビハーラJetavana-Vihara)は是れ阿彌陀經の說處なり、されば今修多羅とは淨土の三部妙典なることを知るべきなり。

顯眞實とは論に「眞實功德相」といふ、論註上右に釋して云く、

從二菩薩智惠淸淨業一起莊二嚴佛事一、依二法性一入二淸淨相一、是法不二顚倒一不二虛僞一、名爲二眞實功德一、

これは論の次下に明したまへる三嚴二十九種を指せるなり、この三種莊嚴は皆法藏菩薩の智惠淸淨の業、卽ち大願業力を以て莊嚴したまへるものなれば、之を眞實功德相と名くるなり、三嚴二十九種の莊嚴相とは、一に國土莊嚴、これに十七種を分つ、二に佛莊嚴、これに八種を分つ、三に聖衆莊嚴(又菩薩莊嚴といふ往生人の德を示す)、これに四種を分つ、斯く三種二十九種を以て廣く淨土の莊嚴功德を示したまふをいふ、然るに高祖銘文三十九丁に釋して、

眞實功德相トイフハ、誓願ノ尊號ナリ、

とのたまへり、卽ち名號を指して眞實功德相となしたまふ、これ一見論及び論註に相違したる釋なるが如きも、既に大經には名號を說きて、序分には「眞實之利」といひ、流通分には「無上功德」とのたまふ、茲を以て論註上左には「說二無量壽佛莊嚴功德一、卽以二佛名號一爲二經體一、」といへり、三部修多羅の所說、畢竟眞實無上の名號の開說たること以て知るべし、之を以て見るに、論主の開顯

したまひし三嚴二十九種は、これ一名號の德相を示したまふに外ならざるなり、然れば則ち廣の三嚴は遂に一句の尊號に攝入すといふべし、高祖の誓願の尊號なりとのたまふはこれがためなり。

顯とは顯示の義、論の偈によれば、眞實功德は三部修多羅に明せる法を指すなれども、今は菩薩修多羅によりて、之を論に說示したまへるを以て、菩薩顯實の功を嘆して、顯眞實とのたまふなり。

光闡横超大誓願

以下三句は上に所謂顯眞實の相を示す。

光闡とは光揚開闡の義、横超大誓願とは、他力眞實の第十八願なり、信卷末四に云く「横超とは卽ち願成就一實圓滿の眞敎眞宗是なり、乃至大願淸淨の報土には品位階次を云はず一念須臾の項に速かに疾く無上正眞道を超證す故に横超と曰ふ」と、横とは竪に對し他力の意を顯し、超は出に對し速疾の義を彰す、論の偈にこの横超大願の義を示して、

觀ニ佛本願力一、遇無ニ空過者一、能令三速滿足二功德大寶海一、

と、論註上二十六丁に之を釋したまへり、文に云く、

此ノ四句ヲ莊嚴不虛作住持功德成就ト名ク、佛本何故ニ此莊嚴ヲ起スヤ、有如來ヲ見ルニ、但聲聞ヲ以テ僧トナシ、佛道ヲ求ムル者ナシ、或ハ佛ニ値テ而モ三塗ヲ免レザルアリ、乃至又人佛ノ名號ヲ聞テ、無上道心ヲ發シ、惡因緣ニ遇ヒ、退テ聲聞辟支佛地ニ入ル者、是ノ如キ等ノ空過者退沒者アリ、是故ニ願ジテ言ク、我成佛ノ時、我ニ値遇スル者、皆速疾ニ無上大寶ヲ滿足セシメント、是故ニ觀佛本願力等ト言フ、

と、又高祖は銘文四十に釋して云く

觀佛本願力遇無空過者トイフハ、如來ノ本願力ヲ、ミソナハスニ、願力ヲ信スルヒトハ(遇)、ムナシク、コヽニトヽマラストナリ(無空過者)、能令速滿足功德大寶海トイフハ、能ハヨシトイフ、令ハセシムトイフ、速ハスミヤカニ、トクトイフ、ヨク本願力ヲ信樂スルヒトハ、スミヤカニトク、功德ノ

大寶海ヲ、信者ノ、ソノミニ滿足セシムルナリ、如來ノ功德ノ、キハナク、ヒロク、オホキナルコトヲ、大海ノミツノ、ミチミテルカ、コトシト、タトヘ、タテマツレルナリ、

と、能今とは他力を顯し、横の義なり、速とは論の大尾の「速得」成就阿耨多羅三藐三菩提」の速と共に超の義なり、この横超の大願、論主これを不虛作住持功德とのたまへり、不虛作住持功德とは論註下三十に云く、

不虛作住持功德成就トハ、蓋シ是レ阿彌陀如來ノ本願力ナリ、乃至不虛作住持ト言フハ、本法藏菩薩ノ四十八願ト、今日阿彌陀如來ノ自在神力トニ依ル、願以テ力ヲ成ズ、力以テ願ニ就ク、願徒然ナラズ、力虛設ナラズ、力願相符フテ畢竟ジテ差ハズ、故ニ成就ト曰フ、

と、衆生を攝して畢竟淨の報土に必ず入らしめたまふ、如來の十八願力、之を不虛作住持の佛德となす、論主一心歸命の安心は、全くこの不虛作の願力に觀達して發起したまへるところなり、論に廣く明したまふ三嚴も唯この願力の德相を開示したまへるに外ならず、その國土莊嚴は、この願力信者の生るべき報土、その聖衆莊嚴は、是れ往生人の受くべき德相たり、論右に『此三種成就願心莊嚴應知』とのたまへる意以て知るべし、思ふに龍樹菩薩さきに「本願如是」といふと雖、未だこれを詳かにするに遑あらず、今の論主かの遺緒を承けて、正しく三經を通申し、丕に本願の深致を顯開し、一論に廣くこれを光揚したまへり、光闡横超大誓願と嘆じたまへる寔に由ある哉。

廣由本願力回向　爲度群生彰一心

この一句は宣布一心の德を嘆ず、この句は「廣く群生を度せんが爲めに本願力回向に由る一心を彰す」の意にして、證卷終に、

論主宣布廣大無礙一心、普徧開化雜染堪忍群萌、

とのたまふと同意なるべし、由本願力回向とは、本願力は不虛作の願力、回向とは佛より衆生に向て回施したまふをいふ、論に「能令」とあるは卽ち回向の意なり、信樂の一心を獲得することは、衆生の自發し能ふものにあらず、全く如

來大悲の願心より發起せしめたまふものにして、佛より能く令めたまふものなり、故にこれを本願力回向之大信といふなり。一心とは信心の異稱にして、本願の信樂に當る、信卷本十八に云く、『信樂卽是一心也、一心卽是眞實信心、是故論主建言一心也』と、一の言は二に反す、二は是れ疑なり、疑に反するを信となす、故に一心は卽ち信心なり、故に又信卷末に云く、「信心無二心故曰一念是名一心」と、又化土卷本二十に云く、「一之言者名無二之言也、心之言者名眞實也」と、眞實とは卽ち佛心なり、佛智滿入の回向の大信なること以て知るべし、論主はこの一心の德義を開きて、論の長行（淨土論を偈頌及び長行の二段に分つ偈頌とは論の初の偈文をいひ長行とは後に此偈頌を解釋したまへる論文をいふ）に於て五念門を施設したまへり、五念門とは、一に禮拜門、身に阿彌陀佛を禮拜するをいふ、二に讃嘆門、口に阿彌陀佛の名を稱するをいふ、三に作願門、一心專念に阿彌陀佛の淨土に往生せんと願ずるをいふ、四に觀察門、正智を以て淨土の三嚴を觀察するをいふ、五に回向門、前四門の功德を一切衆生に回施して共に佛道に向はんと心に常に作願するをいふ、この中前四門は自利にして、第五は則ち利他の行なり、論主は善男善女この五念門を修して速かに菩提を成ずとせり、然らば衆生は之を修せざるべからざるやといふに、然らず、惑染の凡夫に斯る五念のあるべき理なし、無くして而も有るは法による、されば論註下四十二には「聚に其の本を求むれば阿彌陀如來を增上緣と爲るなり」といひ、「皆阿彌陀如來の本願力に緣るが故に」とのたまひ、高祖は二門偈に於て、更に功を本佛に推して、五念を以て法藏菩薩因位にありて修したまひし行となしたまへり、法藏菩薩因位に於て五念二利の行を修して一名號を成じたまふ、衆生この名號を領して一心を成ず、論主の五念を施設せるは、此の一心能く菩提の因を成ずるの理由を明にせんがため、一心に具する德義を開き、以て五念二利圓備することを示したまふのみ、高祖の「論主廣大無碍の一心を宣布す」と嘆したまふ全くこれがためなり。

廣とは普徧、群生は雜染堪忍群萌、度は開化、彰は顯彰にして宣布に當る、

論偈の終に云く、

我作レ論説レ偈、願見ニ彌陀佛一、普共ニ諸衆生一、往ニ生安樂國一、

と、論主の論を造りて一心を顯彰したまふは、但自己の領解を述べたまふに止らず、廣く一切衆生を濟度したまはんがためなり、故に高祖嘆じて云く、

愚鈍ノ衆生解了易カラシメン爲ニ、彌陀如來三心ヲ發シ玉フト雖、涅槃ノ眞因ハ唯信心ヲ以テス、是故ニ論主三ヲ合シテ一ト爲セル歟、（信卷本十七丁右）

と宣ひ、廣く本願の至心信樂欲生の三心と、論主の一心との一致なるを辯じ、

信ニ知リヌ、至心信樂欲生、其言ハ異ナリト雖、其意ハ惟レ一ナリ、何以故、三心已ニ疑蓋雜ルコト無シ、故ニ眞實ノ一心是ヲ金剛ノ眞心ト名ク、乃至是故ニ論主建ニ我一心ト言ヘリ、（信卷本二十九丁）

このたまへり、抑も本願の三心は報土の眞因たり、然るに無始生死の凡夫、唯妄心のみ相續して、未だ其れ諸を見ず、報土の因に於て、豈に其の分あらんや、是を以て一一佛邊にありて、之を修成し回施したまふなり、全く無きの機、具さに有るの法を受く、その領受の相これを信樂といふ、而してその領受せるの法を說きて至心といひ、信樂の相淨土に向ふときの義相を別して欲生と名く、されば佛力を仰ぐ無疑の信樂の所に、至心欲生は自ら備りて、報土往生の因茲に成ず、これを三心卽一心の義相とす、論主この本願固有の義意を示して、「世尊我一心等」とのたまへり、これを論主合三爲一の勳功とす、若し夫れ斯る廣大なる三心、これを機に於て成ぜんと企てんか、等覺の彌勒と雖尙ほ能くする所にあらず、況んや愚鈍の衆生に於てをや、唯彌陀修成の三心を領するのみ、而もこれを領するは信樂の一心にあり、いでや吾人は論主懇切の指導によりて、驀直に本願の白道を活步せむかな。

歸入功德大寶海　必獲入大會衆數

以下六句は一心の利益を述す、中に於て今の二句は現生に於ける利益なり。

歸入とは歸依投入の義にして、一心歸命をいひ、次の海の字に應じて入の字を加ふ。功德大寶海とは、語を不虛作の偈文より取る、一多證文二十五丁に云く、

功德トマウスハ名號ナリ、大寶海ハ、ヨロツノ功德善根、ミチキハマルヲ、

海ニタトヘタマフ、コノ功德ヲ、ヨク信ズルヒトノ、コヽロノウチニ、スミヤカニ、トクミチタリヌト、シラシメントナリ、

と、さればこの一句は、功德の寶海たる南無阿彌陀佛を信ずればの意なり。

必獲入大會衆數とは、名號を信ずれば、必ず正定聚の位に住し、彌陀大會の數に入るといへる意なり、大會衆數とは、彌陀佛の說法の會座に列りて、聞法愛樂する淨土の聖衆をいふ、論十丁に「得レ入二大會衆數一」といへり、大會衆數とは正しくは淨土にていふべきなれども、念佛の行者、たとひ未だ淨土に往生せざるも、既に淨土の聖衆と眷屬たり、論註下十三淨土の眷屬功德の釋に、

同一念佛無二別道一故、遠通夫四海之內皆爲二兄弟一也、眷屬無量焉可二思議一、

とたまひ、光明寺和尙は、玄義分五丁に、淨土の聖衆莊嚴を釋して、

聖衆莊嚴卽現在レ彼衆及十方法界同生者是、

とのたまふは此の意なり、是を以て高祖は今取て之を現益となしたまふ、和讃に「有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にすみあそぶ」と其意同じ、必ずは決定の義、信ぜずんば則ち止なん、苟くも信ずれば則ち決定して、この大益を得ることを示す。

得至蓮華藏世界　卽證眞如法性身

前二句は現益を擧げたり、以下四句は當益、卽ち淨土に往往して得るところの利益を明す、中に於て今の二句は眞證の果体を示す。

蓮華藏世界とは論に「得レ入二蓮華藏世界一」(十丁右)とあり、この名は元華嚴經毘盧舍那品に出でゝ、因人の知見する能はざる、毘盧舍那佛の報土を指す名なり、然るに論主は、取て以て阿彌陀佛の淨土の名としたまふ、抑も諸佛の證悟したまふ所は平等にして、その領する刹土(蓮華界)は各々皆十方世界に普遍し、一切の法門、一切の諸刹土を含攝する(藏)無礙圓融の妙土たり、今阿彌陀佛の安養界、十方刹土を統攝したまふことは、大經上卷終に、

衆寶蓮華周二滿世界一、乃至一一華中出二三十六百千億光一、一一光中出二三十六百千億佛一、身色紫金相好殊特、一一諸佛又放二百千光明一、普爲二十方一

説二微妙法一、如レ是諸佛各各安二立無量衆生於佛正道一、

このたまふによりて知るべし、されば彌陀の淨土よりいはゞ、十方諸佛國、盡くこれ彌陀法王家にあらざるはなし。これによりて今この名を以て、彌陀佛の眞實報土を顯し、雜行自力の行者の、たとひ淨土に往生するも、機の力を待みたるを以て、その機の淺深に隨ひて、九品の化土を感得するが如きにあらざるを示して、十八願の行者は、この無礙圓融の眞佛土に、往生するものなることを顯したまふなり。得至とは上の現益に簡んで、往生後の益なるを示して、至ることを得てといふなり。

眞如法性身とは、眞如とは眞は眞實にして僞妄ならざるをいひ、如は如常にして改異なきをいふ、法性とは眞如は普く一切諸法に遍して其体性となるをいふ、身とは積集の義にして眞如海中には一切の萬德を積集せるをいふ、論には「無爲法身」(八丁右)といふ、言は別なれども意は同なり、要するに大涅槃の妙果、これを眞如法性身といふなり、唯信文意に云く、

極樂無爲涅槃界トイフハ、(乃至)マタ論ニハ蓮華藏世界トモイヘリ、無爲トモイヘリ、(乃至)涅槃トマウスニ、ソノ名無量ナリ、クハシク、マウスニ、アタハス、オロ〳〵、ソノ名チアラハスヘシ、涅槃チハ、滅度トイフ、無爲トイフ、安樂トイフ、實相トイフ、佛性トイフ、法身トイフ、法性トイフ、眞如トイフ、一如トイフ、佛性トイフ、佛性スナハチ如來ナリ等、

と、斯の如き妙果は、蓮華藏世界に至るや、立ごころに證得するが故に、卽證といふ、往生卽成佛、これを眞實報土の證果となす、

遊煩惱林現神通　入生死園示應化

この二句は大涅槃の果体の上に起す、大悲攝化の妙用を明す、和讃に

願土ニイタレバスミヤカニ　無上涅槃チ證シテゾ
スナハチ大悲チオコスナリ　コレチ回向トナヅケタリ、

とのたまへり、前の二句は得至蓮華等の二句の意にして、後の二句は則ち今の一行二句の意なり、此句は論十の

以二大慈悲一観二察一切苦惱衆生一示二應化身一、廻二入生死園煩惱林中一、遊二戯神通一至二教化地一、

の文意を頌述したまふ。煩惱林と生死園とは。語を綺互せるものにして、煩惱生死の園林といふ意なり、卽ち攝化すべき場所を示す、煩惱は因にして、六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上)生死はその果なり、衆生の因果、これを園や林に譬へて、煩惱生死の園林といふ。現神通といひ、示應化といふは、大悲攝化の用を述す、神通とは、神は靈妙にして測るべからざるに名け、通は法として知らざるなく、一切の機類これを識らざるなく、自在無碍に衆生を濟度する妙用をいふ、應化とは應化身の略、機類に應じて種々の身を變化するをいふ、論七に云く

於二一佛土一、身不二動搖一、而遍二十方一、種々應化、如實修行、常作二佛事一、等

と、卽ち煩惱生死の迷界に入りて、神通應化の妙用を示現し、大悲化他の佛事をなす、これを大涅槃の極果の上の妙用となし、これを菩薩自娛樂の境界となす、故に生死の迷界を園林に喩へて、遊入園林とのたまふなり。

本師曇鸞梁天子　常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教　焚燒仙經歸樂邦

以下十二句は第三曇鸞章なり、中に於てこの四句は曇鸞大師の事蹟を叙し、以てその德を嘆ずるなり。

本師とは本宗の祖師といふ謂なり、曇鸞大師は實に本家相承の第三祖なり、大師は北魏の孝文帝承明元年(南朝にては宋の後廢帝元徽四年に當り我朝雄略天皇二十年西紀四百七十六年)雁門に生る、少して五臺山に遊び、備さに遺蹤を覩て、心神歡悅し、卽ち出家す、神智高遠にして、內外の典籍洞達せざるなし、四論宗の學は最もその邃を極めたる所なり、然るに大集經を讀み、その經の詞義深密、容易く開悟し難きが故に、これが註解を試みんとし偶々氣疾を發す、乃ち以爲らく、人命は危脆なり、若し長生の術を得るにあらざれば、浩瀚たる佛法、豈に能く悉く其蘊奧を窮むるを得んやと、仙術を求めんとし、去つて江南に行く。この際梁の武帝に謁し、佛性義を問答す、帝その機變無方なるに驚き、恭敬頗る重く、爾後常に侍臣を顧みて云く、北方

の鸞法師は肉身の菩薩なりと、恒に北遙に大師の方處に向つて、鸞菩薩と稱して禮拜せりといふ、今偈に梁の天子常に鸞處に向つて菩薩と禮すとのたまひ、和讃にも

本師曇鸞大師ヲハ　梁ノ天子蕭王ハ（蕭とは王の氏なり）
オハセシカタニツヲニムキ　鸞菩薩トゾ禮シケル

と嘆述したまふは是れこれを謂ふなり。時に梁に陶弘景なるものあり、茅山に隱遁して陶隱居と號す、方術に名高し、遂に往きて敎を請ひ、仙經十卷を受く大師欣然自ら以爲らく神仙必ず致すべしと、乃ち江南を發し洛陽に還る、恰も北印度の菩提流支Bodhirucci三藏（三藏とは經律論の三藏に達するの意なり）（三藏とは譯經僧の通號にして、學經、律、論の三藏に達するの意なり）に遇ふ、卽ち問ふて云く、「佛法中、長生不死の法、此の土の仙經に勝る者ありや」と、流支この言を聞き地に唾して云く、「是れ何の言ぞ、此の方、何の處にか眞の長生不死の法あらんや、縱ひ少時死せざることを得るも、終に復た三有に輪廻せんのみ」と、乃ち淨土の聖敎を授けて（諸傳或は觀經といひ、或は淨土論といふ）云く、「これ大仙方なり、これによりて修行せば、當に生死を解脫することを得べし」と、是に於て大師大に悟るところあり、立地に陶隱居より受けし仙經十卷を燒き、且つ舊來講ずるところの四論の學を捨て、專ら淨土の敎に歸し、安養淨土の往生を願したまひ、流支の譯せし天親の淨土論に註解を加へ、或は讃阿彌陀佛偈を著し、以て淨敎の面目を發揮し支那淨土敎發展の基礎を堅めたまへり、今偈に三藏流支淨敎を授けしかば、仙經を焚燒して樂邦に歸せりとのたまひ、また和讃に、

本師曇鸞和尙ハ　菩提流支ノオシヘニテ
仙經ナガクヤキステ、　淨土ニフカク歸セシメキ
四論ノ講說サシオキテ　本願他力ヲトキタマヒ
具縛ノ凡衆ヲミチビキテ　涅槃ノカドニゾイラシメシ

と述べたまふは、實にこの事跡を嘆じたまふものなり、噫大師の得悟の敏疾なる、言下に頓に舊執を棄て、更にまた餘燼なし、大師の傳を讀む、玆に少省

する所なかる可けんや。

爾來大師の化風益々揚り、自行また厚し、魏主孝靜帝大に師を重んじ、號して神鸞と稱し、勅して幷州の大巖寺に住せしむ、晩年に至り汾州石壁の玄忠寺に移住したまふ、世人この地を呼むで鸞公巖と號す、斯くして魏の興和四年、春秋六十有七にして、遙山寺に寂と示したまへり、高僧和讃曇鸞章に傳を叙したまふが如し。

天親菩薩論註解

是より以下は釋義を述す、この一句は下八句の標擧にして、天親菩薩論とは天親菩薩の著たる淨土論をいふ、註解とは鸞師が其の論に解釋を施して淨土論註二卷を製作したまひしを指す、高祖嘆じて云く、

天親菩薩ノミコトヲモ　鸞師トキノベタマハスハ
他力廣大威德ノ　心行イカデカサトラマシ

と論の幽意註を待ちて初めて顯然、論論註と幷稱する寔に由あり矣。

報土因果顯誓願　往還回向由他力

以下正しく釋義を述す、往還因果、皆誓願他力に由ることを顯示したまふ、是れ實に鸞師畢生の力を盡したまへるところにして、師の釋功この二句に攝まりて餘蘊なきなり。

報土とは安樂集上十に云く『今この無量壽國は是れその報の淨土なり、佛願に由るが故に』と又玄義分十九には第十八願を引きて『今既に成佛し玉へり、是れ酬因の身なり』といひ、又『凡そ報といふは因行虛からず定んて來果を招く果を以て因に應ずるが故に名けて報となす』とのたまへり、卽ち法藏菩薩の發願及び修行に酬報して成就せる西方安樂世界、これを卽ち報土といふ。報土の名は斯く安樂集玄義分に出づと雖、義は既に論論註に創る、論に三種成就願心莊嚴とあるは卽ち是なり、淨土の三種莊嚴悉く法藏菩薩の大願心の莊嚴成就とのたまへるが故なり。抑も報佛如來の眞實報土は、佛々の知見にして二乘凡夫の測知するを許さず、今阿彌陀佛の報土は大悲の願心より成就せる別願酬報の

土なるを以て、虚偽輪轉の衆生をして、同じく自己の妙境に契はしめたまふものなれば、本佛の自境界にして、而も亦凡夫受用の境界たり、これ未だ諸佛のなきところにして、十方世界中唯阿彌陀如來の報土に局れる獨特無上の德義なり、往生禮讃三十に『四十八願莊嚴起、超諸佛刹最爲精』このたまへる卽ちこの謂なり。

因果と云に二義あり、一に報土を成ずるの因果、二に報土に生ずるの因果、前義は如來に就て云ふことにして、阿彌陀佛が報土を建立したまひし因と果と云ふことなり、後義は衆生に就て云ふことにして、衆生が報土に往生するの因及び果と云ふことなり。

顯誓願とは誓願力に緣ることを顯すの謂なり、若し前義に從ひて、報土建立の因果とするときは、論註下八に國土莊嚴の總相たる清淨功德の論文「觀彼世界相、勝過三界道」といへるを釋して『世界相とは安樂世界清淨の相なり、その相別して下に在り（國土莊嚴の別相たる十六種莊嚴を指す）勝過三界道とは、道は通なり、此の如き因を以て此の如き果を得、此の如き果を以て此の如き因に酬ふ、因を通じて果に至り果を通じて因に酬ふ、故に名けて道となす、乃至安樂は是れ菩薩慈悲正觀の由生如來神力本願の所建なり』このたまへる文、又は下卷六に『佛土不可思議に二種の力あり、一に業力謂く法藏菩薩の出世善根と大願業力の成ずる所なり、二に正覺阿彌陀法王の善住持力を以て攝し玉ふ所なり、』このたまへる意にして、安樂報土は三界虚妄の因果を勝過せる如來清淨の願心に緣りて莊嚴せることを示したまへるを指すなり。若し後義によりて報土往生の因果と解すときは、論註下三十四の『凡そ是れ彼の淨土に生るゝと及び彼の菩薩人天の起す所の諸行は、皆阿彌陀如來の本願力に緣るが故に』と宣へる文意にして、生彼淨土とは衆生往生の因及び果、所起諸行とは往生人の所作にして滅度果上自然の働作なり、斯の如き衆生往生の因も果も、皆悉く阿彌陀佛の本願力に緣ることを顯すに、次に第十八、第十一、第二十二の三願を的引し、以てその義意を示したまへり、故に報土因果顯誓願といふ、この義尙次の句を解するに當り辨ずる所あるべし

以上二義共に論註に顯れたりと雖、今偈の所明後義親しきが如し。高祖嘆じて『若は因若は果、一事として阿彌陀如來の淸淨願心の回向成就し玉へる所に非ざることあると無し、因淨なるが故に果亦淨なり』(證卷五)とのたまへる全く同意なり。

往還とは往相還相の略なり、往相とは往生淨土の相狀にして、阿彌陀佛の淨土に往生する「すがた」、還相とは還來穢國の相狀にして、淨土に生じ已りて衆生濟度の爲に再び此の穢土に還り來る「すがた」といふことなり。

回向とは論註下五に五念門の第五回向門の釋に云く、

回向有二二種相一、一者往相二者還相、往相者以二己功德一、作願共往二生彼阿彌陀如來安樂淨土一、還相者生二彼土一已、得二奢摩他毘婆舍那方便力成就一、回入二生死稠林一、敎化一切衆生一共向二佛道一

と、又同二十に云く、

凡釋二回向名義一、謂以二己所集一切功德一施與一切衆生一共向二佛道一

と、往相の回向とは己が積集せる前四念の善根功德を一切衆生に回施し共に淨土に往生せむと作願するをいひ、還相の回向とは淨土に生じ已り再び此の土に還來して一切群生を敎化するをいふ、然るに論註に所謂以己功德回施一切衆生といへる己功德とは、恰も行者自身の修する功德なるが如きも、元來五念門とは前にも云へるが如く(百二頁參照)無疑の一心の中に具備せる如來施與の德義を聞き、以て自利(前四念門)利他(第五回向)圓備するが故に、佛因正しく究竟するものなるを示したまふ論主施設の法門にして、己れが功德といふも、實は萬德圓備の名號を領する端的に、佛の功德、無善の凡夫に圓具するものに外ならず、啻に回向すべき善根のみ佛の施したまふ所にあらず、之を回施せむとする利他の回向心、亦全く佛力より與へたまへる德義に外ならざるなり、故に論註下三十四に云く

論言修二五門行一以自利利他成就故、然覈求二其本一阿彌陀如來爲二增上緣一、他利之與二利他一談有二左右一、自佛而言宜言二利他一、自衆生而言宜言二他利一、今將談佛力是故以利他言之

と、五念總じて佛力の回施したまふ所、因既に佛力なり、果豈に佛力ならざるを得むや、是を以て次下の文に云く、

凡是生彼淨土及彼菩薩人天所起諸行、皆緣阿彌陀如來本願力故、

何以言之、若非佛力四十八願便是徒設云云

と、生彼淨土とは往生の因果、彼菩薩人天所起諸行とは果上の悲用、皆緣阿彌陀如來本願力とは佛力の回施を彰す、高祖善く註意に透徹して生彼淨土に往相の名を冠し、所起諸行に還相の目を附し、往相還相を衆生領受の物體となし、緣本願力の文は全く佛の方より衆生に向つて回施したまふを顯すものなれば、回向の言を佛邊に屬し、佛力回向と談したまふなり、文類聚鈔に『然るに本願力回向に二種の相あり、一には往相二には還相』とのたまひ又和讃に『彌陀の回向成就して、往相還相ふたつなり』とのたまへるは此の意なり。上述の如く回向の談、論々註は一往行者に就ての談なれども、覈求其本の文より遡りてその意を窺はゞ、佛力回向の義廓然たりと謂つべきなり。

由他力とは、論註次の文、三願を的取し、以て往相還相共に阿彌陀如來の本願力に緣るの義意を證明し

以斯而推他力爲增上緣得不然乎、

とのたまへり、高祖これによりて行卷四十丁左には言他力者如來本願力也とのたまへり、卽ち佛回向の往還二相は全く誓願他力によりて得せしめたまふと云ふを顯して由他力といふなり。

的取三願とは、一に第十八願、卽ち往相の因たる信心を誓ひたまへる至心信樂之願、二に第十一願、卽ち往相の果たる滅度を誓ひたまへる必至滅度之願、三に第廿二願、卽ち還相の悲用を誓ひたまへる還相回向之願これなり、この往還因果たる信心滅度及び還相の利益全く三願力によりて得る所なり、之を他力といふ、報土往生の因果のみにあらず、滅度果上大悲攝化の一切の所作、皆悉く他力の然らしむる所にあらざるはなし、高祖嘆じて『若は往若は還、一事として如來清淨願心の回向成就し玉ふ所に非ざると有ると無し』とのたまへる此の意なり。

抑も彌陀の本願は『諸の衆生をして功德成就せしむ』の願心より起る、釋尊乃ち說きて『如來加威力に由るが故に能く是の如き廣大の法門を得』と宣ふ、鸞師之を承けて論註始終他力を以て一貫す、鸞師分別二力の功寔に大なりと謂つべきなり、卽ち論註初には難行道を判して『唯是れ自力にして他力の持なし』と斷じ易行道を說きて『佛の願力に乘じ便ち彼の淸淨土に往生を得しむ』といひ、終には自力他力の相を例示して

如人畏三塗故受持禁戒、受持禁戒故能修禪定、以禪定故修習神通、以神通故能遊四天下、如是等名爲自力、又如劣夫跨驢不上從轉輪王行、便乘虛空遊四天下無所障碍、如是等名爲他力。遇哉後之學者、聞他力可乘當生信心勿自局分也

とのたまへり、註家懇篤なる指導豈に仰がざるべけんや。

正定之因唯信心

以下五句は上の報土因果等の二句を承け、別して往還因果の相を示すなり、中に於て今の一句は往相の因、卽ち唯信心のみ正しく往生の眞因なるの義を明す、論註上に云く、

易行道者謂但以信佛因緣願生淨土、乘佛願力便得往生彼淸淨土、佛力住持卽入大乘正定之聚、正定卽是阿毗跋致、

と、又下卷終三願を的取して他力增上緣を證明したまへる中、第十八願は信心を誓ひたまへるもの、第十一願は正定及び滅度を誓へるもの、これ正定の因は唯信心なりとするの文據なりといふべし、高祖信卷本末信樂の釋に云く

斯心者卽如來大悲心故必成報土正定之因、

と、正定之因とは銘文に五十云く

正定ノ因トイフハ、カナラズ無上涅槃ノ、サトリヲヒラク、タネトマウスナリ

と、唯信心とは涅槃の眞因は唯信心を以てすの謂にして、論註には但だ信佛の因緣を以てといふ、唯といひ但といふ、共に他法を簡び去りて一心を持取し、

他力究竟の眞因は信心一法にあることを示す、此の一句上天親章の歸入功德大寶海等の二句に應じて其意彼と全く相同じ。

惑染凡夫信心發　證知生死卽涅槃

此の二句は往相の果を明す、此の中初句は將に證果を明さんとして、重ねて上の信を提げ、以て信因佛果間に髮を容れざるの玄機を示す。惑染凡夫とは論註下八に「凡夫人煩惱成就」といふ、惑とは事理の諸法に於て迷惑して了せざるをいひ、染とは淨心を汚穢するに名く、共にこれ煩惱の異稱にして、煩惱成就の劣機これを惑染凡夫となす。信心發とは上の唯信心を擧げて、內佛願に因り外師敎に緣り惑染の心中に能く眞實の淨信を生ずれば則ち更に其の餘を顧ず證果掌に在るの旨を詳にす、論註下二十四に『高原陸地不生蓮華卑濕淤泥乃生蓮華、此喩凡夫在煩惱泥中爲菩薩開導能生佛正覺華』といひ、善導大師の『衆生貪瞋煩惱中能生淸淨願往生心』(散善義十二左)といふものよく此の一句の義に合す。

證知生死卽涅槃とは正しく往相の證果を明す、論註下三十四に佛所得の法を無上正徧道と名くるを釋して

經言(華嚴經)十方無碍人一道出生死一道者一無碍道也、無碍者謂知生死卽是涅槃、如是等入不二法門無碍相也

といへり、生死涅槃その體一なり、波と水と體二なきが如し、衆生無始已來迷倒の見に住して此の實相を究むる能はず、佛のみ能く生死卽涅槃無碍の相を證見したまふ、然り而して聖道自力の法門にありては、自己の心性に就て此の理を究めむとすれども、往生淨土の法門にありては然らず、身迷界に留まれる間は、生死涅槃融歷の見を脫するを得ずと雖、極樂無爲涅槃界に至りて初めて此の不二の法門無碍の相を開覺するものなり、故に和讃に

本願圓頓一乘ハ　逆惡攝ストシテ信知シテ
煩惱菩提體無二ト　スミヤカニトクサトラシム

とのたまひ、また『眞實報土ノナラヒニテ煩惱菩提一味ナリ』とのたまへり。證

知とは正しく彼土に於て證得せしめたまふを示す、此の二句上天親章の得至蓮華藏世界等の二句に應ず、幷思すべし。

必至無量光明土　諸有衆生皆普化

此の二句は還相の利益を示す、無量光明土とは、諸佛の淨土もまた清淨にして皆光明ありと雖、彌陀の光明は邈に等數を踰へて比況するところなきが故に無量といふ、光明土とは淨土論に國土の形相功德を說きて『淨光明滿足、如鏡日月輪』とのたまふ、光明は智慧の相なり、佛智顯現の眞實報土これを光明土となすなり、土は心身を安んずるに名く、必とは上の信心の文を承くるの意、信心を發すれば必定して此の安身の土に至るをいふ、此の土に至ればまた必ず衆生攝化の大悲心を起す、諸有衆生皆普化とは此の謂にして、これを大悲還相の利益となす。抑も無量光明土とは元大經異譯の平等覺經に出でたり、文に言く

速疾超便可到　安樂國之世界　至無量光明土　供養於無數佛
其奉事億萬佛　飛變化遍諸國　恭敬已歡喜去　便還於須摩提

この文の意は疾く彌陀の淨土に往生せし行者は、十方諸佛の淨土に至り、無數の佛を供養し、また飛で須摩提に還るといふことにして、無量光明土とは卽ち諸佛の淨土をいひ、須摩提Sukhavati(極樂)とは是れ彌陀の安樂世界なり、然るに高祖は眞佛土卷の開首に於て、

謹按眞佛土者、佛者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也、

とのたまへり、卽ち高祖は諸佛淨土に名けたる稱を以て、彌陀眞土の名稱となしたまひしなり、その義いかん、良に以れば盡十方無礙光如來は、周遍して法界を統御し、虛空の如く廣大にして更にその邊際あることなし。論註上丁五に云く、『若し一佛、三千大千世界を主領すと言はば、是れ聲聞論の中の說なり、若し諸佛、徧く十方無量無邊の世界を領すと言はゞ、是れ大乘論の中の說なり』と、上に蓮華藏世界を解するが如く、阿彌陀佛は十方無量無邊の世界を領し、十方法界彌陀の所領にあらざるはなし、されば讃阿彌陀偈十八には

我歸阿彌陀淨土　卽是歸命諸佛國

このたまひ、更に善導大師は往生禮讃十三に『十方諸佛國は盡く是れ法王家なり』といひ、般舟讃十には『同學相隨ふて法界に遊ぶ、法界は即ち是れ如來の國なり、乃至本國他方亦二なし、悉く是れ涅槃平等の法なり』このたまへり、然れば則ち彌陀眞佛の領したまふ無礙圓融の眞土を指して無量光明土と名けたまひし祖意知るべきなり。

諸有衆生とは化益せらるゝ所の衆生なり、その種類一にあらざるが故に諸といひ、生死連綿し因果亡ずることなきが故に有といふ、三有、二十五有（四州ノ四有、四惡趣ノ四有、六欲天ノ六有、梵天、無想天、五那含天各一有、四禪天、四空處天各四有）（二十五有ノ中五那含天ヲ開キテ五トス）等に分別すれども、要するに三界を出でず、三界虛妄の衆生これを諸有衆生といふ。皆普化とは處として化せざるなく、生として化せざるなきをいふ、或は人をして天を化せず、近を化して遠を化せず、親を化して疎を化せざる如きにあらず、無量光明土に至れば則ち佛地の功德を具足し、利他敎化地を得、法輪を轉じて休息なく、普く一切を開導して遺すなきを示す、この句又上の遊煩惱等の二句と意相同じ。

道綽決聖道難證　唯明淨土可通入

以下八句は第四道綽章にして、和尙の安樂集により、聖淨二門の判釋を述べ、末法濁世にありては、唯淨土一門のみ通入すべきことを明したまふなり。

道綽和尙は并州汶水の人にして、陳の文帝天嘉三年壬午（我朝欽明天皇二十三年西紀五百六十二年）に誕生、十四にして出家し廣く諸經論を學び、特に涅槃經に通じ、これを講ずること前後二十四回、後瓚禪師に從ひて禪を修めたりといふ、年四十八にして玄忠寺に至り、曇鸞大師の廟碑の文を見て、飜然として淨土の念佛に歸し、爾來全く涅槃の廣業をさしをきて、念佛することヨ課七萬遍、觀經を講ずること二百遍、以て念佛弘通につとめたまひしかば、近縣の道俗悉く念佛に歸したりと、唐の太祖貞觀十九年乙巳（我朝孝德天皇大化元年西紀六百四十五年）四月廿七日八十四歳にして入寂したまへり、和讃に曰く

本師道綽大師ハ　涅槃ノ廣業サシオキテ
本願他力ヲタノミツヽ　五濁ノ群生スヽメシム

聖淨二門の判釋は道綽和尚を以て嬌始となし、又安樂集兩卷十二大門の要旨とす、上卷丁左第三大門中に曰く

一謂聖道、二謂往生淨土、其聖道一種今時難證、一由去大聖遙遠、二由理深解微、是故大集月藏經云、我末法時中億億衆生、起行修道末有一人得者、當今末法現是五濁惡世、唯有淨土一門可通入路、

と、佛一代の說法を聖道淨土の二門となし、其聖道門は正法の時こそ證る者あれ、當今末法の時誰れかよく證らん、且つ其經理深遠微細なるに於ては出離望みなし、以て月藏經の意を述べ聖道の難證なるを明し、今時末法にありて通入すべき門は、獨り淨土の一門のみなることを判決し給ふ、高祖其の功を嘆じて決聖道難證、唯明淨土可通入との玉へるなり、和讃に曰く

本師道綽大師ハ　聖道萬行サシオキテ
唯有淨土一門ヲ　通入スベキミチトトク

と、但し聖淨二門の判釋は和尚の私に非ず、遠く龍樹菩薩難易二道の判を承け給ふや明かなり、されば宗祖大師は化土卷本十六丁左に

凡就一代教於此界中、入聖得果、名聖道門、云難行道、乃至於安養淨刹、入聖得果、名淨土門、云易行道、

とのたまひ、此土入證を聖道門と云ひ、即ち難行道とし、彼土得證を淨土門卽易行道とのたまへるものこの意なり。

聖道とは其の名は十地論二十八に、微難知聖道、非分別離念とあるより出でしものにして、入聖の道佛果に至るの道若しくは聖人所修の道三乘の人の修する道の意なり、淨土とは詳に往生淨土と云ふ、論註下三十丁に隨順往生淨土法門とのたまふものこれなり、捨此往彼を往生と云ひ、淨人所居の土、淨因所建の土なるを以て淨土と云ふ、卽ち自力修行にして此土得果を聖道門と云ひ、他力廻向によりて彼土得證するを淨土門と云ふなり、難證とは安樂集上に、時に約し機に約して、二由一證を擧げたまふものこれなり、唯明とは簡びの言にして、彌陀法を除いて餘の法門はすべて難證、五濁の世一人として佛果を得るものなく、唯淨土の一門のみ佛果に

通入すべき法なりと明したまふなり、和讃に曰く

末法五濁ノ衆生ハ　聖道ノ修行セシムトモ
ヒトリモ證チエシトコソ　教主世尊ハトキタマヘ

萬善自力貶勤修　圓滿德号勸專稱

此の二句は聖淨二行の貶勸を明し、自力の行を捨てゝ、名號の一法に依らんことを勸め給ふの文なり、万善自力とは、自力を以て修するところの諸の功德にして、和尚はこれを萬行との給ひ、善導大師並に法然聖人はこれを雜行と名け、源信僧都は諸行とのたまひて、其の名は各々異なれども、其意共に一つなり、自力によりて修する善なれば、自力萬善と云ふべきなれども、次の圓滿德號に對して、萬善自力と倒まに造語したまふ、貶とは抑貶にして、勤修とは勤苦修習なり、能く勤修すと云へども、要するに虛假の善なれば、佛果を得るに由なく、未有一人得者の行なればこれを貶するなり、和讃に曰く

鸞師ノオシヘチウケツタヘ　綽和尚ハモロトモニ

在此起心立行ハ　此是自力トサタメタリ

と、この讃は安樂集上廿三に自力他力を述べたまふところの意にして、すべて穢土にありて菩提心を起し、修行するものを自力の萬善として、廢したまふなり。

圓滿德号とは無导光如來の名號にして、諸の善本を攝して餘すなく、德として缺ぐるところなきが故に圓滿と云ふ、畧文類の最初に萬行圓備嘉號とのたまふものこれなり、勸とは勸進にして、ひとへに專稱をすゝむるなり、專稱とは集上廿八に曰く

若論起惡造罪何異暴風駛雨是以諸佛大慈勸歸淨土縱使一形造惡但能繫意專精常能念佛一切諸障自然消除定得往生何不思量都無去心也

と、此の中專精常能念佛とのたまふもの專稱なり、專精とは一心のすがたにして、和語燈三十にマコトヲ專ニシテと訓じて、至誠心のことゝし、高祖は和讃にモハラコノミテトイフと左訓して、樂欲の心としたまふ、三信もとより一のものなれば、共に一心の義となる、卽ち一心一向に彌陀に歸して、念佛するも

のを專稱といふなり、これ如實修行にして、本願相應の法なれば、諸佛の共に勸めたまふ所以なり。

三不三信誨愍懃

この一句は上の專稱は、不如實の行に非ずして、他力廻向の大信を得、淳心一心相續心の眞實信より顯はるゝ、如實の稱名なることを示し、濁世の邪僞を導き給ふことを明すなり、この三不三信はもと論註下三不如實修行を釋するに、三種不相應を明したまふに始まる、文に曰く

又有三三種不相應一者信心不淳若存若亡故二者信心不一無決定故三者信心不相續餘念間故此三句展轉相成以信心不淳故無決定無決定故念不相續亦可念不相續故不得決定心不得決定心故心不淳與此相違名如實修行相應

と、不淳心不一心不相續心を以て三不相應行とし、これに反するを如實修行相應と定め給へり、道綽和尚これを相承して安樂集上冊二に曰く

復有三三種不相應一者信心不淳若存若亡故二者信心不一謂無決定故三者信心不相續謂餘念間故迭相收攝若能相續則是一心但能一心即是淳心具此三心若不生者無有是處

と、一者信心不淳の淳とは、宗祖大師は信卷本五に狹註して、常偸反又音純也厚ト朴也朴音也とあり、寛永本には常偸反又音純也又厚ト朴字音ト也とあれば、偸純は偸純の誤にして、純粹厚朴を淳といひ、俗にいふアリノマヽのことなり未燈鈔五に所謂、身口意ノミタレココロヲツクロヒメテタフシナシテ淨土へ往生セントオモフ、とは不淳心の相なり、これ若存若亡による、平等覺經の暫信不暫信にして信疑未だ決せず、或時は往生と思ひ或時は往生不定と思ふ、定散自力にかゝわれるものを不淳心と云ふ、これに反して機實のまゝ、つくろはず、いつはらず、淳粹無漏淸淨眞實の名号のまゝを、受けたるが淳心なり、一者信心不一とは、不一とは無二の義にして、二心なきをいふ、二心は卽ち心二想に渡る疑心のことなり、善見律十三十九に疑者二心也と云へり、高祖は信卷末に

信心無二二心故云一心一心とこの給ひて、猶豫多岐の思ひなく、決定して一向に本願を信ずるを以て一心とす、猶豫不定にして疑蓋雜るを不一心とし、無決定故とのたまふなり、三者信心不相續とは、信心相續せず、異學異見の爲めに動亂破壞せられ、餘念間はるをいふ、これに反して前念後念相續いで移轉せず、心々相續して他想の間雜せざるを相續心といふなり、而して以上の三信は、本願の三卽一の信心に就いて淳心一心相續心とこの玉ひしものにして、至心信樂欲生の三心各々此の三義を有するなり、されば文に一者信心等と三ながら信心とあるもの此の意なり、不淳心不一心不相續心の三不信は、順に逆に展轉してよく三不を成じ、信心をして獲るに由なからしむ、故に行者能く心を留めざる可からず。

誨慇懃とは、鸞師已に述べ給ひしものを、重ねて說き、特に迭相收攝と述べて、展轉の相を明にし。若能相續等と述べて三信の相を示し、若不生者無是處とのたまひて、本願の若不生者は唯信必生の義なることを明かにし、專稱の義を慇懃丁重に誨したまへばなり、宗祖本偈曇鸞章に三不三信を述べずして、道綽章にこれを讃したまふものこの所由なり。

像末法滅同悲引

此の一句は安樂集下十六丁の大四大門終に

釋迦牟尼佛一代正法五百年像法一千年末法一萬年衆生滅盡諸經悉滅如來悲哀痛燒衆生特留此經止住百年

とある文によりて述べたまふ、正像末の三時に就ては、其年時經によりて異り、大悲經には正法千年像法千年末法萬年とあり、悲華經には正法千年像法五百年末法萬年とあり、大乘三聚戒懺悔經には正法五百年像法五百年末法萬年とあり、而して賢刼經大集經等には正法五百年像法千年末法萬年とあり、和尙は此の中後者の說を取りて正法五百年像法千年末法萬年となし、高祖もこれを承けて化卷本三十四丁に集の文を引き、併せて最澄の末法燈明記を擧げて、正法五百年像法千年末法萬年とし給ふ、此の三時の中正法は敎行證の三共に具足して、能く佛果

に證入する者あれども、像法には教行のみありて、證るものなく、末法に至りては證は勿論修行するものもなく、唯教のみありて存す、而かも其の教たるや、末法萬年の末には悉く滅す、魏譯大無量壽經に曰く

我滅度之後復生疑惑當來之世經道滅盡

と、唐譯無量壽如來會に曰く

若於來世乃至正法滅時

と、これなり、尚ほ集上二には大集月藏經の五個五百年の說を引きて、正像末の相狀を示し、末法五濁の世には、一人も證を得るものなしと判定したまへり。同悲引とは、上に明せしところの、龍樹天親曇鸞(像法)、並に道綽和尚(末法之初)等の像末の諸師、同じく五濁の時機を悲嘆して、共に衆生を彌陀の淨土に引入したまふ意なり、これ淨土の法門は、正像末の三時を通じて變ちず、末法萬年三寶滅するのとき、釋迦の悲哀より念佛を留むること尚ほ百歲、以て衆生をして往生せしむ、巍譯大無量壽經に曰く

我以慈悲哀愍特留此經止住百歲其有衆生値斯經者隨意所願皆可得度

と、又唐譯無量壽如來會に曰く

正法滅時當有衆生殖諸善本已曾供養無量諸佛由彼如來加威力故能得如是廣大法門一切如來稱讚悅可若於攝取受持當獲廣大一切智智隨意所樂種諸善根

乃至是故我今爲大囑累當令是法久住不滅應勤修行隨順我教

と、末法に於て正法滅するの時、尚ほ能く得證するものあるは、これ念佛一法のみ、此の如き所由あるが故に、像末の諸師同じく悲引したまふなり、仰ぐべし。

一生造惡値弘誓　至安養界證妙果

この二句は今章最後に、佛願の勝益を結歎したまふ文なり、始め一生造惡とは下輩の凡夫を指し、集に所謂縱使一形造惡の意にして、其の起惡造罪を論ずれば恰も暴風駃雨の如く、起るところの身口意、悪く惡業ならざるはなし、値弘誓とは集に所謂但能繫意專精常能念佛等にして、値とは繫意なり、弘誓とは願力なり、値弘誓とは卽ち上に述べたまふところの專稱又な三信のことなり。

至安養界證妙果とは集に所謂定得往生にして、安養とは安住長養の意なり、戒度の曰く、安往秘藏長養法身と、無量壽を得て永く證に住する處を安養界と云ふ、卽ち極樂淨土のことなり、妙果とは往生卽成佛、涅槃の妙境界をいふなり、要するに造惡不善の凡夫と云へども、一心に彌陀に歸して、專ら稱名するものは、若不生者の誓ひによりて、父至滅度の大果を得ることを述べたまふなり、されば高祖は和讃に歎じて曰く

一形惡ヲツクレトモ　專精ニコヽロカケシメテ
ワ子ニ念佛セシムレハ　諸障自然ニノソコリヌ
縱令一生造惡ノ　衆生引接ノタメニトテ
稱我名字ト願シツヽ　若不生者トチカヒタリ

善導獨明佛正意

以下八句は善導章にして、其の中此の一句は標擧なり。善導とは師の諱にして、俗姓を朱氏と云ふ、泗州の人なり、隋の煬帝太業九年（我朝推古天皇卽位二十一年西紀六百十三年）に生る、幼にして密州の明勝法師に就いて出家し、法華維摩を誦せしが、聖道の法門は難行にして望みなきを知り、出でゝ廣く天下を周遊し、名德を歷訪して道を求め、終に唐の貞觀中、西河に至りて道綽禪師に謁し、淨土の法門を聞くを得て大に喜び、これに師事す、後京師に出でゝ盛に念佛を弘通し、入りては則はち合掌跪坐一心に念佛して、力竭くるに非れば出でず、以て寒冷にも汗を流すに至れり、外にありては道俗の爲めに勸化暫くも止むことなく、三十餘年間別に寢處なし、書寫するところの阿彌陀經十萬餘卷に及び、畫くところの淨土變相三百餘壁を超へぬ、唐の永隆二年（我朝天武天皇白鳳十年西紀六百八十一年）歲六十九にして寂したまふ、師の淨土敎に關する著書としては、觀無量壽經疏四卷（玄義分序分義、定善義散善義）、法事讃二卷、觀念法門二卷、往生禮讃一卷、般舟讃一卷の五部九卷あり、以て淨土の法門を發揮したまへり。

獨明佛正意とは、宗祖大師已に龍樹章の前に、顯大聖興世正意とのたまひて、七祖各々佛の正意を顯はすことを歎ず、龍樹は難行易行の道を敎へ、天親は自

利利他の行成就を明し、曇鸞は往還二廻向を示し、道綽亦聖淨二門の判をなして、佛出世の本意を明にす、豈善導獨り佛の正意を明さんや、今獨明と云ふは淨土門内の人師に簡ぶに非ずして、聖道の他師に簡んで獨明といふ、抑も善導大師の出世時代(隋より唐の時代)は支那佛教の全盛期にして、各宗競ひ起り、碩學の師跡を追ふて顯はれ、天台には章安智威の二祖、華嚴には杜順、智儼、賢首の三祖、禪宗には道信、弘忍の二祖、法相には玄奘、慈恩の二祖、律宗には道宣、懷素、法礪の三祖等の諸師輩出し、殊に攝論宗隆盛を極めたり、されば各宗の學者各所信を嚴守し、高下勝劣の爭議を生ずるは、勢の然からしむるところにして、從つて念佛に對する解釋も區々、或者は觀心を以て念佛となし、或者は念佛を以て、別時意と稱し、念佛は直に淨土に生るべき法に非ずとなす、異解紛々、ために淨土の正義を失はんとし、二尊の正意隱れんとす、大師卽ち三世十方の諸佛に證を乞ふて觀經疏を著はし、以て古今の楷定をなしたまふ、四帖疏の最後に曰く

敬白一切有緣知識等余既是生死凡夫智慧淺短然佛敎幽微不敢輒生異解遂卽標心結願請求靈驗乃至某今欲出此觀經要義楷定古今若稱三世諸佛釋迦佛阿彌陀佛等大悲願意者願於夢中得見如上所願一切境界諸相乃至此義己請證定竟一句一字不可加減欲寫者一如經法應知。

と、こゝに於て弘願眞實の法門昭々乎として千歲を照し佛經の眞意炳然として顯はる、故に獨明といふなり、和讃に曰く

大心海ヨリ化シテコソ　善導和尙トオハシケレ
末代濁世ノタメニトテ　十方諸佛ニ證ヲコフ

矜哀定散與逆惡　光明名号顯因緣

此の二句は善導の釋義を述ぶるなり、中に於て始めの一句は玄義分序題門の文に據り給ふ、曰く

言弘願者如大經說一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣也乃至仰惟釋迦此方發遣彌陀卽彼國來迎彼喚此遣豈容不去也

と、これ定散の要門を廢して、一重に弘願眞實に乘ぜしめたまふの文なり、先師道綽和尚は安樂集に於て聖淨二門の判釋を下し、一代佛敎を攝盡したまひしかば、今師は其淨土門内にありて、要門弘願の目を設け、定散二善の自力要門を癈し、觀經の隱說たる弘願眞實の念佛に引入し、十惡五逆の惡人も、大願業力に乘ずれば、二尊の遣喚により、必ず報土に往生を得ることを說示したまへり。和讃に曰く

釋迦ハ要門ヒラキツヽ、　定散諸機チコシラヘテ
正雜ニ行方便シ　ヒトヘニ專修チスヽメシム

矜哀とは矜憐哀愍なり、釋尊の發遣これ矜哀なれども、其源は彌陀の招喚にあり、二尊の矜哀また大師の矜哀なり、定散とは息慮凝心を定といひ、諸種の妄計を息めて、一心に觀念を凝らすをいふ、卽ち觀經の上十三觀の機を指すなり、散とは散善の機といふことにして、廢惡修善を散善とし、三福を修する上六品の機を指すなり。逆惡とは殺父殺母等の五逆人と、殺生偸盜等の十惡の人にして、下三品の惡機を指す、二尊の大悲これ等の惡人にあり、流れて善導の矜哀となり、方便引入して共に報土の勝果を得せしめたまふ、故に矜哀等と歎じ給ふなり。

光明名号顯因緣とは、往生禮讃に述べたまふところの文によりて、宗散逆惡の機が易く彌陀の淨土に往生することを得るの所由を示し、光明名号の廣大なる威德を歎じたまへるなり、禮讃左丁に曰く

諸佛所證平等是一若以願行來收非無因緣然彌陀世尊本發深重誓願以光明名號攝化十方但使信心求念上盡一形下至十聲一聲等以佛願力易得往生

と。光明名号の因緣によりて、衆生攝化の大用は、諸佛の發起せざるところ、彌陀獨特の誓願なり、其名号とは第十七願に

設我得佛十方世界無量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正覺

と誓ひたまへる我名にして、願行具足の名号、光壽の覺体なり、中に於て其光

明とは即ち第十二願に誓ふて

設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由陀諸佛國者不取正覺

と、横に十方世界を照して、能く尋るものなければ、無尋光と稱するなり。光明衆生を照育して、正定之業たる名号を聞信せしむ、されば光明に色光と心光との二ある中にて、色光を調熟の光明ともいふなり、光明の縁と名号の因と相和合して、能く淨土の往生を得せしむる故に光明名号顯因縁といふ、顯とは因と縁とは共に皆な佛力にして、行者の所有に非ざることを示すなり。

尙ほ光号因縁に就いて、宗祖大師はこの禮讃の文を所據として兩重の因縁を立てたまふ、行卷廿八丁左に

良知無德号慈父能生因闕無光明悲母所生緣乖能所因緣雖可和合非信心業識無到光明土眞實信業識斯則爲內因光明名父母斯則爲外緣內外因緣和合得證報土眞身

とのたまひて、初めには名号を父に譬へこれを因とし光明を母に譬へて縁とな

ず、後に光明名号の父母を共に外縁とし、信心を以て內因となして、前後兩重の因縁を立てたまふ、但し光明名号の因縁を以て父母に譬ふることは宗祖の私に非ず、序分義三十丁左に

若無父者能生之因卽闕若無母者所生之緣卽乖等

とあり、又龍樹菩薩の十住毘婆娑論第一卷入初地品にも

般舟三昧爲父又大悲爲母復次般舟三昧是父無生法忍是母般舟三昧父大悲無生母一切諸如來從是二法生

とのたまひて、般舟三昧とは念佛三昧にして則ち名号なり、大悲とは光明にして、二門偈の初めには無尋光明大慈悲とのたまふ、以て光明名號父母の因縁の出づるところを知るべきなり、而して今行卷兩重の釋を伺ふに、初重後重共に報土に往生して眞身を證するの因縁なりといへども、暫く初重は佛より衆生に向ふ邊より述べたまふものにして、我等が往生は實に佛光明の外縁と、佛成就の名號の內縁とによる、若し一を闕くも往生するに由なし、又たとひ光明名號

の父母ありといへども、信心の子種なきときは得證報土眞身の子を得ること能はじ、これ後重を設けたまふ所以なり、今これを圖示すれば

名號―父―因
光明―母―緣　得證報土眞身、、、、初重

名號―父
光明―母　緣
信心―因　得證報土眞身、、、、後重

後重の所明は衆生より佛に向ふ邊に約したまふものにして、佛に光明名號の因緣ありとも、衆生にこれが聞信なくば卽ち止みなん、一度光明名號の威德、身心徹底すれば、報土の眞身は唯信獨達にして、名號は反つて光明に合し外緣となるなり、この時の名號は攝取不捨故名阿彌陀の義によりて、攝取の光明と同格となるが故に能く緣となることを得るなり。かくて信心の內因と光明名の外緣と和合して、定んで報土眞身を證することを得と述たまふもの卽ち後重なり。要するに兩重因緣は衆生往生の因緣を明にし、佛の光明名號の攝化を示し給ふものなり。

開入本願大智海

開入とは開導引入の謂にして、彌陀釋迦二尊共に衆生をして本願海に引入することを明し給ふ。玄義分三丁右序題門には

雖可教益多門凡惑無由偏攬遇因韋提致請我今樂欲往生安樂唯願如來教我思惟教我正受然娑婆化主因其請故卽廣開淨土之要門

とのたまひ、又た

言弘願者如大經說一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿陀彌佛大願業力爲增上緣也

とのたまひて、釋尊は韋提の請によりて定散の要門を說き、彌陀は大經に弘願眞實を顯はして、善惡の凡夫を往生せしむ、大經觀經の二教、二尊意の暫く別異するが如きも、實は然らず、次の文に曰く

又佛密意弘深教門難曉三賢十聖弗測所闚況我信外輕毛敢知旨趣仰惟釋迦
此方發遣彌陀卽彼國來迎彼喚此遺豈容不去也
と、佛の密意は吾人凡愚の測り知るところに非ずと云へども、釋尊の本意、持
無量壽佛名（觀經付屬の文）にあること昭々たり、定散を導いて、本願海に歸入せしむる意
全く彌陀と一致するなり、故に彌陀は彼の土より召喚し、釋迦此の土に發遣す
二尊一致の旨知るべし。和讃に曰く
善導大師證ヲコヒ　定散ニ心ヲヒルカヘシ
貪瞋二河ノ譬喩ヲトキ　弘願ノ信心守護セシム
又曰く
釋迦彌陀ハ慈悲ノ父母　種々ニ善巧方便シ
ワレラカ無上ノ信心ヲ　發起セシメタマヒケリ
又た開入とは開示悟入の意ありて、二尊の開示により、大智海に悟入して法性
常樂を證することを顯はす、序題門に曰く
唯可勤心奉法畢命爲期捨此穢身卽彼證法性之常樂
と、和讃に曰く
煩惱具足ト信知シテ　本願力ニ乘ズレバ
スナハチ穢身ステハテヽ　法性常樂證セシム
本願大智海とは前の句に所謂光明名號のことなり、光明名號は卽ち佛の智慧な
れば大智と云ひ其德量り難ければ海に喩ふるなり、往生禮讃十三丁左には
彌陀智願海　深廣無涯底
と歎したまへり、卽ち本願大智海とは、定散逆惡の齊しく歸するところの、光
明名號別異の弘願を云ふなり。
行者正受金剛心
此の一句は行者の機受を明かす、玄義分一丁左發願偈に
妙覺及等覺　正受金剛心　相應一念後　果德涅槃者
とあるを轉用せられたるものなり、行者とは有緣の人を指す、正受とは梵語の

三昧Samādhiの翻語にして、邪亂を離れたるを正といひ、法を領納したるを受と
いふ、今は聞信の異稱にして、彼の貪瞋二河の前に立ち、心猶豫不定なるとき、
二尊の遣喚を聞いて其の心止み、一心正念にして勅命に歸するをいふ。
金剛心とは金剛は堅固不壞を顯はすの言にして、一切煩惱を離れたる無漏の佛
智に名くるなり、定善義十六丁右に曰く

言金剛者卽是無漏之體也

と、而して衆生が明かに此の佛智を信ずるとき、亦これを金剛心と名く、全く
金剛の佛智を全領するが故なり、この金剛心は行者正受の一念にあれば、正受
卽ち金剛心と云ふことを得るなり、散善義九丁に曰く

廻向發願願生者必須決定眞實心中廻向願作得生想此心深信由若金剛

と、又た宗祖大師は化土卷本七丁に

言教我正受者卽金剛眞心也

と、信卷本二十九丁右には

言能生淸淨願心者獲得金剛眞心也本願力廻向大信心海故不可破壞喩之如
金剛也

とのたまひて、他力廻向なるが故に金剛といふ、我等顚倒の妄念をいふにあら
ず、唯二尊の開導によりて、少しの自計を雜へず、廣大の本願力を聞く一念、
金剛心を得て、報土得證の果を得るなり、可仰、

慶喜一念相應後　與韋提等獲三忍

以下三句は獲信の得益を明かす、中に於てこの二句は現益を明し、後の一句
は當益を述ぶるなり。初の中にて廣喜一念相應後は得益の分齊を標し、發願偈
の相應一念後に當る、慶喜一念相應とは前句の正受金剛にして、慶喜とは信心
の異名、金剛心のことなり、何んとなれば、宗祖は信卷末左二丁に專心を釋し、其
の中に

眞實一心卽是大慶喜心大慶喜心卽是眞實信心眞實信心卽是金剛心

とのたまふ、故に今所謂慶喜とは信後の慶喜に非ずして、信心のことをいふな

り。一念とは信の一念にして、聞信のたちどころに佛智滿入する時間の極速をあらはすなり、此の一念卽ち大慶喜心なるが故に、信卷末丁一には

一念者斯顯信樂開發時尅之極促彰廣大難思慶心也

とのたまへり。相應とは前の正受にして、正受するが故に能く本願と相應す、本願と相應するが故に能く金剛心を得るなり、往生禮讃五丁右には

十卽十生百卽百生何以故無外雜緣得正念故與佛本願得相應故

と述べたまふ。末法五濁の我等は、唯本願相應の金剛心を得ることのみによりて、生死を脫するなり、和讃に曰く

五濁惡世ノワレラコソ　金剛信心ハカリニテ
ナカク生死ヲステハテテ　自然ノ淨土ニイタルナレ
金剛堅固ノ信心ノ　サタマルトキヲマチエテソ
彌陀ノ心光攝護シテ　ナカク生死ヲヘタテケル

後とは得益の時を示す、卽ち一念相應の後に益を得と明かし給ふ、愚禿鈔上九丁右に曰く

信受本願前念命終卽入正定之數文
卽得往生後念卽生卽時入必定文又名必定菩薩文

と、前念後念に分ちたまふものこれなり、但し未だ法を受けずして其利益を得ることなきが故に、先づ法を得て後に其益を得となしたまふ、されど實は信受得益前後あるに非ず、佛智金剛心を得ると同時に獲三忍の利益あり、佛願力の故に、佛廻向の故に、恰も明來りて闇を除くなれども、明來と闇去とは同時なるが如し、獲信得益同時なりと云へども、こは唯佛の知見にして凡夫の知ることころにあらず、慶喜の後念、往生必定の喜び浮び出でて、始めてこれを知る、故に宗祖は相應後とのたまひしものなり。

興韋提等獲三忍とは正しく得益を明かす、韋提希夫人が三忍を得たると等しく、聞信の一念に三忍を得するなり、其の韋提の得忍とは先づ觀經六丁右には

見彼國土極妙樂事心歡喜故應時卽得無生法忍

とあり、同二十七丁右に

得見佛身乃二菩薩心生歡喜歎未曾有廓然大悟得無生忍

とありて、得無生法忍又は得無生忍とのたまふ、無生法とは名號法にして、通途に眞如寂靜を以て無生と云ふとは、大に其の趣きを異にす、卽ち彌陀の修行によりて得たる無量壽佛名なり、忍とは忍許或に耐忍にして、能く無生法たる名號を耐忍するをいふなり、三忍とは喜忍悟忍信忍にして、名號を忍許するときこの三忍あり、序分義三十五丁右に曰く

言心歡喜故得忍者此明阿彌陀佛國清淨光明忽現眼前何勝踊躍因茲喜故卽得無生之忍亦名喜忍亦名悟忍亦名信忍

と、喜とは歡喜にして、信心歡喜して無生忍を得る故に喜忍と云ひ、悟とは廓然大悟にして、明かに佛智を信ずるが故に、佛智を悟解して無生忍を得るを以て悟忍といひ、信とは信心獲得して、無生忍を得るが故に信忍と云ふ、この三忍共に行者能得の信相に名くといへども、其の德旣に佛名號にあり、故に宗祖は獲三忍といひ、以て聖道の無生法忍と區別したまふなり。

韋提希夫人の三忍を獲ると等しく、行者亦三忍を獲るといへども、韋提は觀經第七觀に不捨本願來應大悲の住立空中尊を見て得忍す、今日の行者旣に時を異にして佛を見ることを得ず、唯其名號を聞くのみ、聞見異なるに何ぞ等獲と云ふやといふに、聞見全く相同じ、聞は耳根に依り見は眼根による、聞は名に對し見は體につく、眼耳名体の別ありといへども、名体はもと不二なり、名號のありたけが、佛体なれば、体を見るも名を聞くも共に佛德を領して、我が往生を佛願に任すは全く同じ、韋提は佛体を見て直に決信す、見佛すれども決信せざれば眞見に非ず、韋提は見佛の當体速に我往生を安堵したれば、佛に謝するため接足作禮す、これ信心歡喜の相たなり、今日の我等は佛の名號を聞て信心歡喜す、聞見暫く左右すれども、彼此疑蓋無雜の一心なること少しも異るところなし、これ名体不二なるが故なり、而して韋提の得忍は、吾人の及ばざる上地の得忍に非ずして、佛道修行の初心位たる十信の中にあり、されば善導大

師は同じく序分義三十六丁に

是十信中忍非解行已上忍

と釋したまへり、故に韋提の得忍も吾人の得忍も齊等にして共に平等の忍を得、これ佛廻向に依るが故なり。

即證法性之常樂

此の一句は當益を明し給ふものにして、前述の玄義分の文に

畢命爲期捨此穢身即證彼法性之常樂

とある意にして、宗祖は信卷末十一丁左に

眞知彌勒大士窮等覺金剛心故龍華三會之曉當極無上覺位念佛衆生窮横超金剛心故臨終一念之夕超證大般涅槃

とのべたまへり、即證とは捨身の刹那、臨終一念の夕に大般涅槃を證することなり、法性之常樂とは滅度のことにして、證卷右一丁に曰く

獲往相廻向心行即時入大乘正定之數住正定聚故必至滅度必至滅度即是常樂常樂即是畢竟寂滅寂滅即是無上涅槃

と、常樂我淨は淨土の四德なれども今は略して常樂の二を出す、但し常樂我淨は、凡夫の思惟する如き顚倒のものにあらず、法性自然の德なるが故に殊に法性之常樂といふ、我等凡夫の言慮を絶し、不可稱不可說、神通自在なる證りを云ふなり。

源信廣開一代教　偏歸安養勸一切

以下八句は源信章なり、上來印度中夏の高祖を述べ來りて、これより日域の祖師を讃したまふ。

源信和尙は大和の國葛下郡當麻鄕の人なり、姓を卜部氏といふ、父を正親といひ、母は淸原氏なり、子なきを以て高尾寺に祈ること三年、以て一子を得、これ源信和尙なり、天性聰明にして幼より衆に勝る、七歳にして父を失ひ、後出家して叡峯に登り、天台を學びて其奧義に達す、後年横川に屛居して專ら極樂往生を願じ、ひたすら念佛して、彌陀の本願に歸す、寛仁元年丁巳六月十日

入寂、春秋七十六なり。往生要集六卷の著あり、宗祖これを以て眞宗傳燈の徵こしたまふ、傳へいふ、この往生要集、支那に渡り宋の周文德これを國清寺の經藏に納め、經論釋三段の架中、師釋の段に置くに常に佛經の架にあり、此の集全く佛經と相應するものとなし、人々東に向ひて日東楞嚴院源信如來と稱して拜せりと。和讃に曰く

源信和尙ノノタマハク　ワレコレ故佛トアラハレテ
化緣ステニツキヌレハ　本土ニカヘルトシメシケリ

往生要集六卷これを忽視するときは、相承の聖典に似ざるが如くなるも、こは聖道の者を引いて弘願に入れしめんための施設にして、一部始終廣く十門七十科を分ち、觀經顯說たる第十九願を說いて先づ聖道者を導く、これ廣例なり、中間第五門助念方法に於て、小經顯說第二十願を述べ、自力念佛に入らしむるもの略例なり、第三門極樂證據門に於て、正しく第十八願の念佛を說き、十九二十兩願の機をして他力念佛に悟入せしむ、これ要例なり、此の如く往生要集には廣略要の三例ありて、巧に三願轉入せしめ、大悲弘誓の眞意を發揮せるが故に、祖師の寶典として崇むるところなり、指南鈔に曰く

餘宗ノ人淨土門ニソノ志アランニハ、先往生要集ヲ以テ之ヲ敎フヘシ、ソノユヘハ、コノ書ハモノニ、心得テ難ナキヤフニソノヲモテヲミヘテ、初心ノ人ノタメニ宜ナリ、雖然眞實ノ底ノ本意ハ稱名念佛ヲモテ專修專念ヲ勸進シタマヘリ、善導ト一同也。

と。仰ぐ可し。

源信廣開等の八句中、前二句は自行化他の德を明し、後六句は正しく和尙の要義を述べたまふ、先づ前二句の意は、往生要集最初に曰く

夫往生極樂之敎行濁世末代之目足也道俗貴賤誰不歸者但顯密敎法其文非一事理業因其行惟多利智精進之人未爲難如予頑魯之者豈敢矣是故依念佛一門聊集經論要文披之修之易覺易行

と、和尙長く叡峰にありて、一大顯密の敎法に達し、屢宮中に出入して、講經

の榮を賜り、其名天下に冠たり、後年慈母の訓誡に接し、驚いて出離の要法を求む、一代佛教廣しといへども、末代凡夫の往生は念佛の要法に過ぎたるはなし、これ濁世末代の目足なりと歎じて、念佛門に帰し給ふ、依て文類正信偈には特に此の意を述べて

依諸經論撰教行　誠是爲濁世目足

と、廣く一代教中に於て、念佛の教行を撰び、如予頑魯之者豈敢矣と顯密の教を捨て、ひたへに安養に帰し給ふ故に、廣開一代教偏歸安養と述べたまふなり安養とは前述の如し、今は安養に至るべき法、卽ち往生極樂の教をいふなり、これ源信和尙の自行を述ぶ、自行ありて化他ある故に勸一切と云ふ、一切とは第十八願に所謂十方衆生にして、道俗貴賤、老若男女、善惡を簡ばざるなり、故に一切をすゝめて共に淨土往生を願じたまふ、往生要集下末四十丁左に偈を作りて曰く

已依聖教及正理　勸進衆生生極樂　乃至展轉一聞者　願共速證無上覺

と、宗祖和讃に歎じて曰く

本師源信ヲンコロニ　一代佛教ノソノナカニ
念佛一門ヒラキテソ　濁世末代オシヘケル

と。

專雜執心判淺深　報化二土正辨立

此の二句は和尙が淨土門內に於て、因專雜果報化對辨し、其得失を示して、共に淨土へ導きたまふことを讃するの文なり、往生要集下末十丁左に曰く

問若凡下輩亦得往生云何近代於彼國土求者千萬得無一二答綽和尙云信心不深若存若亡故信心不一不決定故信心不相續餘念間故此三不相應者不能往生若具三心不往生者無有是處導和尙云若能如上念念相續畢命爲期者十卽十生百卽百生若欲捨專修雜業者百時希得一二千時希得三五云々

と、抑も專雜報化の判は、其の源願海經說より出でたるものにして、第十八願の專修正行者は、第十一必至滅度の願によりて、報土の生を得ること明かなり、

而して其の雜修の者とは、第十九第二十の兩願に誓はれたる、修諸功德の自力行者並に自力念佛の者なり、第十九願行者は聖道を捨てゝ淨土に歸したるものなれども、未だ全く自力心を離るゝこと能はず、尙ほ諸善を修して、これを彌陀に廻向して、往生せんと願じ、念佛の正行に歸せざるが故に雜修と名く、第二十願行者は諸善を捨てゝ、念佛に歸すといへども、自の稱功を認め、絕待の他力を知らず、念佛正業を修すれども、未だ自力心を離れざるが故に、貶して雜修と名くるなり、此等の人の往生は卽ち第二十七願の所誓にして、

設我得佛國中菩薩乃至少功德者不能知見其道場樹無量光色高四百萬里者不取正覺

とは、十九二十の少功德者の往生して感得するところの化土の相なり、大經下卷にはこの意を承けて胎生化生を說き、佛智を了せざる自力行者は、半千胎宮の過失あることを示し給へり、

願海經說已に此の如し、これによりて善導大師は正雜二行を判じ、往生正定業の念佛を以て正行となし、余の諸善は悉く是れ雜行となす、散善義八丁右に就行立信の行に就いて曰く

然行有二種一者正行二者雜行言正行者專依往生經行行者是名正行乃至已外自餘諸善悉名雜行

と、正行とは卽ち往生經たる大經に說ける大行を行するものにして、所謂念佛の行者なり、此の念佛は自力心を離れて、一重に佛智を信じ、三不信に反して、淳一相續三心相應の行者なり、雜行とは自力萬行にして、三心相應せず、自力を以て行ずるの人なり、源信和尙この二行を承け來りて專雜二修を判ず、正雜專雜共に一意なれども、終南は暫く行体に約して正雜二行といひ、橫川は行者の修相に約して專雜二修となす、正行を修するものを專修といひ、雜行を修するものを雜修となす、此の理りを示さんがために下末十丁左に先づ導綽禪師の三不二信を引き來りて、次に善導和尙の言を引きたまへるなり。而して經說に基き專修のものは報土に、雜修のものは化土に生ずることを明にして、一切道俗を

勸めたまへり。和讃に曰く、

靈山聽衆トオハシケル　源信僧都ノオシヘニハ
報化二土ヲオシヘテゾ　專雜ノ得失サダメタル

と、今上來述ぶるところを圖示すれば次の如し

（善導）（源信）

第十八願——正行——專修——報土——第十一願
　　　　　　——約行体——約修相
第十九願
第二十願——雜行——雜修——化土——第二十七願

專雜とは專は無二の義にして、餘佛餘善に目をかけず、ひたすらに彌陀を念ずることなり。一多証文十七に

專ハモハラトイフ、ヒトツトイフナリ、モハラトイフハ餘善他佛ニウツルコトナキヲイフナリ。

とのたまひ、又化土卷本十七右には

專修者唯稱念佛名離自力之心是名横超他力也斯即專中之專

とのたまいて、一心一向のすがたを專と云ふなり。雜とは專の反對にして、間雜雜多の義、貶して亦雜穢ともいふ、諸善萬行をまじへ行ずるが故に間雜雜多なり、彌陀の本願に相應せず、自力を以て体とするが故に穢雜といふ、但し一行を行するといへども、已に雜行と名くべきものゝ一行なれば、亦雜行といふなり。執心とは要集下末十一右に群疑論を引きて

皆由懈慢執心不牢固是知雜修之者爲執心不牢之人故生懈慢國也若不雜修專行此業此卽執心牢固定生極樂國

と、執心とは卽ち名號を執受する信心のことなり、雜修の人は三信淳一相應せざるが故に執心不牢といひ、專修の人は三信相應して、心金剛の如き故に執心牢固といふ、判淺深とは其執心不牢なる、定散自力の心を淺といひ、執心牢固なる利他眞實の心を深と判ずるなり。專修の行者は如來の加威力によるが故に十

卽十生百卽百生にして、必定に住すれども、雜修の人は本願と相應せざるが故に報土の往生を得ず、されば和尙は專雜の得失を擧げ、雜修を貶して一重に專修を勸めたまふ、和讃にこの事を讃して、

專修ノヒトヲホムルニハ　千無一失トオシヘタリ
雜修ノヒトヲキラフニハ　萬不一生トノベタマフ

されども、百卽百生の報土に生ずるものは至りて少く、雜修にして化土に生るゝもの多きが故に、亦嘆じて曰く

報の淨土の往生は　オホカラズトゾアラハセル
化土ニムマル、衆生ヲバ　スクナカラズトオシヘタリ

報化二土とは、報土は法藏の誓願に酬報して成れる土なるが故に報土といふ

論註下十廿五右に曰く

應知此三種莊嚴成就由本四十八願等淸淨願心之所莊嚴因淨故果淨非無因他因有也

彌陀の淸淨願心より、成就せられたるもの卽ち報土にして、而かもこれ佛の自境界なれば、すべての迷妄を離れたるが故に眞實報土と云ふ。化土とは無にして忽有を化といふ、自力行者の所感によりて顯はるゝ土なるが故に化土といふなり、佛智不思議を疑ふて、自力の心に執着せるもの、十九、二十の願により、往生を得るといへども、そは行者所感の土にして、彌陀眞實の淨土にあらず、三寶を見ざること五百歲、佛智の不思議を感得し、始めて華開け、佛を拜す、されば化土は眞實究竟處に非らざるが故に假土ともいふなり。

抑も化土を判ずるに諸家不同なり、源信和尙は要集下末十一右に菩薩處胎經を引き來り、懈慢界を以て化土となす、文に

菩薩處胎經第二說西方去此閻浮提十二億那由他有懈慢界國土快樂作倡伎樂衣服飾香華莊嚴乃衆生欲生阿彌陀佛國者皆深著懈慢國土不能前進生阿彌陀佛國億千萬衆時有一人能生阿彌陀佛國

と、但し淨土一家に於いて化土を談ずるに四名あり、懈慢と疑城と胎宮と邊地

となり。其懈慢とは横川の外、宗祖大師も化土巻本末初丁に如菩薩處胎經等說」といひて、懈慢界を出したまふ、これ菩薩處胎經の懈慢界が魏譯大經の化土に能く合し、漢吳兩譯の三輩中の中輩に說ける、中途にして進む能はざる化土邊地の相の如き、菩薩處胎經の不能前進の相と相合す、又大經には疑惑中悔自爲過咎とあり、漢吳兩譯の大經には暫信暫不信意志猶豫無所爲とあるもの、處胎經の執心不牢之人と符合するが故に、懈慢界を以て化土としたまふ。懈慢界とは懈は懈怠にして專修ならず、慢は憍慢にして恭敬なきをいふ、所謂疑惑中悔、暫信暫不信の相なり、界とは他に分つの詞にして、懈慢の人の生ずる處をいふ、故に人に約して名を立て、以てこれを斥するなり、次に疑城胎宮邊地は大無量壽經によりて、宗祖の名けたまふところにして、疑城とは漢吳兩譯の中輩に

心中孤疑、また其城廣縱各二千里

とあるによる、胎宮とは魏譯大經に曰く

彼國人民有胎生者汝復見不對曰已見其胎生者所處宮殿

と、また唐譯如來會には

雖生彼國於蓮華中不得出現彼等衆生處華胎中猶如園苑宮殿之想

とあるによる、邊地とは魏譯大經に

白爲過咎生彼邊地七寶宮殿五百歲中受諸厄也

とあるより出でたるものにして、中に疑城とは疑は疑惑にして、極樂に生ぜんと願ずれども、佛願を疑ふて心決定ならざるが故に疑惑といふ、但し法然聖人の選擇集上四十三丁二心章に生死之家以疑爲所止とのたまへる疑とは其趣を異にす、今は化土に生ずべき自力の三心ありといへども、未だ如來利他の信心を得ざるが故に貶して疑といふなり、城とは成也盛也の訓ありて、成也とは堅固の義なり、此の城に居すれば十惡邪見等の非を防ぎ、三途に墮する恐れなき故に成といふ、城は諸人の住するところにして、恰も器に物を盛りたるが如き故に盛といふなり、依て疑城とは疑惑者の住する城といへる意にして、其の因より名けたるなり。胎宮とは胎は喩に約して名く、宮は宮殿なり、赤子の母胎にあるが

如きに喩へて胎宮といふ、宮殿に生れて身相智惠具はらず、常に宮殿より出ずること能はず、三寶を見聞すること能はざる狀態が、母胎中の子供の如ければなり、但し漢吳兩譯の中輩には於七寶水池蓮華中化生とありて、一見報土化生の如くなれども、既に蓮華の中に化生すといふ、これ眞土の化生に對すれば亦胎生といはるゝなり、龍樹菩薩易行品に信心淸淨者華開則見佛とのたまひて、蓮華化生を談すれども蓮華中といはずして、華開卽見佛とのたまふ、漢吳兩譯の蓮華中化生と異なるところ知るべし、胎宮とは專ら果に約して名けたるものにして、胎卽宮なり。邊地とは眞報佛身の處を去る故に邊といふ、この名は前三名に通ず、化土はこれ報土を離れたるところなるが故に、懈慢邊地といひ、胎生邊地ともいひ、邊地七寶の宮殿ともいふなり、

懈慢疑城胎宮邊地の四名は各々其のあらはすところありといへども、要するに一化土の異名に過ぎず、宗祖大祖は暫く懈慢邊地、疑城胎宮の二を分ちて、二卷鈔上六には

一疑城胎宮　二懈慢邊地

といひ、化土卷本の要門下十八には邊地懈慢といひ、眞門下十九には疑城胎宮とのたまひて、邊地懈慢をば十九願要門行者の生ずるところとし、疑城胎宮は二十願眞門行者の生ずるところとしたまへども、實は十九願行者は其の憍慢により て佛智を信ぜず、彌陀名號以外の諸行を修するが故に本土を離れたる懈慢邊地に生すといひて其の失を知らしめ、眞門行者は念佛を稱へながら、この疑ふ可からざる尊號を疑ふて、自力念佛するが故に特に疑城胎宮とのたまひしものにして、四名共に一化土の名たるや明かなり、されば宗祖大師は化土卷本始めに要眞二門の土を總判して

土者觀經淨土是也復如二菩薩處胎經等說一卽懈慢界是也亦如二大無量壽經說一卽疑城胎宮是也

とのたまふものこの意なり。以て化土の相知るべし。

正辨立とは要集下末最初に天台、淨影、西河、迦才の說を引き來りて、報化

身土を説明し、而して其報化二土に生ずる因に至りては、通途佛教と其談を異にし、報土に生ずるものは第十八願專修念佛の行者にして、化土の往生は第十九、二十兩願の修諸功德者並に自力念佛者の生ずるものとなし、其自力雜修を貶して、專修念佛を勸めたまふ、故に要集下末最初に身土の分齊を論じて後左二丁に曰く須專稱念勿勞分別と、この專雜の二因によりて、報化二土に各生するといふことは、別途不共の談なれば正辨立といふ、然しながら專修のものは報土に生ずるを得、雜修のものは化土の失を招くといへることは、源信和尙の創稱にあらず、願海經說に基き、七祖各々相承したまふこと知るべし。

極重惡人唯稱佛　我亦在彼攝取中

以下四句は別して專修の現益を明かすなり、中に於て極重惡人唯稱佛とは要集下本廿二丁左念佛證據門に曰く

四觀經云極重惡人無他方便唯稱念佛得生極樂

とあるにより讃したまふものにして、觀經下々品の不善業を作り、五逆十惡を始めとし、諸の不善を一として具せざるものなき惡人たりとも、廻心懺悔して選擇本願に乘じ、佛名を稱すれば、すべての罪を除かれて、眞實報土に生ずることを得るなり、此の如き法は他に求むるに一もなく、唯彌陀の本願のみ、專修の法、豈偉大ならずや、和讃に曰く、

極惡深重ノ衆生ハ　他ノ方便サラニナシ
ヒトヘニ彌陀ヲ稱シテゾ　淨土ニムマルトノヘタマフ

但し稱佛といへども、稱に稱功を見るにあらず、信海より流出せる稱名にして、全く信心と不離不二の稱名なり、此の稱名は能く衆生の一切無明を破し、一切の志願を滿足せしむる、廣大なる稱名なるが故に、たとひ五逆十惡の惡人女人たりとも、專修專念なれば安養に生して、無上涅槃の極果を得るなり。

我亦在彼攝取中とは、次下二句と共に、要集中本十三丁右三雜略觀を述べたまふ文により讃す、曰く

彼一一光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨我亦在彼攝取之中煩惱障眼雖

不能見大悲無倦常照我身

と、我亦在彼攝取中は正しく專修の益を明す、前句は其の益を得べき專修を先づ述べたまひしなり、夫れ阿彌陀眞身の光明は第十二の別願に酬報したるものにして、雜修の蒙る光明にあらず、正しく專修稱名の行者の被むるところなり、故に釋尊は觀經に於て阿難に付屬するに、觀法を以てせず、光照の益ある持無量壽佛名を以てしたまへり、和尙長く叡峯にありて出離の要法を求め、始めて念佛の法門に歸し、攝取不捨の光明中に入り、慶喜に堪へざるが故に、また凡聖等しく光照を被ることを示さんために、我亦在とのたまふ、乍然こは和尙のみならず、偈主宗祖大師も亦同感にて此の偈を作り給ひしなるべし。攝取とは上述するが如し、所謂觀經の念佛衆生攝取不捨なり。

煩惱障眼雖不見　大悲無倦常照我

此の二句は先づ疑を擧げて、後大悲の光明を顯はす、要集に所謂

煩惱障眼雖不能見大悲無倦常照我身

にして、現に攝取の光明を見ざれば、自身の往生を疑ふは、誰人も思惟するところなり。されど生死即涅槃は淨土に生じての上の證知なり、捨命の夕までは煩惱の止むことなく、ために眼を障へられて見ずと云へども、佛には不斷光の大悲ありて、不斷常住に我身を照したまふ、譬如日光覆雲霧雲霧之下明無闇の句と對照して知るべし。高祖は和讃に嘆じて曰く

煩惱ニマナコサヘラレテ　攝取ノ光明ミサレトモ
大悲モノウキコトナクテ　ツネニワカ身ヲテラスナリ

と、以上源信章竟る。

本師源空明佛敎　憐愍善惡凡夫人

以下八句は源空章にして、始め二句は總して釋義の由て生ずるところを歎じ、後六句は正しく釋義を述ぶるなり。

源空聖人は美作の國久米郡稻岡庄の人なり、父は粢の押領使なる漆間時國にして、母は秦氏の女なり、長承二年癸丑四月七日（皇紀千七百九十三年西紀千百三十三年）に誕生、四五歲に

して已に念佛せられたりと、九歳の時父時國は、明石の源内武者定明の夜討のために殺さる、其の死に臨み遺言して曰く、「我死去の後、世の風儀に隨ひて、敵を恨ることなかれ、これ偏に先世の報なり、若此讎を報んと欲はゞ、世々生々互に害心を懷て、在々所々に輪廻絶つことなからん、生ずるものは皆死を悲む、愁憂更に限なし、我此疵を痛む、人又何ぞ痛さらん、我此の命を惜む、人豈惜さらんや、我が情をもて、人の思を知るべし、然則一向に專自他平等の濟度を祈り怨瞋悉く消て、親疎同菩提に至らんことを願ふべし」と、遺訓肝に徹し、翌年則ち永治元年の歳末に、當國菩提寺觀學の弟子となる、性峽爽にして能く經書を覺ゆ、天養二年の春、歳十三にして叡峰に入り、功德院皇圓阿闍梨の許にありて授學し、出家受戒す、居ること三年、十六歳にして、始めて黑谷の禪室に入り、慈眼房叡空上人に師事す、後聖道の難行たることを知り、法は深妙なりといへども、我が機すべて及び難し、經典を披覽するに、其智最も愚なり、行法を修習するに、其心翻て昧し、まことに惡趣に沈んことを恐れ、十八歳黑谷の報恩藏に入りて、一切經を披見すること五遍、猶いまだ出離の要法を得ざりしが、一日善導大師の觀經散善義に、一心專念彌陀名號とある文を見て、感悅髓に徹し、始めて淨土の法門に歸し、たちところに餘行を捨てゝ、一向專修念佛門に入る、時に承安五年四十三の時なり、爾來日課七萬遍の念佛を稱へて淨土往生を期し、ひとへに念佛の弘通に勤む、後年南北の學徒の讒訴によりて讃岐國小松の庄に左遷せらる、時に建永二年二月二十七日なり、同八月勅免の宣旨あり、後建曆元年十二月十二日帝都に歸り、翌年病を得て、正月廿五日西方往生を遂げたまふ、時に春秋八十なり、往生の折り種々の寄瑞ありしと、和讃に曰く

本師源空ノオハリニハ　光明紫雲ノコトクナリ
音樂哀婉雅亮ニテ　異香ミキリニ映芳ス
道俗男女預參シ　卿上雲客群集ス
頭北面西右脇ニテ　如來涅槃ノ儀ヲマモル

と、以て其の相を想見するに足る。

聖人の著述としては、選擇本願念佛集上下二卷を始めとして、漢語に和語に其數枚擧に遑あらず、和語燈錄一卷漢語燈錄二卷にこれを集めたり、中に於て選擇集上下二卷は、九條關白月輪兼實公の請に依り、書かれたるものにして、念佛の奥義を極め、一部十六章段ありといへども、要するに本願を經にし、經釋を緯となして、淨土眞宗の淨妙なる錦を織り出せる、無上甚深の寶典なり、宗祖の教行信證文類六卷は、蓋しこの集說を擴充せられたるものなり、故にこれを嘆じて、化卷末(四十左)には

選擇本願念佛集者依禪定博陸(月輪殿兼法名圓昭)之教命撰集眞宗簡要念佛奥義攝在于斯見者易諭誠是希有最勝之華文無上甚深之寶典也

とのたまへり。

明佛教とは明は了知をいひ、佛教とは聖淨二門の聖教なり、聖人の聰敏なる學解は、既に叡峯にありて、天台三大部を皇圓阿闍梨に禀け、三箇年にして、六十卷の奥義に達し、慈眼房叡空上人よりは眞言戒律の血脈を承け、三論の秘書悉くこれを寛雅律師より付屬せられ、法相の法義また藏俊僧都に學び、一代佛教通ぜざるなく、殊に報恩藏に入りて大藏を閲すること五遍なり、されば宗祖は文類聚正信偈には源空曉了諸聖典とのたまへり、かくて一代佛教の終歸は念佛にあることを究め、以て他力本願を弘めたまふ。

憐愍善惡凡夫人とは、善人は自の少功德に着して本願他力の眞意を知らず、惡人は自の罪惡に引かれて生死を出づるに由なし、聖人卽ちこれを憐みて、眞宗を興行し、彼等眞宗念佛を知らざる者をして、彌陀の法水に浴せしめたまふ。即ち憐愍は慈悲よりあらはれ、前句の明佛智は智より出づ、悲に非ざれば知れども言はず、智に非れば言へども饒益するところなし、悲智兼備して始めて能く衆生を導くことを得、故に今其の聖人の悲智相兼を歎じ給ふなり。

眞宗教證興片州　選擇本願弘惡世

以下釋義を述ぶる中に於て、この二句は立宗を歎ずるなり、眞宗とは眞は眞

實にして、方便に簡ぶ卽ち十九二十の方便假門に異りて、第十八の念佛成佛をあらはす、宗とは宗旨にして大經難思議往生なり、これを以て眞實の宗とす、眞宗とは詳には淨土眞宗と云ふ、淨土門內に眞十假十九二十ある中の眞なれば、淨土眞宗といふ、末燈鈔四丁に曰く

淨土宗ノナカニ眞アリ假アリ眞トイフハ選擇本願ナリ假トイフハ定散ニ善ナリ選擇本願ハ淨土眞宗ナリ。

と、又唯信鈔文意四十五丁には

眞實信心ヲウレハ實報土ニムマルトオシヘタマヘルヲ淨土眞宗トストシルヘシ

と、然るに選擇集にありては何處にも、單に淨土宗といふて、淨土眞宗の名なし、是れは選擇集は專ら選擇本願を顯揚するを以て其の要となし、方便に亘らざるが故に、假に對して別に眞と立てず、淨土宗卽ち是れ眞宗なり、されども宗祖の特に眞宗との給ふもの所以なきにあらず、抑も元祖聖人時代には多くの門弟ありといへども、未だ異義を稱ふるものなかりしが、滅後に至りては或は一機一生の西山あり、或は二機一生の鎭西等ありて、十九二十の願意を主張するものあるに際し、宗祖は特に選擇集の眞意を得て、元祖の親授に預り、淨土の眞隨を傳へたまふ化卷末四十丁右に

元久乙丑歲蒙恩怒兮書選擇同年初夏中旬第四日選擇本願念佛集內願字並南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本與釋綽空字以空眞筆令書之

と選擇集の親授を述べたまふは、一器寫瓶の相傳を示したまふなり。要するに淨土眞宗とは淨土卽眞宗にして、元祖聖人の淨土宗は卽ち高祖の眞宗なり、元祖の念佛爲本を其盡相承して、念佛成佛是眞宗とのたまふ祖意、全く此處にあり。又淨土の眞宗といふときは所謂淨土門內に十九二十兩願の假門と第十八願の眞實門とあるが故に、其の假に簡んで淨土中の眞宗とのたまふなり、和讃に曰く、

智慧光ノチカラヨリ　本師源空アラハレテ

淨土眞宗ヲヒラキツヽ　選擇本願ノヘタマフ

教證とは詳しくいへば教行證の三法なり、其の中眞實行は次の句に選擇本願として出だせる故に、唯教證とのたまふ、抑も元祖の法義は一願建立にして、一第十八願を以て念佛往生の願と定め、念佛爲本を以て標榜したまふが故に、教行證の三法とす、然れども其行たるや信を離れたるものに非ざるが故に、集上三心章には

念佛行者必可レ具二足三心一之文

と標して、念佛には必ず三心の具足せることを明し、終りに至りては明かに往生の得不は信疑にあることを決判したまへり、故に此の念佛行中には他力の信を攝せること明了なり、宗祖大師其の奥旨を探り得て、第十八願より五願（十二、十三、十四、十八）を開示し、行中より信を出して教行信證の四法を建立したまふ、四法といふも三法中の四法にして、全く不二なり、故に高祖も本典の中に或は教行證の三法といひ、或は教行信證の四法とのたまふ、三法四法は二而不二にして、元祖の念佛爲本も、高祖の信心正因も決して異りたるものにあらずと知るべし。

教とは聖人下に被るの言にして、釋尊の教はこれ下に被るの言なれば、一代五十年の說法は悉く教と名くべしといへども、今は他の權假方便の教に簡ぶが故に特に眞宗教といふなり、元祖この眞實教を定めて集上左二丁二門章に曰く

正明二往生淨土之教一者三經一論是也三經者一無量壽經二觀無量壽經三阿彌陀經也一論者天親往生論是也

と、三經一論を以て淨土の眞實教としたまへり、但し三經といへども、觀小二經は其の隱彰の眞實弘願を取りて、顯說の要眞二門を取りたまはざることは集下廿三丁左付屬章の文に依て明かなり、曰く

凡案二三經意一諸行之中選二擇念佛一以爲二旨歸一

と、高祖は本典教卷に於いて眞實教を定むるに、大無量壽經是也と一大經を以てしたまへるは、暫く觀小二經の顯說を以て化身土卷を明し、要眞二門に配當したまふが故なれども、二經の隱彰に至りては、これ大經の眞實法門なるが故

に教卷五丁左には

十方稱讃之誠言機純熟之眞敎也

とのたまひて、觀小二經の隱彰は共に弘願眞實の敎とし給へり、是れ依りて見れば元祖高祖共に同意なること明かなり。證とは如來の敎說によりて得たる大行により、報土の往生を得て、大涅槃に住するを眞宗の證となす、證は字彙に驗也とあり、翻迷の驗として淨土往生を得ることを顯はす、集下八丁左約對章に曰く

念佛者捨レ命已後決定往二生極樂世界一餘行不定

と、念佛行者は捨命の夕。卽時に一乘究竟の妙果を超證す、これ第十一必至滅度の願によるなり、而して衆生の所入の處たるや、第十一十二の兩願に酬報せる、光明無量壽命無量の覺体に依りて成就せられたる身佛土なり、而かも淨土の往生人は其覺体と全同にして、寂靜無爲の眞證に住し選相攝化の妙用を得なり、豈讃仰せざるを得んや。興片州とは興は起又は盛なり、片とは木片又は

瓣のことにして小きことを顯はす、日本一州は所謂廣渺たる大平の洋に浮べる一小島なり、故に木片或は瓣に喩へて片州といふ、この一片州にして能く淨土眞宗の興起隆盛を見るに到りたるは、一重に法然聖人の威力によることを嘆じたまふなり、和讃に曰く

善導源信ス、ムトモ　本師源空ヒロメスハ
片州濁世ノトモカラハ　イカテカ眞宗ヲサトラマシ

實に源空聖人の淨土開宗なくば、上六祖の居ますありといへども、何んぞ吾人の聞くことを得ん、源信和尙は異國の師にあらずといへども身を天台に置く、元祖獨り比叡の山を下りて古水に居し、廣く在家出家のために念佛の一法を勸めたまふ、眞宗敎證興片州は全く元祖の力なり、仰ぐ可し。

選擇本願とは選擇本願念佛にして第十八願のことなり、選擇集十四丁巳下本願章に大經を引き來りて詳しく選擇の相を示したまふ、但し魏譯大無量壽經には攝取といひ、異譯の經たる大阿彌陀經並に平等覺經には正しく選擇といふ、選擇と

攝取其名は異なれども義は一なり、選擇するには必ず、善を取り惡を捨てゝ取捨せざる可からず、故に集上十五には

此中選擇者卽是取捨義也謂於二百一十億諸佛淨土中捨二人天之惡一取二人天之善一捨二國土之醜一取二國土也好一也大阿彌陀經選擇義如レ是雙卷經意亦有二選擇義一謂云二攝取二百一十億諸佛妙土淸淨之行一是也選擇與二攝取一其言雖レ異其意是同

とのたまひて、選擇攝取は言別意同とした まへり。此の選擇の言は一應四十八願總じて選擇といはるれども、再應これを論ずるときは第十八願にのみ名くべきなり、四十八願多しといへども佛の本意は唯第十八願にあり、故にこれを選擇本願といふ、本願とは本は根本の謂にして枝末に對するの言なり、第十八願を本とし他の四十七願を末とす、又は第十八願を王とし他の願を臣とす、集上廿丁特留章に此の意を述べて

凡四十八願皆雖二本願一殊以二念佛爲一往生規一故善導釋云弘誓多門四十八偏標二念佛一最爲親人能念佛佛還念專心想佛佛知レ人已上故知四十八願之中既以二念佛生之願一而爲本願中之王也

と、第十八願を以て王本願とし、これを選擇本願と名けたまふなり、但し善導大師が玄義分十九丁左に彌陀の報身を釋するに當りて

法藏比丘在世饒王佛所、行菩薩道時發、四十八願一一願言若我得佛十方衆生稱我名號願生我國下至十念若不生者不取正覺

と、四十八願一々に十方衆生稱我名號等の文あるが如くのたまへども、これは願意を探りて示したまふものにして、もとより第十八願を除いて他の四十八願は一第十八願に歸入せしめんが爲に將た十八願を莊嚴せんがための願なれば、其の根底には第十八願の橫はれるや明かなり、善導大師は此の意味よりかくのたまひしものなれども既に根底が第十八願なれば他の四十七願は枝葉にして、本願の臣なり、これを以て選擇本願の名は第十八願たること知る可し。而して其選擇本願の物柄は念佛にして、選擇攝取の名號大行なり、此の大行を得たるの念佛なれば、これ全く他力の念佛にして、少しも行者の造作を雜へざれば不

廻向之行と名く、衆生の稱名其儘法体大行の顯現なり、選擇集一部の所明全く此の他力念佛にあり、故に之れを選擇念佛集といふ。弘惡世とは弘は弘通にして惡世とは五濁惡世なり、五濁の相は前述するが如し、選擇本願の片州濁世に至りて、益々隆んなるは法の廣大威力によるとはいへ、又元祖の弘通によらずんばある可からず。

還來生死輪轉家　決以疑情爲所止

以下四句は別して選擇本願を顯はし、信疑決判して、以て本願の尊高を明すなり。集上四十丁に曰く

當知生死之家以疑爲所止涅槃之城以信爲能入

と、生死迷界に尚ほ止りて輪廻するは、これ本願を疑ふによる、涅槃寂靜の實報土には唯信心のみを以て生ずることを示したまふ、此處に所止又は能入とあるは、普通にいふところの能所の關係にあらず、疑は生死に止むるところのものなれば所止といひ、信心は能く淨土に入らしむるが故に能入といふなり

還來とは往還去來の謂にして、生死輪轉家を往還去來することなり。生死輪轉家とは三界のことにして、迷界なり、俱舍論には生死輪轉の相を示すに四有を以てせり、即ち死有、中有、生有、本有にして、捨命の一念を死有となし、死後他の生を受くる迄の間を中有とし、中有より他生を受くる刹那を生有とし、生有より死有に至る間を本有として、死中生本の次第に輪廻して止むなきを四有の輪轉といふ、四有はこれ生死に攝す、生は以て死を有し、死は生を具して六道輪轉止むことなし、これ凡夫所住の處なるが故に喩へて家といふ。決以疑情爲所止とは其の輪轉の因は疑情の障にありとす、但し通佛教の上にありて、迷の因を論ずるときは无明煩惱にあること明なり、今疑を以て生死の所止となすとは、別途不共の所談にして、吾人の生死流轉するは無明煩惱にありといへども、吾等の往生は已に々々彌陀の正覺と共に成就せられたり、然るに尚ほ現に迷ひつゝあるは、これ一重に疑あるによる、安心決定鈔末二十八丁に曰く

ワカチカラモサトリモイラヌ他力ノ願行チヒサシク身ニタモチナカラヨシナ

キ自力ノ執心ニホタサレテムナシク流轉ノ故郷ニカヘランコトカヘスカヘスモカナシカルヘキコトナリ。

と、過去世に於いて多佛に遇ふといへども、本願を疑ひしにより、生死を出づる能はざるなり。但し此の信疑決判の文は、正しく生死の因を論ずるにあらずして、往生の得不を信疑を以て判じ、唯信生因の旨を示して、淨土の往生を勸めたまふなり。而して宗祖大師は和讃に

罪福フカク信ジツヽ　善本修習スルヒトハ
疑心ノ善人ナルユエニ　方便化土ニトマルナリ

このたまひて、要眞二門の化土往生をも疑情によるとしたまふ、然るときは化土も今所謂生死の家に攝すべきやといふに、然らず、要眞の行者は自力の三心ありといへども未だ絶對自力を知らず、故に貶して疑中に攝し、以て自力の三心に墮することを誡め、勸信誡疑したまふなり、疑情とは明信佛智の反對にして、佛の本願力を聞くといへども、自力を以て思慧し、狐疑猶豫して信ぜざる不了佛智をいふなり。所止とは前述するが如し。

速入寂靜無爲樂　必以信心爲能入

此の二句は前の疑情に對して、唯信獨達の旨を明したまふなり、速入とは速は頓速にして、入は生入なり、淨土の往生は屈伸臂頃卽生西方にして、間髮を入れざる横超卽證の旨を顯はすこれ聖道の漸入の對するなり。寂靜無爲樂とは涅槃の異名にして、定善義八丁右に

西方寂靜無爲樂畢竟逍遙離二有無一

と、又法事讃下十三丁右には

極樂無爲涅槃界隨緣雜善恐難二生一

とのたまふものこれなり、寂靜無爲とは涅槃の德にして、一切煩惱の喧騷を離れたるを寂靜といひ、凡夫の造作を離れ、佛の眞証なるが故に無爲といふ、涅槃經に曰く

猶如二涅槃亦名二無爲一